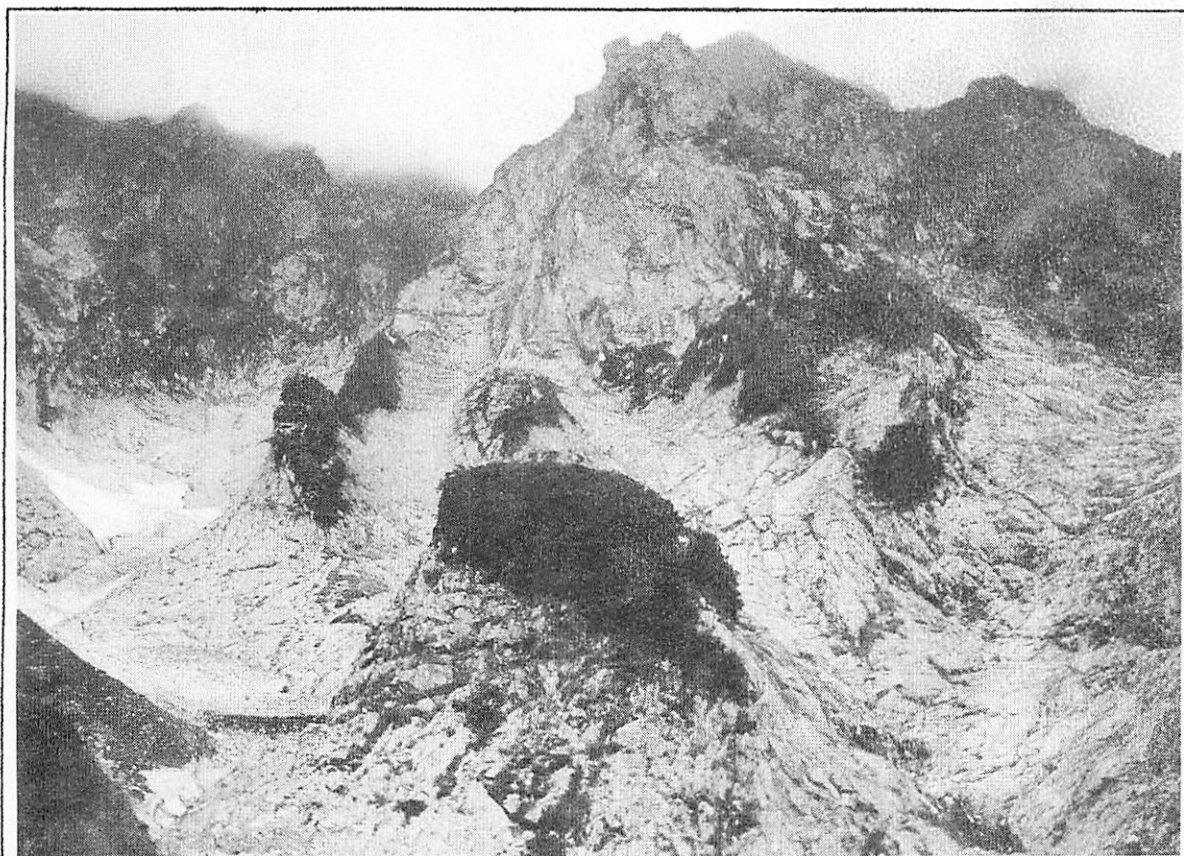


北関東の山無し県 茨城のクライマー集団の会報

R&V_{45. 46}号

2002年4月～2002年9月



ACC-J 茨城

目指せヒマラヤ!!

ROCK AND VALLEY 2002春&2002夏

No45 & No46



一ノ倉沢南稜フランケ登攀中の吉田 Photo by Sasahira

雪、岩、沢に青春をかけた若人の記録
アルパイン・クライミング・クラブ・オブ・ジャパン・茨城

百名山ブームに思う

百名山がブームになって久しいがその間、私の身近でも百名山を踏破した人が数人います。その人達は更に次の目標に向かって山に登っているが傍から見ていても遅しく感じます。山登りに限らず何事も目標を持ち、その目標に向かって進んでいる人々は生き生きしているし、話を聞いてもその目が輝いています。先程の百名山は深田久弥氏が選んだ百の山を日本百名山と称して皆が目標にしているらしいが、各自が心に持っている百名山・百名溪・百ルートと、何でも目標にして山に登る事は良い事と思う。実は私も山スキー百名山を目指していますが、先述の日本百名山とは異なり自分で決めた目標です。まだ20ルート位しか達成していませんがまだ沢山残っていると先が楽しみです。次元は異なるが無雪期のアルパインルート20本。積雪期のアルパインルート10本を年間目標にして自分に課しているクライマーが居ると聞いた事があります。アルパインルートにしるピークハントにしる自分の目標を持って登る事は必要と思うし、私も山に対しては何歳になっても目標を持っていたと考えている。百名山に関して皆が一番関心を持っているのが、百名山を登るのにどのくらい費用が掛かるのかと思うが、百名山を達成した人の記録を見ると交通費と宿泊費のみで総額160万円と記されているが、飲食費を含めると200万円以上を要すると推測します。これが安い高いかはそれぞれの判断ですが私は自己の目標達成の為に安いと思います。百名山ブームになったお陰で登山用品店が身近に開店しその店には多様な山用品が並んでおり、需要が増えたので価格が以前と比較して安くなったメリットがあり、我々もその

メリットを甘受できるのが嬉しい此の頃です。私が山に登り始めた頃は近所には登山用品を扱っている店が少なく、東京の登山用品専門店まで買い物にいったものでした。当時の私の収入と比較して登山用品は価格が高かったので、ザック・衣類等は自分で修理しながら大事に扱ったものです。雨具&ダブルヤッケ等は継ぎ接ぎだらけのものを着ていた記憶があります。今はそのような事もなく百名山ブームに感謝感謝です。しかし、深田久弥氏の百名山に選ばれなかった山の中にも名山は沢山あるので、それらを含めた百名山を自分で選んで目標にするのも良いかも知れません。何れにせよ目標を持って山に登る事が大切な事と思います。目標達成の為に様々な努力が必要です。体力・気力・持続力・資金力等々綿密な計画を立てて遂行すれば誰でも達成可能な目標だと思います。とは言っても昨年の山での遭難事故のうち中高年が占める割合は約90%との事。百名山ブームで中高年が無理な計画を遂行するので山での遭難事故は増加傾向にあるという。一旦山の遭難事故を起こせば年間3日かしか山に登らない人でも20年の経験があれば山のベテラン？。その反面年間50日山に入っている2年の経験しかなければ初心者？と報じられるそう。自称山のベテラン程当てにならないものはないと肝に銘じておこう。

(木村 記)

《目 次》

2002年 春号 4月～6月 2002年 夏号 7月～9月 ACC-J 茨城

巻頭言	(木村) 1
目次	 2
集会報告	 3
山行報告	 4
御岩山 岩トレ	(渡辺) 5
越後駒ヶ岳 山スキー	(名雪) 6～7
空木岳	(吉田) 7
山スキー入門 富士山の巻き	(江平) 8～9
2002年GW東北山スキー巡業	(菊地) 9～11
尾瀬大滑降 (燧ヶ岳山スキー)	(菊地) 12～13
遥かなる源次郎尾根	(本図) 14～15
北ア立山 山スキー	(笹平) 15～17
富士青木ヶ原樹海横断	(本図) 17～18
清津川棒沢	(木村) 19
破風山	(渡辺) 20
知床半島一周の旅	(本図) 21～28
会津三ッ岩岳	(渡辺) 29
錫杖岳三ルンゼ	(吉田) 30
苦土川井戸沢	(名雪) 31
柿其川	(菊地) 32～33
坪川三泉沢ゴルジュ	(本図) 33～34
万太郎谷	(木村) 36～37
黒部上ノ廊下	(渡辺) 37～39
東黒沢+白ヶ門沢	(木村) 40～41
剣岳～穂高岳大縦走	(石川) 42～54
清津峡ゴルジュ	(本図) 55～57
谷川岳一ノ倉沢南稜フランケ	(吉田) 58
湯檜曾川袈裟丸沢右俣	(木村) 59
北岳バットレス	(渡辺) 60～61
越後駒ヶ岳オツルミズ沢	(名雪) 61～64
北海道 北の山旅放浪記	(笹平) 65～77
友好山岳団体の月報・会報・その他	(本図) 78～80
編集後記	(木村) 81

表紙……谷川岳一ノ倉沢 Photo by Sasahira

集会報告

〔於 土浦 Gusto〕

.....〔4 月〕.....

4月3日

出席者 本図、木村、菊地、吉田、渡辺、

4月17日

出席者 本図、木村、渡辺、笹平、吉田、中島、石川

.....〔5 月〕.....

5月8日

出席者 本図、木村、菊地、吉田、渡辺

5月22日

出席者 本図、木村、菊地、吉田、笹平、鯉河、石川

.....〔6 月〕.....

6月5日

出席者 本図、木村、菊地、吉田、渡辺、笹平、石川

6月19日

出席者 本図、木村、菊地、吉田、笹平

.....〔7 月〕.....

7月 3日

出席者 木村、吉田、渡辺、

7月 17日

出席者 本図、木村、菊地、吉田、渡辺、鯉河

7月 31日

出席者 本図、木村、菊地、吉田、渡辺

.....〔8 月〕.....

8月 21日

出席者 本図、木村、菊地、渡辺、笹平、吉田

.....〔9 月〕.....

9月 4日

出席者 本図、木村、菊地、吉田、笹平、渡辺、大久保

9月18日

出席者 本図、木村、菊地、吉田、笹平、渡辺、大久保

.....

山行報告

《 2002年4月～9月 》

.....[4 月].....

4月14日	御岩山岩トレ	L本図、吉田、渡辺
4月21日	越後駒ヶ岳	L木村、名雪、松原、吉田、鈴木
4月28～4月29日	空木岳	L本図、木村、菊地、吉田

.....[5 月].....

5月3日	富士山	L木村、中島、江平
5月4日	鳥海山	L木村、名雪、江平、菊地
5月6日	月山	L木村、名雪、江平、菊地
5月7日	燧ヶ岳	L木村、名雪、江平、菊地
5月3日～5月5日	北ア黒部	L本図、笹平、渡辺、松原
5月6日	室堂～タンボ沢	L笹平
5月9日～5月10日	北ア立山 山スキー	L笹平
5月26	富士山樹海横断	L本図、木村、笹平、名雪、松原、金沢、吉田

.....[6 月].....

6月15日～6月16日	清津川棒沢	L木村、笹平、名雪、松原
6月16日	破風山	L本図、木村、渡辺、

.....[7 月].....

7月3日～7月8日	知床半島一周	L本図、笹平、菊地
7月7日	三岩岳	L木村、名雪、渡辺
7月14日	三ッ峠	L本図、吉田、渡辺、
7月20日～7月21日	錫杖岳三ルンゼ	L本図、吉田、渡辺、松原
7月28日	苦土川井戸沢	L名雪、渡辺

.....[8 月].....

8月3日～8月4	柿其川	L本図、菊地、渡辺、名雪、三瓶
8月11日	三重泉沢	L本図、吉田、渡辺
8月10日～8月11日	万太郎谷	L木村、名雪、金沢
8月14日～8月18日	黒部上ノ廊下	L笹平、渡辺、松原
8月15日～8月16日	東黒沢&白ヶ門沢	L木村、名雪、金沢、鯉河
8月31～9月1日	清津峡ゴルジュ	L本図、高橋

.....[9 月].....

9月1日	谷川岳一ノ倉沢南稜フランケ	L笹平、吉田
9月1日	檜曽川袈裟丸沢	L木村、名雪、金沢、軽部
9月21～9月23日	北岳バットレス	L笹平、渡辺
9月21～9月23日	越後駒ヶ岳オツルミズ沢	L本図、木村、名雪、松原、高桑

6月23～8月5日	北海道 北の山旅	L笹平
-----------	----------	-----

御岩山 岩トレ

2002. 4. 14

パーティー L 本図一統、吉田 仁、渡辺聡子

ゴールデンウィークに備えてのアイゼントレとついでにもう一つのことをするために御岩山へと向かった。岩場までのアプローチは20分くらいなのだが、今回はもう一つのことをしていたらやたらと時間がかかってしまい、2時間近くかけて広場までやってきた。いつもは貸し切り状態の岩場だが今回は先行さんがいるらしく、荷物がデポしてあった。我々も遅まきながら準備をしていると、登山道からそろそろとハイカーさんの団体様がやってきたものだからまあびっくりである。「いったい何だあ？」と思って聞いてみるとこの山は花の百名山にはいっており、今が盛りの『イワウチワ』を見に東京から観光バス2台でやってきたとのことであった。ちなみにとお値段を聞いてみると温泉がついて7000円だとのこと。金銭感覚は人それぞれなので何ともいえないけど私なら出さないねって感じかな。それにしてもおじさまおばさまの団体様の賑やかなことといったら…。私もどちらかというとな賑やかな方でいつも「やかましい。だまって登れ。」と言われるが、私の比じゃあないね。そんなこんなで準備を終えたので岩場へと行くとなんと先行さんは白石さん達だった。お久しぶりです、と挨拶を交わし早速クライミングを始める。各々が3本くらい登り、もう一つのことをしながら別の岩へと行き何本か登って、さらにもう一つのことをしながら将棋の駒のある岩へと移動した。初めて御岩山へ来たときにはクライミングシューズを履いても将棋の駒はいっぱ

いっぱいだったよなー、なんて考えながらプラブーツにアイゼンでそれぞれ登った。日も傾いてきたのでここでやめにして駐車場へと戻った。アイゼントレが主たる目的だったのかそれとももう一つが主だったのか『はてな？』ではあったが楽しい一日だった。

こんなにくどくど書いた『もう一つの事』が何かというと、それは絶対ないしょ。

(渡辺 記)



越後駒ヶ岳山スキー

2002. 4. 21

パーティー L 木村 一、名雪博二、松原丈夫、吉田信一 (ACC-J東京)
鈴木正春 (紫峰山の会)

4月20日土曜の晩例によって川越合同庁舎集合21:00時、車で一路関越高速を小出に向かい、奥只見シルバーラインは、もう開きっぱなしで北の又川銀山平へ、枝折り峠への通行止めのバーをまたいで乾いた道路上にテントを張りまずは完登前祝い。

今まで越後駒には、スキーで2回チャレンジしているが敗退している、1度は3年前駒の小屋の直前で敗退した、この時はもう駒の小屋が目の前に見え、そこで人が話している声が聞こえる近さだった、小屋から急斜面を降りた直ぐ下の緩斜面迄登って居たのだ。そして何でそこから戻ってしまったのか？未だにはっきりとは原因が掴めない、タダ何となく、ぼーっとして、他のパーティー、単独か、2~3人パーティーから離れてしまったヤツか？が敗退した、これをきっかけにタダ何となく我々も敗退してしまった。ちょっと天候が荒れる兆候は確かにあった、しかし敗退するほどの悪天候ではなかった、登れない理由は何一つ見いだせない。今から考えると正に痛恨の極みである。

それから1年後今度は春も遅くなってトライしたが、雪が少なくなって居るので谷の雪渓を詰めていったが上部で雪が切れて急斜面に阻まれこれも敗退した。考えてみれば私の登山は敗退に続く敗退の繰り返しではなかったのか？私の登山、岩登り、雪山、沢登り、山スキー全てが敗退で塗りつぶさ

れている。強いて言えば人生そのものが敗退している。

そして生業の仕事自体も敗退の様相を呈してきている。将に敗退の人生そのものを歩んできてしまった。こうなったら後はヤケクソの人生を歩むだけだ！！、、、、、、、、

そう言えば小学校の頃検便の提出日にウンコが出ないので、翌日ウンコを取ってマッチ箱に入れて持っていったら、もう出さなくて好いと言われた。学校の帰りに八百屋が店の前で段ボールやミカン箱を燃やしている所へ検便のウンコを投げ込んで帰ってきた事があった。

私の人生は子供の頃からヤケクソだったんだなと、しみじみと感じる。そして21日の朝、朝食抜きで出発、これが早い、朝食を喰うか、喰わないか、が朝の出発時間に大きく影響してくる。私もすでに齢(よわいと読む)57歳になった、オギャーか、ブンギャーかは定かな記憶はないが、そうして生まれて57年間朝、昼、晩とメシを喰い続けて、その間メシを喰わなかった覚えは、1年、、、、イヤ1月、、、、いや1週間すらない、ずーっと喰い続けである、メシを抜いたのはせいぜい1~2食、又は3食ぐらいか？だからして、山の出発の朝1食抜こうが抜くまいが、体にとっては一切関係ないハズである、1食抜いたところで、ざっと計算すると6万2千4百15食分の1食である。これは

誤差の内にも入らない食数である、一つ一つで飯抜きで出発、登りの取り付き迄の30分位歩って、カレーパンとヨーグルトの美しい朝食を取り、もうタダひたすら登る、登る、登る、バテてくると無口になる、そうして3回目の挑戦でやっと越後駒の頂へ立つ。頂上からオツルミ沢を見下ろすと全くの雪の斜面のみ。下る。駒の小屋までが好い斜面、小屋から下が急斜面で

飯豊の急斜面を思い出す、でもここは短い、その後は快適に下る。大変な思いをして登ってきたのに、下りはほんの少しの時間でぐんぐん高度を下げる、スキーが旨くなったような勘違いを起こす、ただ雪質がいいだけ。そして帰りはフロ、そば、やーーーーーっとリベンジ成りました。後は三岩岳をリベンジしなきゃーねーっと。

(名雪 記)

空木岳

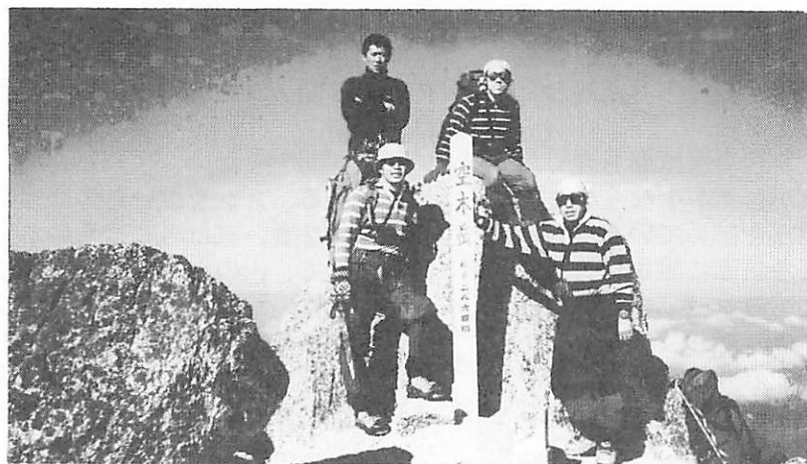
2002. 4. 28~4. 29

パーティー L 本図一統、木村 一、菊地光夫、吉田 仁

今回は、珍しく縦走に行ってきた。クラブに入会して最初から縦走が目的って言うのは初めてじゃないかなあー。雨で仕方なく縦走に変更って言うのは何度かあった気がするけど。コースは、千疊敷~空木岳、この辺りは石コロが沢山ころがってるというので前から一度行ってみたいと思ってた。しかも、いいのか?悪いのか?稜線直下までロープウェイで行けてしまう。案の定バス停では、他の人の装備が気になって仕方ないオヤジがウロウロしてて、うざったいのなんの。救助

隊の人なのかなあ?アイゼン、ピッケルがないと登れませんよーって、みんなに言って回ってる。お仕事は、保母さんと変わりませんね。ところで、お目当てのボルダーはと言うと、確かに石コロだらけだったけど、おもしろそうなのは数えるくらいかなあー?とは言っても登山道の辺りしか見てないから、あれだけの山だから、きっと人知れず素晴らしいバージンボルダーが、眠ってるに違いない!

(吉田 記)



空木岳山頂にて
吉田・本図
菊地・木村

山スキー入門（富士山の巻）

2002.5.3

パーティー L 木村 一、中島 純、江平尚志（元ACC-J 茨城会員）

日本の皆さん、こんにちは。元ACC-J 茨城の江平です。

また、こうして皆さんの前に登場するとは夢にも思わなかったばい。長生きはするもんですね。純ちゃん、一さんもしぶとく山一途にやっていたようだし？。いやあ、昨日羽田空港で20年ぶりにお会いした時は、タイムスリップしたような錯覚に落ちてしまいました。ナマの茨城弁だあ〜べよ。

さてさて、もう6合目です。雪です、雪ですよ！。このために、はるばると九州くんだりから空を飛んでやってきたのです。遥か上の方に、小屋が幾つか見えています。実は富士山に登るのは初めてです。汚い、ゴミだらけのイメージが強かった山ですが、多くのボランティアの方によって清掃活動がされているようで想いのほか綺麗な印象を受けました。もっとも、6合目から上は雪に覆われていたけど・・。

7合目当たりから徐々に3名の間隔が開きはじめ、TOPは一さんが軽快に高度を稼ぎ、夕べ（正確には深夜3時ごろ）の酒で頭が痛い江平が20メートル程遅れ、最後に久しぶりの山行きと言う純ちゃんが『先に行っていていいよ』と気まま旅。さっきから、もう着くべ、もう着くべと思うんだけど、なかなか小屋が近づかないではないか。それに酒のせいと思っていた頭痛がどうも変だ、こりゃ、高山病だ。一さんが、高度計付きの腕時計で高度を測定してくれる度に、ガックリしてしまう。200mの高度を稼ぐのに約

30分かかっている。

ところで、ドラエモンみたいに色々な新兵器が出てくるのです、一さんは。デジカメ、水中カメラ、高度計付き腕時計、博多では売っとらんですとですたい。昔はあんな贅沢品を持っていたのは、今は遥か下にいる純ちゃんだけだったのに、出世したんですね一さん。

『情けなかあ、ここで、わしや、アイゼンば着けるけん。』と、安全登山に徹したのが8合目。まだまだ先は長いし、アタマが割れそうに痛むし、山スキー入門編の初日は厳しい、でも天気は快晴で見晴らしは絶景。下は相模湾と青木ヶ原かしら？。おや、おや、もう少しで頂上です。直下は、岩と雪のミックス状態で山頂からの滑降は無理みたいです。ここらあたりまで下降した後の滑り出しとなりそう。でも、板は山頂での写真を撮りたいが為に担いで行く。12:30頂上到着。アタマが痛く、とつとと下りたいが先ずはお釜をバックに記念撮影。次に、行動食をそそくさと食べてサッサと駆け降りる。頂上直下の露岩帯を過ぎた処でスキー装着。と、其処へ純ちゃん登場。やっぱ、スキーの達人は山スキーの魅力なんだろうかね。益々、ハマリそうばい。明日は、光夫君と一緒に鳥海山だし、頑張るけんね。

登場する場所を解ってらっしゃる。もたもたしている江平を残してアア〜と言う間に下界めがけて

すっ飛んでいくではないですか！。
いやあ、あっと言う間にもう6合目です。5時間半もかけてやっと登ったのに、『下り』は実質数分間の滑降です。ちょっと、勿体ないけどこの富士の斜

面を独り占めできるところが、ゲレンデスキーでは味わえない

富士山では、純ちゃん一さんお世話になりました。

では、日本の皆さんこのへんで、サヨナラ、サヨナラ。



富士山山頂での江平

2002年GW東北山スキー巡業

2002. 5. 4～5. 5

パーティー L木村 一、名雪博二、菊池光夫、江平尚志（元ACC-J 茨城会員）

ゴールデンウィークは毎年楽しみな連休です。今年は元会員の江平氏がはるばる九州福岡から加わっての山行計画をリーダーの木村氏が立案した。最初の1日目は日本一高い山富士山頂からの大滑降。2日目は鳥海山、3日目は月山、4日目は尾瀬燧ヶ岳と連日移動しての強行軍山スキーである。富士山は木村氏&江平氏&中島氏の3人で快適な滑降を満喫したらしいが、私は2日目からの参加である。夜8時過ぎに茨城を出発して山形県の酒田市を目指して車

を走らす、燃料を満タンで出発したにも関わらず残り少なくなってしまった。給油が必要になったがガソリンスタンドが見当たらないので、コンビニで教えて貰い更に数キロ車を走らせて給油。明方近くまで営業しているスタンドが少ないので地方巡業に出る時には注意を要する。数年前に木村氏&中嶋氏と一緒に鳥海山を滑って時には反対側の祓川からだったが今回は湯の台からのコースを選んだ。途中の車道には雪があったが四駆にして車で行ける所まで入り現地到着3時半頃。どんな

に遅く着いても宴会をするのが掟になっている名雪隊長の為に軽く一杯やって仮眠。翌朝は6時半起床、7時出発。雪が積もった車道を約時間スキーを走らせると南高ヒュッテが現れてきたので小休止。ここ南高ヒュッテからは雪原の中を上り易いところを選びスキーを走らすがシールが良く効き気持良い登高になってきたが、朝出発する時には高曇りだった天候も高み得るにしたがって雲が厚くなり霧雨が落ちるまでになってきた。ガスが懸かってくると上部はどこを登ったら良いか判然としないので迷っていると、上部から下山してきた登山者に登高ルートをアドバイスして頂いた。下降の事を考えてあまりジグザグ登高しないで意識的に直線的に登るが、傾斜が強くなると苦しくなってくる。八合目付近まで登ると風も強くなり、ガスも一段と濃くなってきたのでここで登高を断念して下る事にした。山スキーでは下降時に迷う事が多いのでツルベ式に滑降する事にした。滑るのは常に1人で上部の人間が見える範囲で止まり、次の人は更に下まで滑り同様に上部の人間が見える範囲で止まる事を繰り返しながら滑降すれば、ルートが分からなくなっても大きなミス进行す事がないので安全な滑降方法である。視界が30mしかない時でもメンバーが4人いれば1回に90m滑れるのであまりストレスは溜まらない。しかしタマゲタたのは江平氏のスキーの上手な事。上手な事。俺ラータマゲタナー。彼は福岡に帰ってからは大山スキー場に毎週のように通い、スキーコーチに手ほどきをして貰ったとの事であった。また福岡からは上越のスキー場に来るよりも北海道のスキー場に行った方が費用が安く上がるそう。江平氏は茨城に住んでいる頃から何事にも凝り性だったのでスキーも上手くなるのが早かったと想像する。

江平氏は茨城に住んでいた頃は彼女も居なかったのが毎週のように山に登っていたが、福岡に帰ってからは山ではなくトライアスロンに懲りだし、今年も宮古島の有名な大会に出場して見事完走したとの事。泳ぎ3km・自転車155km・マラソン42.195kmを約10時間半で走り抜けるとは驚き以外のなにものでもない。彼の背中には日焼けのあとがクッキリ。宮古島の大会後は2〜3日は背中が痛くてひどかったそう。これだけハードな運動をして10日後には山スキーと、彼は昔のままタフで相変わらずクレージーでした。雨足が強くなる中のスキー滑降であったが、標高を下げると雲の切れ間にガスが切れて一瞬だが山スキーの醍醐味を味わうことが出来た。ここ鳥海山の山スキーはグレード的にはあまり難しくないが、スケールが大きくて初心者から上級者まで幅広く楽しむ事が出来ると思われ、東北方面では一番ベストなエリアです。鳥海山から下山後、鳥海山荘で300円の風呂で汗を流して次の目的地月山に向かった。昼食抜きだったので安い牛丼を食べて夕食をすました。名雪隊長は吉野家に生卵を持ち込みしようと主張したが、良識あるACC-J茨城の名誉に傷が付くので頼み込んで止めて貰った。月山スキー場付近の公園の東屋で、江平氏持参の宮古島特産の泡盛の古酒とケースごと買い込んだビールで盛大な宴会。昔話に花が咲き、呑むほどに酔うほどに時間が戻っていくのを感じながら月山の夜は更けていった。

翌朝、朝一番のリフトに乗り込み月山に向かったが、今回も前回同様にガスの中の登高になったしまった。登高ルートは前回とは異なり姥ヶ岳

のピークに登り、稜線沿いに月山に歩を進めた。昨日の鳥海山と異なり今日はスキーを背負っての登高だ。雨こそ降り出していないが風が強く更に濃いガスの中を頂上を目指して、ハイカー・登山者・スキーヤーが続々と登っていくので、雪の上にトレースがばっちりあり大した苦労もなく月山の頂上に着いた。風が強いので頂上の非難小屋で小休止ご滑降開始。しかし、濃いガスの中でルートが判然としないので快適な滑降とはいかない。最後は大きな斜滑降で姥ヶ岳を回

り込み月山スキー場に戻り更にスキー場を滑降して駐車場着。

次の目的地尾瀬の燧ヶ岳に向かうが、高速料金を節約する為に一般道を走り、今日も昼食と夕食を兼ねた牛井屋での食事と相変わらずの貧乏山行だが、このスタイルが我々ACC-J茨城には一番適した山行である。吉野家とマクドナルドは我々貧しい山屋の強い味方なのでこの場を借りて感謝申し上げます。

(菊地 記)



鳥海山
シール登高中の
名雪・江平



月山山麓で宴会中の
名雪・菊地・江平

尾瀬大滑降（燧ヶ岳山スキー）

2002. 5. 6

パーティー L木村 一、名雪博二、菊池光夫、江平尚志（元ACC-J 茨城会員）

平成14年の5月はBSEのおかげで、オレの休みはカレンダー通りで1日も休めなかったもので、東北山スキーの旅となってしまった。鳥海山、月山、と2カ所で視界の無い強烈なガスと、雨と、強風とで、足許しか見えない山スキーが続いた。濃いガスの中で、足許だけを見て走るスキーほどつまらない物は世の中にそうは無いだろう、其れはヒマラヤ、カナダ、ヨーロッパアルプス、日本中どこへ行っても全く同じで、強いて言えば、高尾山でも、筑波山でも、奥多摩でも雪さえ有れば全く同じ感覚なんじゃねーのか、と思う、そのぐれ一つつまねーもんだ。2回もひどい目にあって「もうスキーはどうでもいいや」と思い始めていたところだ。

月山を下りて20:00時過ぎに檜枝岐奥の七入に到着ばかりにひろーい駐車場で、俺たちだけの貸し切りだ、どうせつまねースキーやるんなら金掛けねーでやんべーつつーことで山形の月山から、有料道路いっさい抜きの、オレの得意技の下っぱしりで、酒買ってつまみ買ってここで大宴会。そうしたら、3日の晩からずいぶん見ていなかった、久しぶりの、夜空に満天の星、イヤよく飲んだねー。

翌朝4:00起床、4:40時車で出発、御池の駐車場にまだ夜が明けたばかりに到着、親切な菊池隊員に車で送ってもらう、ここの駐車場が有料と言うことで菊池隊員は我々をここにおとして山菜取りをやる、と言うのだ、しかし今週は未だ御池の駐車場は無料だった？ ここを5:00時に出発し

快適に樺とブナの大木の林を抜けて行く。未だ雪面はかちんかちんに凍っていてキックステップもままならない、先行パーティ、単独が何人か居て急斜面でアイゼンをはいている、これを横目で見て何とかだましだまし登ってしまう、この連中を何れも熊沢田代までにぶっちぎり、ACC-J山スキー最強パーティの、木村・江平・名雪は、な、な、なんと7:47時に、難なく頂上に到着、ど快晴の360。の大パノラマを十分に堪能した。遂2週間前の越後駒から始まる越後三山、兎岳、至仏、その奥に苗場と上越の山々、左に上州武尊、日光の山々、さらに左に会津駒、大戸沢岳、恨み重なる三岩岳、浅草岳、守門岳、そしてすぐ近くに平ガ岳。暫しこの眺めに飽かず眺むる。江平隊員は今日羽田空港から、住まいの九州に帰る事になっているので、この絶景に別れを告げ8:30時燧頂上から南東斜面にドロップイン、東に回り込み、さらに北東斜面を御池目指して、あつという間に熊沢田代、熊沢田代を登らずに右から大きく回り込んで、広沢田代へと向かう。ところが、木村、江平隊員がいない、しばらく降りて行くと直ぐ下に広沢田代と思われる平らな雪面があり、そこには今日のシュプールは無い、昨日以前のシュプールが一本のみ？ひょっとするとここは「ちがう田代」か？と思ひ少し登り気味にトラバース、10分ほど続けると、今度は紛れもない広沢田代、おびただしいシュプールあ

り。ここでウイスキーを一杯飲んで
樺とブナの巨木の斜面を下る、日陰
は未だ凍っていて、ひどくテールの
落ちが早い、やがて傾斜が緩くなり
御池の駐車場へ到着9:15時だ。
な、な、なんと頂上から45分で降
りてしまう、木村、江平隊員は40
分を切ったそうだ。各地で今年は雪
が少なく、これが今シーズン最後の
山スキーになるかも知れない。んで
も、いや、スキーがこんなにうんま
くなってはこまったもんだな。
山スキーが旨く滑れずに悩んでいる
人が居たら私が安く教えて上げま
す。登山靴はいてこのように旨く滑
れたら、もうこれは名人の域に到達
しているんじゃないか?と思いま
す。何と言っても、頂上から45分
ですよ、別に急いだ訳では無いんで
す、いやいや別に自慢してるわけ
ではないのだよ、ウオッホン。ほん

と一に素晴らしい滑りをして居るわけ
なのよ、うん。 わかるかなー。しよ
うがねーから名人になれる、為のヒケ
ツをこの文集を読んでも人だけに教え
ちゃおー、決して他人に教えたらだめ
だかんねー! 絶対人にしゃべっちゃな
んねーだ! 簡単に山スキーの名人に
なれるヒケツ

その壺 なるべく一人で滑ること
その貳 雪質のいいときだけ滑ること
その参 雪質のわるいときはスキーを
背負って降りること

以上を守ればあなたも今日から、山ス
キーの名人です。うるせーっ、うる
せーっ、うるせーっ! 文句ゆーなっ、
こんな所までこの文集を読んだおめー
がわりーんだ! 簡単に名人になれ
りゃー、オレが教わりてーんだ!!!

バッキヤロウ!

じゃーなっ!!

(名雪 記)



燧ヶ岳登高中の
江平・名雪

遥かなる源治郎尾根

2002.5.3～5.5

パーティー L 本図一統、笹平 孝、渡辺聡子、松原丈夫 (ACC-J東京)

登山を初めて十一年、剣岳には何回となく足を運んできた。しかし今まで源治郎尾根に登れたことがない。いままでは何回も計画はあったはずなのに、源治郎尾根のときになるとなぜか天気が崩れてしまうのである。今回は丸山中央山稜を経由して念願の源治郎尾根に向かった。

3日、晴れ。いつものように混雑した扇沢から黒部湖に行き、登山者用出口から表にでると、そこはもうすでに静かな北アルプスの山懷である。お天気快晴、空気は旨いで文句なし。急な雪の斜面を降りると黒部の川面である。今日は観光放水をしていないようだ。この黒部の水平歩道もずいぶんと通い慣れた道だが、毎年少しずつ変わる。これはやはり川は生きている証拠なのだろう。内蔵助出合までも、一時は山道を高巻させられたこともあった。それがイヤで我々は強引に川沿いの道を行ったものだった。

内蔵助出合付近で知り合いと会い、雪が少ないとかとの話をした記憶があるが、それが誰だったかいまは思い出せないでいる。俺の頭もかなりきているのだろう。丸山東壁を見ながらやがて内蔵助平に着いた。

内蔵助乗越に行くには内蔵助谷から行く方法と、内蔵助峰の支稜から取り付く方法があるが、私は内蔵助谷の様子を知らないで、雪崩等の危険から後者を選んだ。

支稜取付からアイゼンをつける。急登なのでゆっくり登る。風もなく照り返しが強くて暑くてしょうがない。でも内蔵助平にいるよりはマシではある

が。やがて内蔵助峰に着いた。雄山東尾根のケーブル駅や黒部湖が見える。内蔵助乗越までは指呼の距離である。東尾根の上からスキーパーティが降りてきた。右下の内蔵助谷からは後続パーティが登ってきている。少し遅れて渡辺が来たのを待って、私は良い幕営地を確保するため一足先に乗越まで行くことにした。結果的には乗越はとても広くて、そんな必要はなかったのだが。幕営場所を決めてから整地にかかる。ピークには笹平と松原も休んでいた。やがて渡辺が降りて来た。私の手前50m位まで来たところで足を取られたのか、ゆっくり滑りはじめた。雪が腐っていたので、それに下は傾斜が緩くなっていたのでまったく心配はしていなかった。案の定すぐに止まった。しかしなかなか立ち上がらない。「どうしたんだよう、早く来いよう」と声をかけるが、なんと返事しているのかわからない。やがて立ち上がったが歩きださない。異常を感じたので渡辺のところまで行ってみた。捻挫したという。荷物を背負い渡辺に付き添ってゆっくり幕営地まで行った。テントに入り、靴をぬかせると既に腫れてきていたが、骨折の症状はないように感じた。恐らく明日はもっと腫れも強くなり歩くのも困難であろう。これで敗退が決まった。

4日、雨。強い雨で下る気にもなれず、停滞とする。渡辺の明日の様子によってはヘリを呼ぶことも考えた。

5日、曇り後晴れ。朝ガスっていたが隣のパーティは登っていった。渡辺はなんとか歩けるといふか、ヘリを呼

ぶのはイヤなので頑張るという。内蔵助谷へ降りて行く。はじめの急斜面はロープを使って降ろし、あとは頑張って歩いた。回復した天気の中、後ろ髪を引かれる思いで立山を後にした。

また源治郎尾根は登れなかった。来年は思い切って、後立山から黒部を越えて黒部別山から源治郎尾根という計画はどうだろうか。

(本図 記)

北ア立山 山スキー

2002. 5. 6~5. 10

パーティー L 笹平 孝

5/6 始発のトロリーバスに乗り室堂へ向かった。途中、ケーブルカー乗り場で駅員の人がタンボ沢など雪の状態を教えてくれた。今年は雪がかなり少ない様子だった。室堂ターミナルに着いて雷鳥沢キャンプ場へ適当に歩き出したら、一ノ越方面へ歩いてしまう。立山室堂山荘の所で始めて地図を広げ現在地を確認し、池の外側をトラバースして雷鳥沢キャンプ場まで行った。このお陰で、登り返しの少ない近道ルートを見つげられた。雷鳥沢キャンプ場には、テントが5張り程しかなく好きな所に張れた。ビールを飲んでから11時過ぎにタンボ沢へ向かう。一ノ越の登りでは時間が遅いので、他の人はほとんど居ない。一ノ越山荘でロープウェイの時刻表をチェックしてから、東一ノ越へトラバースを始めた。登り返しが心配だったので、トレースよりも上へと滑っていったら、だいぶ上に行ってしまうすぐ急斜面になってくる。途中から雪が無くなり板を背負って、岩場と這松地帯を行くと尾根に出た。東一ノ越は遥か下に見えた。東一ノ越まで尾根を下るのは大変なので、タンボ沢に滑り込めそうな所まで尾根を下ってみる。誰かが滑り降りた所を発見したが、急斜面なのでゾッとする。45度以上ありそうな感じだった。少し悩んだがここから滑り降りる事にした。転んだら

終わりなので、斜滑降で慎重に降りて行く。100メートルほど降りてから、恐る恐るターンを始めしだいに慣れてきて、緊張感のある滑りを楽しんだ。トレースの所に合流すると、ここから片斜面をしばらくトラバースして、タンボ平でビール休憩にする。開放的で眺めの良い所だった。この辺りから先は、雨で雪が削られ所々溝が出来ていて、スピードが出ると転びそうになり滑りにくくなった。やがて、だらだらの滑りになると終わりが近くなる。今回は雪が少ないので、黒部平までで終わりにして3時頃のロープウェイに乗りテントへ戻った。

5/7朝から雨で、今日は停滞。狭いテントの中で1日過ごした。

5/8今日も雨なので停滞。テントの中に居るのが苦痛になったので、カップを着てスキー板を引きながらみくりが池温泉へ向かった。視界が無いので、テント場から磁石を使って雷鳥沢ヒュッテに行き、ここから先はポールが道沿いに立っているので安心出来る。みくりが池温泉は500円位払えば1日中居られるので、温泉に

入ったり本を読んだりして過ごした。

5/9 弥陀ヶ原まで滑る前に、気になっていた浄土山を登ってから行く事にした。せっかくなので登山道は使わず、少し難しそうなルートで行く。頂上めがけて登って行くと、上部の所で10メートル程急な雪壁になり、這松を掴んで乗り越えた。ここ以外は何の問題も無く頂上に行けた。頂上は広く、近くに小屋の跡みtainな所があった。頂上直下からスキー板を付けて滑り降りる。斜度は急だが、タンボ沢で慣れたせいもあって快適に滑ることが出来た。中腹辺りからトラバースを始めて、室堂ターミナルの少し下の所に滑り降りた。この先は、弥陀ヶ原まで片斜面をひたすらトラバースで行く事になり、脚が痛くなるほどでぜんぜん楽しくない。しばらく行くと、所々ブッシュが出ている。林間コースを滑り降りると弥陀ヶ原に到着。バスに乗り室堂へ戻る。時間があるので一ノ越まで登り、ここからトラバースして小走谷付近を滑り降りて、テン場へ戻った。

5/10朝、周りの雪面よりも40センチくらい高くなったテントを撤収し、真砂乗越まで小走谷を詰めて行く。ガスの切れ目から大きな内蔵助カールが目の前に広がり圧倒された。荷物がやたら重いので、ジグザグに滑り降りるともう一つ大きなカールが出てきた。二つ目のカールを降りた所から、富士ノ折立側へ回り込み大斜面へ出た。高度感満点の大斜面は、重い荷物を背負っての人にとってはとても危険な所でもある。大きく斜滑降で高度を下げて行く。滑ると雪の塊が斜面全体に転がり落ちて行くのがとても面白い。4

00メートルくらい高度を下げると、何とかターンが出来る様になり内蔵助平へ滑り降りた。ここから内蔵助谷は雪が少なく、ブッシュがうるさくなる。沢のすぐ上を滑り降り、やがて雪渓が崩壊し始めた所からスキー板を外して歩いて下る。丸山東壁付近で、少しヤブ漕ぎをするとまもなく内蔵助谷出合に着く。テントを張って、釣りに出かけたが、何も釣れないので焚き火で温まる。薄暗くなってからもう一度釣りをやったら一匹だけ釣れたので、バター焼きにする。

5/11朝、6時過ぎに釣りに出かけた。四匹釣れて、1匹はバター焼きでいただく。ラーメンを食べていると、早くも釣り師がやってきた。ダムまでの道は、雪渓を少し行った所から夏道を通って行くことが出来た。

(笹平 記)



富士青木ヶ原樹海横断（縦断？）

2002. 5. 26

パーティー L 本図一統、木村 一、笹平 孝、

(ACC-J東京) 名雪博二、松原丈夫、吉田信一、金沢 清

なんと物好きなのと思う人もいるだろう。俺自身もそう思うのだから。松本清張の小説から自殺の名所になってしまった。なんでも樹海内は昼間でも薄暗く磁石も狂ってしまうという。一度足を踏み入れたら2度と出られないとも聞く。はたして本当なんだろうか。30年くらい前そんな記録が雑誌に載っていたのを読んでから一度行ってみたいと計画をあたためていた。今は毎年地元の消防団が自殺者の捜索をしているらしい。それに何人も横断をやっているそうで、別して珍しくもない計画である。物好きはたくさんいるもので、この計画を発表したら7人も集まってしまった。さてさて鬼がでるか蛇がでるか楽しみである。

地形図を眺めて3つのルートを考えてた。

その1、鳴沢氷穴から富士風穴に向かって鳴沢村と下部町の境界線ぞいを南方向に歩く。

その2、開拓道路から富士ビューラインに向かって北西に歩く。

その3、新西湖から下り山に向かって南西方向に歩く。

今回は初めてなので一番簡単と思われる1のルートをトレースすることにした。

前夜鳴沢氷穴の駐車場に集結した我々はいつものように宴会を行う。さあ明日は何がでるかお楽しみということでお開きとする。

ゆうべ遅くまで飲んだので朝ゆっくり出発する。磁石は地面から離して使

うことを申し合わせる。それはここは熔岩台地なので、地面に近づけると磁石が正しい方向を示さない可能性が高いからである。目的方向に向かってコンパスをセットする。みんなそれぞれ適当に目的地を目指す。同じように探索した者の仕業か、荷造り用のポリ紐が縦横に残されている。迷っても出られるように紐を延ばしながら歩いたのであろう。自殺者のものなのかは知らないが、潰れたテントや身分証明書、定期券、完全失踪マニュアルなんて本も捨ててあった。

磁石は狂うことはなくきちんと方向を示していた。期待していたほどの発見物？もなく約1時間で開拓道路と交差する。予定通りの地点であった。樹海内は凹凸があり決して歩きやすくない。うっかりすると落とし穴みたいところに足を踏み込んでしまうので、ケガをしないよう気をつけた。樹海内は薄暗いことはなく比較的明るかった。

さらに1時間で精進口登山道にでて横断は終了した。あまりにもあっけなかった。ついでに近くの富士風穴にアイゼンをはいて潜ってみたが、特別珍しいものはなかった。中は氷で覆われており寒かったけど。

あとは開拓道路を歩いて車に戻る。時間もまだ早いし、上九一式村の温泉に入って命の洗濯でもして行こうか。

今回のルートは磁石がきいたが他

はどうだかわからない。来年は2と3
のルートに行ってみるか。俺ってこの
物好きさは死ぬまで直らないんだろ
うな。

以上

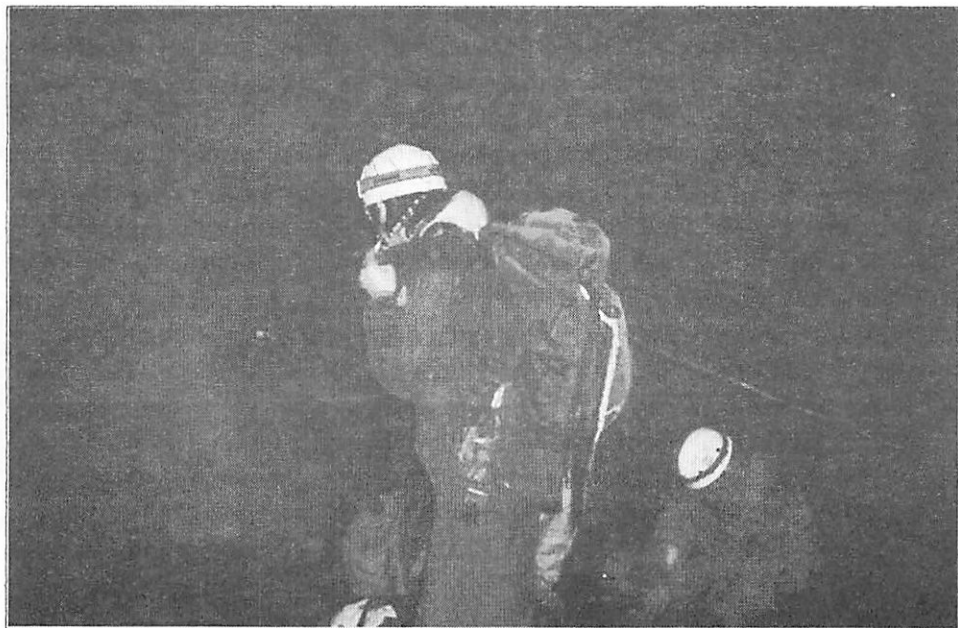
鳴沢氷穴(8:22)～開拓道路(9:24)
～精進口登山道(10:32)～富士風穴
～鳴沢氷穴
(13:22)

(本図 記)



旭日旗を持つ
名雪特攻隊長
& 吉田

富士風穴中の
本図・吉田



清津川棒沢

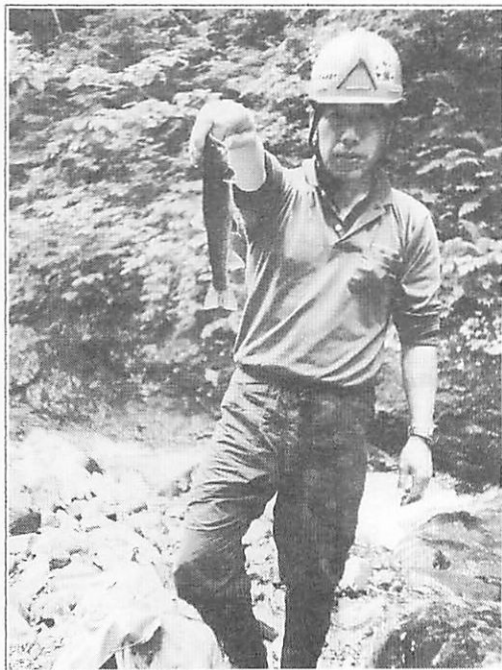
2002. 6. 15~6. 16

パーティ L木村 一、笹平 孝、名雪博二 (ACC-J 東京)、松原丈夫 (ACC-J 東京)

名雪さんから山菜が取れる沢があるから行こうとの誘いがあり、名雪・松原・木村・笹平の4名で棒沢探検隊を急きよ結成した。苗場スキー場の中を走る林道を最奥まで車を進めたが、雨が降っているので明日の天候を心配しながら深い眠りに落ちていった。翌朝は雲の切れ間から青空が見えているので今日1日は天候が持ちそうなので一安心。棒沢の入り口に『この沢は危険なので入らないで下さい』とのプレートが掛かっているのを発見。このようなプレートは初めて見るが面白い文句に名雪隊長が感心している。登山道を少し登り急斜面を下降して棒沢に入溪。入溪してすぐに小さいゴルジュが出現したがこれを左岸から高巻きクリア。更に上部に進み左岸のブッシュの中に平らな場所を見つけてターフを張ってベースを設営し、一休みしてから更に上部に探検に出発。ここ棒沢にはウド・ウルイ・フキ・イタドリ・山ニンジン・等の山菜が沢山有り収穫は豊富だ。まだ日が高い内から収穫した山菜と山の恵みで焚き火を囲みながらの宴会開始。ウドの焚き火焼きは酒の摘みに絶品で、呑むほどに酔うほどに話が弾むがそのうちに1人、2人とターフの下に消えていった。名雪隊長はまだ日が高い内から高イビキで熟睡モードに突入。そのせいで翌朝は4:00頃から起き出して騒いでいるので煩くしょうがない。困った親父だ!。いや困った隊長だ。翌朝は日が昇ってからゆっくりと朝食を摂り、更なる探検に向かった。暫く進むと突然前方に人影を発見。途中からショートカットして入溪にた釣人が2人竿を出している所に遭遇したが、こち

らを睨み何しに来たんだと言うような顔をしている。源流の釣師はあまり感じが良くない印象を受ける。釣師は我々が前に出るのを拒んでいるのでこれ以上は上流に進む事は出来ないのでここから下る事にした。ベースに帰り下山の準備をするが入山時より下山時のほうがザックの重量が重い。特に名雪隊長のザックはパンパンになっている上に更に山の恵みを乗せている。ここいら辺が玄人と素人との差かなと感心してしまうが、名雪家では山に入り下山時に土産を持って帰らないと家でお仕置きが待っているらしいが我が家も似たようなものである。やはり山の神は怖い。

(木村 記)



今晚のご馳走 木村

破風山

2002. 6. 16

パーティー L 本図一統、渡辺聡子

不覚にも足を怪我してしまってから二ヶ月近くたち、おとなしくしているのにも限界がきた。どれくらい歩けるようになったかも知りたく、おニューの沢靴を試してみたいという本図さんと一緒に秩父に沢登りに出かけた。目指すは赤岩沢悪谷であるが赤岩橋に到着したときにはすでにばらばらと雨が降り始めており、朝起きたときにはやむどころか雨足は強くなっていたのだった。しばらく様子を見てみるが全然やむ気配はなく、「またにすっか。」ということで車を反転させて悪谷を後にした。流れとしてはつくばに戻ってジムにでも行くかとなるのだが、冒頭のとおり私はある程度の距離を歩きたく、本図さんは知床のために靴を慣らしたかったので「武甲山でものぼっか」ということになった。しかしハイキング地図をもっておらず、登山口もよくわからないので情報を手に入れるべく道の駅をはしごしてみるが手がかりは得られず、開いた本屋もなくそうこうしているうちに雨はどんどん強くなり、「やめて帰りがけにどこか別の山にすっか」ということとなった。皆野町の道の駅で観光案内所のおねーさんに宝登山や登谷山を進めら

れたが本図さんのお眼鏡にかなったのはおねーさんも知らない破風山であった。どこでみつけたかという道路地図である。山の北の方に回り込んでみると関東ふれあいの道というりっぱなハイキング道路があったので本図さんはしたり顔で歩き出した。頂上まで約1時間半ほども道をいろんな誘惑に負けつつよりみちしつつ登れば登るほど重くなるザックを担いで2時間ちよつとかけて頂上へでた。破風山は地元の方に人気の場所らしくあいにくの天気にもかかわらず大勢のハイカーさんたちとすれ違った。特に頂上では団体様がものすごく豪勢なお弁当をひろげてわいわいやっており、コンビニのおにぎりがお昼の私たちはなんだか肩身がせまいような気がした。頂上を後にした後は札立峠というところを通り秩父札所の水潜寺へとおりた。

不安だった足はとくに痛むこともなく、リハビリをしつつ山を歩く時間をすこしずつ長くしていけばいいかな、と一安心した一日だった。

(渡辺 記)



知床海岸一周の旅

2002. 7. 3～7. 8

パーティー L 本図一統、笹平 孝、菊地光夫

笹平が転職するということで今までの会社を退職した。それを機会に北海道の山に2カ月ほど行ってくるという。私は北海道といえば利尻山しか行ったことがない。笹平に刺激され、なんか私も行きたくなってきたのだった。北海道で次に行きたいところといえば知床であった。それも普通の山登りでは満足できるわけもなく、行くなら道のない海岸しかない。こんなところまで行った人いるのだろうか。集会で笹平に相談してみると「僕も興味があるので行ってみたい」という返事が返ってきた。その言葉を聞いたら俄然やる気が湧いてきて休暇を取ることになったのだ。

資料を探しはじめるが、手持ちの中には見つけれなかった。資料がないということは誰も行っていないのか？嬉しいような不安なような、でもそんなわけないだろう。何日間で一周できるのか見当もつかないので何日の休暇をとったらいいいのかわからない。困り果てて思いついたのが、北海道にいた岳人なら分かるかも知れないという単純な考えだった。北大出身の清野さん（沼田山岳会）にメールで問い合わせた。それと面識はないが、新潟から札幌に引っ越し、現在は札幌登攀倶楽部に所属している安藤さんにもメールをだした。お二人からは仲間に問い合わせるとの親切な返事をいただいた。

私は最大6日間までしか連休は取れそうもない。それでも仕事に影響は相当でるだろうが、そんなことを考えていたのでは遠くには行けずじまいで一生を終えてしまう。子供達はみな社会人

になったことだし、家族がなんとか食っていけるだけの収入は確保せねばならないけど、これからは頑張ってもっと長期の休暇を取って行くことにしなければ。出発を7月3日とし3週間前に早割りチケットを申し込んだ。菊地も知床に興味をもっており行きたい様子だが、やはり6日間の休暇でなやんでいるようだ。

やがて清野さんの紹介で、以前知床一周をしたことのある北大水産学部ワンダーフォーゲル部OBの野入氏と連絡がとれ、記録の載った会報のコピーを送っていただいた。見ると、いままで数パーティーが行っており、その中の今井大蔵氏というのは現在「わらじの仲間」の会員ではないのかなあ？？？しかしどのパーティーも10日以上の日数を要しており、しかも一周をしたパーティーはあまりなく、殆どのパーティーは帰りに船を使っていた。6日間では不安もあったが、飛ばせばなんとかなりそうだったし、もし遅れたらその時はそのときだと腹をくくった。

6月中旬、笹平は一人で大洗からフェリーで出発した。

出発1週間前になって菊地から行くことに決めたと電話が入った。飛行機のチケットはインターネットで格安券を探すとのこと。結果的には私より1万円も安いチケットが手に入った。出発前々日には安藤さんから資料が送られてきた。やはり北大の記録だったが、野入氏からのものとは違った資料で、これらの必要な部分だけをコピーにして持つことに

した。清野さん、安藤さんには心からお礼を申し上げたい。

7月2日夜。菊地と土浦駅で待ち合わせ、東京に住んでいる菊地の娘さんのマンションに行く。明日の早朝一番の女満別行の飛行機に乗るためである。立派なマンションだった。私は終わったが、菊地は今が一番子供に金がかかる時で大変だろう。

3日。晴時々曇。定刻に女満別に到着。荷物を待って入ると「もとずさん」と声がかかった。笹平からだった。元気そうで一安心。早速笹平の車でウトロに向かう。北海道が珍しい私はキョロキョロと忙しい。私と違って北海道を何回も旅している菊地はいろいろな面で詳しい。まるでガイド付き旅である。ウトロのコンビニで食料を買い込み知床大橋に向かった。大橋で準備をしていると自然保護官みたいな車が通り過ぎた。不安が脳裏を過る。

知床大橋を渡り車止めを越すと、いよいよヒグマのテリトリーに入った感じがして緊張する。熊鈴と笛を吹きながら歩く。すると先程の車がやってきて止まった。

「どちらに行かれるのですか」

「ポロモイ川を溯りウィーンブリに登る予定です」もちろんウソである。こういうことになったらと予め予定していた答えだった。

それは、情報では登山としてならば自然特別保護区域への入山は黙認するが、海岸歩行は登山としては認めないという情報を手にしていたからだ。

「入林許可は取っていますか」

「いえ、取っておりませんが斜里と羅臼の警察署には登山届を出してあります」これは本当の事である。ただし警察署から計画を中止せよとの忠告を受けないよう、登山届は今日届くようにしてあった。

「そうですか、熊が多いところなので気をつけて行ってください」

「はい、わかりました」

予想以上にスムーズに最大の難関は突破できた。ここはシミュレーションを繰り返し、対処法を考えていた我々の勝ちである。明かすと、警察署に提出した計画書は正しいルートを記載し、今回見せろとは言われなかったが、保護官に見せる計画書は別に作ってあったのだ。勿論調べればこの違いはすぐにバレてしまうが、わかるころには我々は知床のど真ん中にいるはずだ。

道が曲がるとその向こうに熊がいるのではないかと緊張する。熊鈴と笛をうるさいくらい鳴らす。片手は熊スプレーに手をあてている。林道は海岸より300m位上を通っている。やがて高度を落とし海岸に近づいてきた。すると笹平が「もとずさんいましたよ」と、静かに声をかけてきた。見ると100mくらい先に3頭の熊親子が歩いている。いままで2回ツキノワグマと遇っているが、さすが親熊は大きい。風格が違う。毛並みが金色に輝き美しい。離れているので恐さは感じなかった。刺激しないようそっと目的地を目指す。穏やかな流れのルシャ川を渡る。初冬にマスの大群が遡上し、それをヒグマが捕まえる姿をテレビで見たのを思い出す。北海道のヒグマの写真は、ほとんどがこの辺で撮られたものらしい。

やがてチャカパイ川手前にある最初の番屋に着いた。ここまでは林道が通じており車が入っている。ここでビバークしようとしたが、重機がうるさいし人々が忙しそうに働いていたし、時間もあるので次の番屋まで行くことにした。この先は道が

ないので海岸の石ころの上を歩くのだからちょっと歩きにくい。

夕刻タキノシタ番屋に着く。この番屋は後ろに大きな美しい滝が落ちており、観光船からの撮影ポイントらしい。近くに幕営しようとするが場所がない。困っていると番屋の人が出て来て納屋を使ってもよいと言ってくれた。助かった、お借りする。

納屋の前で夕食の準備をしていると、賄いのお姉さんがみそ汁やおにぎり、焼き魚などのおかずを持ってきてくれた。住まいは千葉の流山で、知床が気に入ってしまい、夏は知床で働き冬は流山に戻ると言っていた。夕食を食べようとしたら何かが動いた。見たらすぐそばに熊がいた。2〜3歳であろうか、子熊である。子熊といっても我々より体ははるかに大きい。腹がへっているらしく餌をくれというような仕草をしている。食べ物の匂いを嗅ぎ付けたのであろう。急いで納屋にしまう。するとすぐそばによってきた。距離は5mくらいか、緊張する。納屋に逃げる用意と熊スプレーを準備する。でも襲ってくる様子はなくお互い無視することにした。そのうち熊はどこかに姿を消した。番屋の人の話では、こんなことは日常茶飯事とのこと。知床では人間と熊がお互い無視しながら共存しているように感じた。

夜にお姉さんがお風呂に入っていると言ってくれたのでありがたく頂戴した。極楽極楽。お兄さんが、この番屋は発電機を使っていないんだが何で発電してると思う？と問うてきた。ん？風力？波力？。すると滝を利用して水力発電をしているのだと教えてくれた。なるほど一晩中電灯が消えることはなかった。

4日。曇時々晴。漁師の朝は早い。朝5時には若者達が船でやってきて網

などを持ちだし漁の準備を始めた。今日は我々もこの旅の核心部である。泳ぐ装備を身につける。お姉さんが乾物などを差し入れをしてくれた。これもありがたく頂戴した。

丁寧にお礼を述べて出発する。やがて泳ぎの連続となる。北大パーティは足ヒレをつけて泳いだようだが我々は持って来なかった。沢で泳ぐのに使っていないのだからいらないだろうという判断だった。思ったとおりやはり必要性は感じられなかった。海が穏やかなのが救いだ。荒れていたならシンドイだろう。

突然親子連れ3頭の熊が現れたが、海岸から山に登っていくところであった。我々はその下を通らなければならない。向こうは我々に気づいていない。静かに静かにと言っているのに菊地はピーピーと笛を吹き始めた。当然熊は我々に気づき足を止め、こちらを見ている。「なんだよ！おめは！静かにしろって言うてんのに〜」と私は菊地を怒ったが後のまつり。さあどうしようか。こちらも動きを止め、少しの間睨み合いがあったが、熊は再び山に向かって登り始めたので我々も行動再開。少し先でまた熊と出会う。今度は1頭だがやたらとでかい。しかし断崖の上に立っており、我々の所には降りて来られまい。その勇姿は、よくアニメで断崖の上でオオカミが遠吠えをする姿を見たことがあるが、それを熊と置き換えただけの素晴らしい姿だった。熊の真下を通っていく。熊は我々をずっと見下ろしているようだった。さすがの菊地もここでは笛を吹かなかっ

た。

蛸岩を過ぎカシュニの滝下を泳ぐ。チャラセナイ川が海に流れ込むところが滝になっており、この滝をカシュニの滝といい、ここも観光船からの撮影ポイントである。雪解け水の滝は冷たくて瀑風を浴びたら一気に震えがきた。剣沢大滝を一時思い出した。

カシュニ岩の60mを泳ごうとした時だ。菊地が、また熊がいるという。今から岸に向かって泳ぐのだが上陸地点に子熊がウロウロしているのだ。近くには親がいるのに違いない。3人で笛を吹くが全然逃げようとしなない。しかたがないので上陸地点を熊から50m離れた所にする。熊は泳いでい我々を見ている。しかし近づいてはこない。私たちもこれだけ頻繁に熊と遇うと恐さが薄れてきてしまうのだ。お互い無視、無視である。

カプルワタラには快適そうな番屋があるが、まだ人は入っていなかった。北海道にはこのようなアイヌ語源のカタカナの地名がたくさんあるが、その意味がわかったら楽しさは倍増するだろう。その先の小岬の泳ぎはこの旅最長で、60mと30mロープを繋いでも足らず、シュリングまでも繋いで対処した。5mから10mくらいの岩の上り下りを繰り返す。荷物が重い。夕食も朝食も、そして行動食まで戴いたので荷物が減っていないのだ。嬉しくて贅沢な悩みではあるが。さらにゴルジュ突破装備を身につけているので、レタラワタラ付近では日が差してきたせいもあって、暑くて少々バテ気味である。観光船が近寄ってきた。おそらく客たちは「あんなところに人がいるよ」なんて騒いでいるのだろう。気は乗らないがサービスに1、2度手を振ってやった。

イタシュワタラ番屋で今日の行動を

打ち切る。やはり番屋に人はいない。快適そうな畳みが広がっている。鍵もかかっていないが無断で入ることもできないので番屋前にテントを張った。熊が来ないように食料だけは納屋に入れさせてもらった。

笹平が「ウニがたくさんいるよ」と言う。ほんとに一？と行ってみると「いくらでもいる」と言っただけでいい。私は少ないものを競争して取るときは俄然

やる気が出てくるが、たくさんいるとその気にならず取るのは二人に任せる。マキはいくらでもあるので焚火をして焼いて食べることにした。非常に旨い。半熟が一番おいしく感じる。すると菊地先生が「もつとさんダメだよ、もっと焼かなきゃ」とおっしゃられる。半信半疑のまま北海道に詳しくグルメの菊地先生にお任せした。

なにか動く気配がしたので振り向いてみるとキタキツネがいた。おなかが減っているらしい。でもお前にやるものはないぜ。頻りに回りをうろいついている。なにも貰えないと察したか反撃に転じてきた。カラカラと音がすると同時にラジオの音が小さくなった。キタキツネがラジオを食わえて持って行こうとしているのだ。「このやろう」と追いかけたらラジオを落とし一目さんに逃げていった。

さて先ほどの菊地先生のウニ焼きですが、結局南極放送局、ウニはすべて炭になってしまいました。思った通りというかやっぱりというか、菊地先生らしいと思いませんか読者の皆さん？

5日。曇午後強風と小雨。アウンモイ通過。なぜか私はこの名前に郷愁を感じた。それはなぜかわから

ない。アウンモイも廃屋となった番屋があるだけだった。ウニの沢通過。誰がつけた名前か知らないが名前の如くウニがたくさんいた。それも今までの記録と同じく2~3cmの小さいものばかりだ。あまり多すぎて大きくなれないのか、それとも沢で岩魚の種沢があるように、ここはウニの種沢なのか、私は後者と思いたい。獅子岩を過ぎると間もなく堤防が見えてきた。やっと文吉湾に着いたのだ。テトラポットと堤防に遮られ、脆い岩場を2級のクライミングをして堤防の上に登る。何人かの人達が忙しそうに働いていた。反対側の泥壁を登り草原に出る。草原には鹿の糞がたくさんあり、そういえばここにエゾシカが群れをなしているのを写真で見たことがある。踏跡を辿るとアブラコ湾にでた。やっと知床岬に着いたのだ。岬の突端で記念撮影をする。最初予定していたアブラコ湾でのビバークは、強風と雨と寒さのため諦め、赤岩まで行くことにする。

地形図に転々と記載されている番屋は今は廃屋ばかりでほとんど人は入っていない。でも一軒だけおばあさんと犬がいた。どこから来たのかと聞くので知床大橋からだと言っても信用してくれなかった。おばあさんは、番屋にるのが一番良くて一人で来ているのだと話していた。お年寄り一人で心細くはないのだろうか。知床に住んでいる人達は、みなそれだけ知床を愛しているのだろう。はずれにある廃屋を整理して幕営する。風が強いのでこの廃屋には助かった。今日は熊とは遭遇しなかった。

笹平と菊地がウニ取りにでかけた。私は寒くて行く気になれなかった。廃屋には水中を覗く器具（名前がわからない）が置いてあり、それが使えたせ

いもあってそれはそれは大漁であった。焚火ができないので、ごはんよりウニの方が多い

ウニ丼と、バター炒めで食べた。私はバター炒めがとても旨く感じた。ウニは食べる前の処理が大変で、いやになってしまい10数個ほどは海に戻してやった。私はもうしばらくの間ウニは食べなくて結構です、ゲップ。

水は近くの沢から取った。出発前、エキノコックスが恐くて飲み水はすべてボイルしたものを使う予定だった。しかし北海道の岳人に聞くと、池などの溜まり水でないかぎりには気にせず飲んでいるということだったので我々もそのようにしていた。実際ボイルした水だけを飲むなんてことは面倒でやっていられない。もし運悪くエキノコックスが発病したら寿命と思うほかあるまい。

6日。曇ったり晴たりで時々雨。カプト岩、念仏岩を通過。女滝男滝はとても美しい滝なので記念撮影をパチリ。海岸にはハマナスが咲き誇り知床に来た充実感に浸る。東海岸は西海岸と比べると地形が穏やかで易しい。1泊2日で相泊から岬まで往復ができる。難所には巻道があり、フィックスロープも張ってあった。しかし我々はあくまでも海岸線を行く。熊とは遇わないが新しい糞がたくさんあり、きっと近くに隠れているのだと思う。そういえばこの辺りの番屋には、回りに電線が張り巡らされているので熊は多いのにちがいない。笛を吹きながら歩く。海岸にはコンブが打ち上げられているが我々に持って帰る余裕はなかった（疲れているので）。

ペキンノ鼻番屋には5~6人の人がいた。子供もいたが、今日は土曜

目で遊びに来ているようだった。ここでも最初に聞かれたことは「どこからきたの？」であった。先の様子を尋ねると、今は満ち潮なので観音岩手前の難所は巻道を行った方が良くとアドバイスを受けた。先が長いのですぐ出発しようとするのと干しタラをくれた。ありがたく頂戴する。メガネ岩、剣岩、タケノコ岩、化石浜と快調に飛ばす。やがてアドバイスを受けた観音岩手前の難所に着いた。迷う事なく海岸に行く。台風が近づいている影響か波が高いが、気合を入れて海中に飛び込む。10mくらいの泳ぎで突破できた。観音岩番屋には人がいた。ここからウナキベツ川にそって知床岳まで踏跡があるそうで橋もかかっていた。疲れもピークに達していたので大休止とする。笹平が竿を出すとオショロコマが入れ食いで釣れた。ここから相泊までは踏跡があり歩きやすくなった。疲れた体にムチ打って相泊を目指す。夕刻、有名な「熊の穴」というラーメン屋に着いた。早速ラーメンを食ったが味はイマイチだった

(はっきりいってマズイ)。店のおやじは「知床を立ち入り禁止にするなんてもつてのほかだ」と息巻いていた。完歩乾杯用に高いビールを買い込む。温泉に入ろうと場所を尋ねたら、おやじがそこまで軽トラで送ってくれた。天気良ければ近くに国後島が見えるはずだけど、残念ながら今日は見えない。海岸にある無料温泉の駐車場にテントを張り、温泉に浸かりながら乾杯した。

7日。曇のち雨。羅臼のタクシーを予約してから、私はカモイウンベ川に釣りに、笹平は海釣りに別れた。地元のおじさんに「ここでオショロコマは釣れますか」と聞いた

ら、なんのことかわからず「岩魚みたいな魚」と言ったら「ああイワナか、いくらでもいるよ」との答え。この辺の人達はオショロコマとは言わないようだった。いくらでも釣れて、釣り堀状態、持ってきたブドウ虫はすぐになくなった。そこに4人のフライフィッシャーマンが現れて私の釣りを眺めていた。フライを振る場所がないとのことだった。数匹をキープしてその場所を彼らに譲った。

約束の時間にタクシーはやってきた。そこで本図隊長が交渉開始。運転手は渋っていたが13000円で知床大橋まで交渉成立とあいなった。メーターを見て

いたら、運転手は13000円になったところでメーターを起こした。そこから大橋まではなんと20キロ近くもあったのでした。運転手には悪いような気もしたが、我々はなんか勝ち誇ったような気分だった。

有名なカムイワッカで、一番上の滝壺温泉に浸かりながらビールを飲む。ここまで登ってくる観光客は少ない。この温泉が人気あるのは理解できる。私もいままでに入った温泉のなかでは一番いい思い出になった。

さて今日の泊まり場を探さねば。ライダーハウスはまだ開いていない。キャンプ場は金がかかるし寒いし、雨の降る中テントを張るのはイヤだ。やっと最良の所を見つける。それは斜里町の運動公園だった。見つけたゲストハウスは屋根もあり電気もついている。人がいなくなるまで待ち、テントを設営する。笹平の釣った海魚とオショロコマを手洗い場でさばく。煮物、から揚げ、鍋で腹一杯になった。笹平が釣ってきた

一杯になった。笹平が釣ってきた魚もオシロコマもクセがあつて旨い魚ではない。それを補うくらいに、この日はなぜか菊地シェフが腕をふるう。はっきりいって私は菊地シェフを見直した一日になった。

8日。雨。北海道を全く知らない私のために網走の刑務所を見学。その後安いホタテを探しながらサロマ湖に向かう。菊地先生の言うとおり北海道の道は広くて交通量が少ないので快適だ。途中で安いホタテ（大きいのが9個で998円）を見つけ購入する。網走に戻りお土産を探す。お土産についても菊地先生は非常に詳しく、ジンギスカンだったらどのメーカー、あれはどこと全く恐れ入ってしまう。最後は女満別空港が見える丘にある公園（名前は忘れたが、願いが叶う愛の鐘がある。私も鳴らしてきたが願いは？）でホタテを焼き、ジンギスカンを食う。弁当も買ってきたのだがホタテとジンギスカンで腹一杯になってしまった。ここは二人連れのデートポイントらしく、次から次へとお二人がやってきたが、うさん臭い我々がジュージューとやっているのを見て皆早々に帰っていった。そうそう近くには黒沢明監督の愛馬がいる厩舎がありました。その愛馬も遠くから見ることできました。

空港で笹平と別れ最終便で羽田に向かった。機内は暑くてとてもブランケットなどは必要なく、菊地先生と顔を見合せて大笑いしてしまった。この件については知る人ぞ知ることであるが。

7月3日

羽田(7:40)～女満別～知床大橋
(13:03)～タキノシタ番屋(16:29)

7月4日

タキノシタ番屋(6:08)～イタシュワ
タラ番屋(16:32)

7月5日

イタシュワタラ番屋(6:01)～赤岩番
屋(13:21)

7月6日

赤岩番屋(6:22)～相泊(17:00)

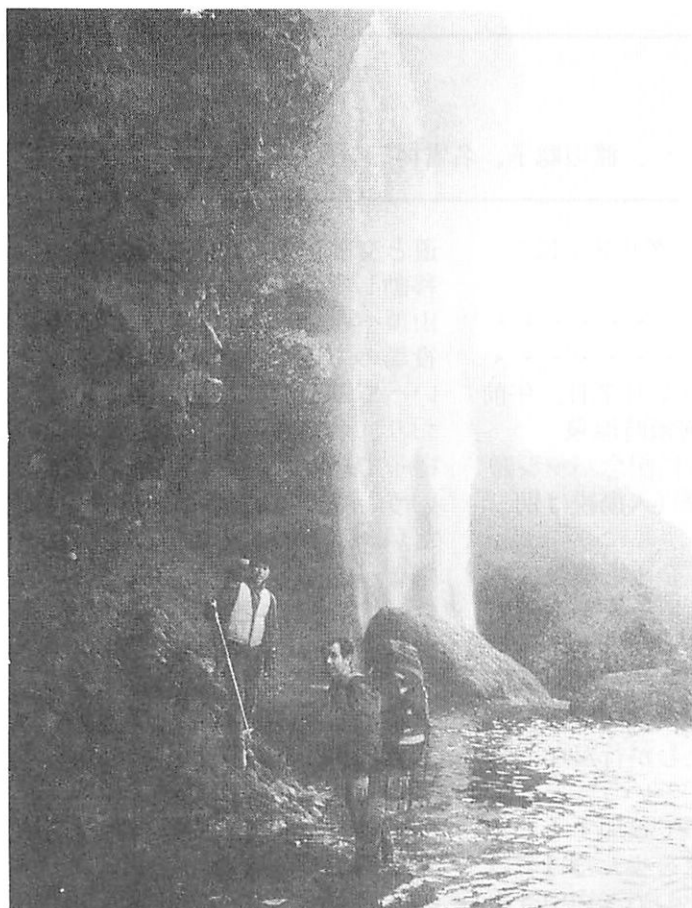
(本図 記)

追伸

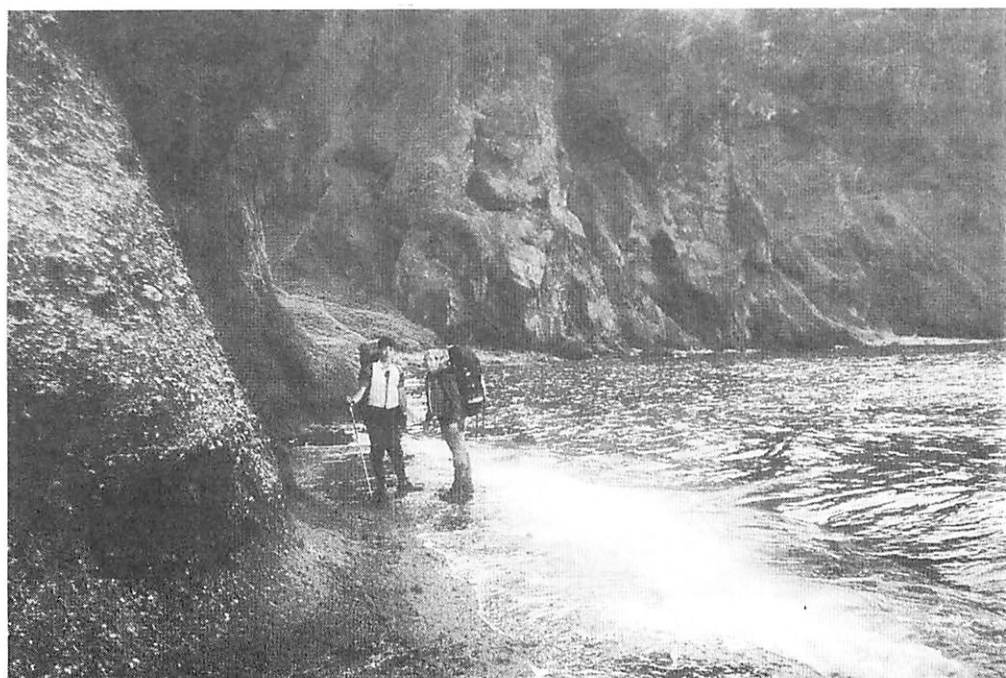
8月中旬、タキノシタ番屋のお姉さんから便りがありました。お姉さんは横浜の「みろく山の会」の会員で、丹沢がホームグラウンドとのこと。

さらに、今年2組目のパーティは熊に追われ、タキノシタ番屋に引き返し船で帰り、3組目のパーティは、8月12日にタキノシタを出発して岬に向かったと書いてありました。冬になって千葉に帰ったら、一度お礼かたがたお会いしたいものです。

(本図 記)



カシュニの滝にて
笹平・菊地



知床半島西海岸を行く
笹平・菊地

会津三岩岳

2002. 7. 7

パーティー L 木村 一、渡辺聡子、名雪博二 (ACC - J東京)

ある日ACCJのメーリングリストにこんなメールが送信された。

.....

三岩岳山開き ○ 集合=7月7日、午前6:30時 ○ 場所=阿須時温泉

○ 特典=先着450名に記念バッジ贈呈、小豆温泉割引入浴券(入湯税は別途)

○ 主催=伊南村役場、企画振興課、以上の案内が来てます、恨み重なる山です、行く人いるかな?

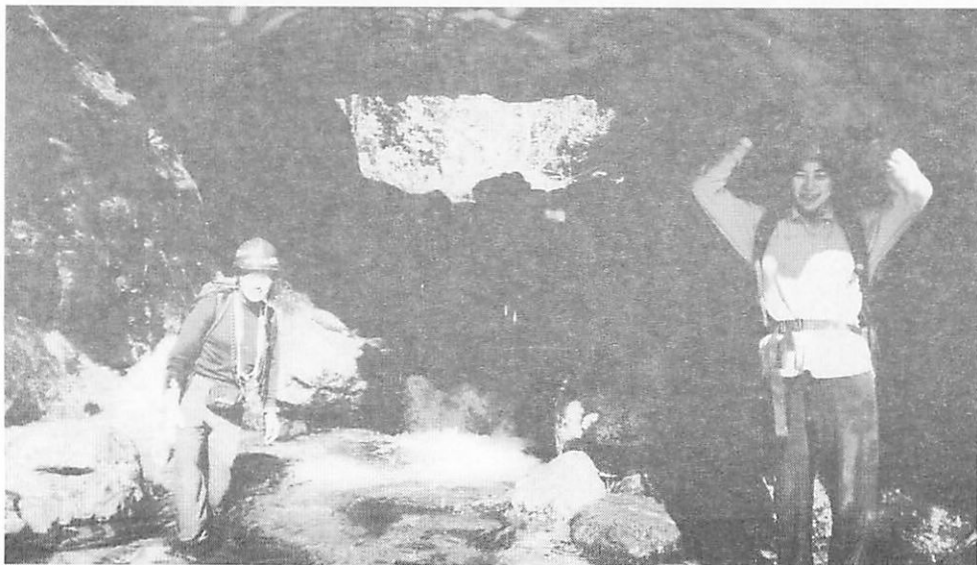
.....

バッジ贈呈と聞いてわたしが行かないわけにはいかんでしょ。ということで足のリハビリの意味もこめて参加することにした。ずーっと登山道を歩くだけではつまらないと最初は沢をつめ、途中登山

道と交差するところで登山道へと移動しその後は黙々と歩き続けて山頂へとたどり着いた。山頂では役場の方達が「御神酒です。」といてみんなにお酒をふるまっており、名雪さんはとてもご満悦の様子であった。さて、足の方はというと登りは特に問題なかったのだが、下りの途中で痛みが出始めちょっとつらかったがなんとか歩き通すことができた。この分なら今後の山行にも問題なさそうである。

普段は我々にとって高嶺の花である入浴料850円の小豆温泉が本日は特別価格150円となっており、ゆっくりとお湯につかった後茨城に戻ってきた。

(渡辺 記)



スノーブリッジ前でポーズ
名雪・渡辺

錫杖岳三ルンゼ

2002. 7. 20～7. 21

パーティー L 本図一統、吉田 仁、渡辺聡子、松原丈夫 (ACC-J東京)

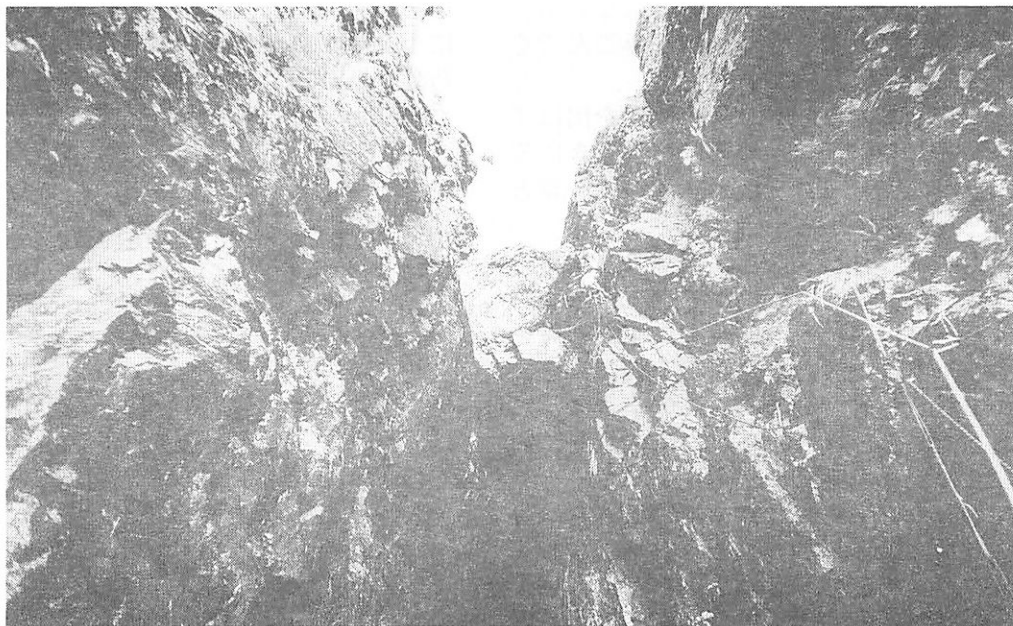
夜にかなり降ったらしく取り付きに着いてみるとルートは、滝と化していた。先行さんが1パーティー居て登るらしいです。御愁傷様、我々は退散します！と思いきや、登るんだそうです！？本当ですか？、、、半信半疑で準備中、先行のセカンドの方が濡れぬ様懸命に滝の左を行くが努力も虚しくロープにテンションを掛けると、あろう事か体は滝の中心へ。なんとも微笑ましい光景でありました。さて私の番です。いきなり濡れるのは、ぜえ～たい勘弁なのでA0で滝の横を直上しました。

その他もA0, A0のオンパレ～ド♪恥も

外聞ありませんビチョビチョなんだから、それに俺のシューズは、乾いてたってフリクション悪いんだから、とー ぜんさ！！でもこのルート乾いてたらド快適に背中景色眺めながら楽しく行けるだろうな、なんて思ってるうちに無事終了！ああ～明日は乾いてるところを 登りたいす。……

翌朝。本日の登攀は雨のため中止になりました。駐車場に下りてきて前回同様、みんなが温泉の浸かっている時にボルの偵察。やっぱりこの辺は、面白そうなのが転がってるなあ～

(吉田 記)



錫杖岳三ルンゼをリードする渡辺

苦土川井戸沢

2002. 7. 28

パーティー L 名雪博二 (ACC-J東京)、渡辺聡子

つくば市役所に21時集合4号国道に出て八板へ、県道30号線を走り、塩原温泉への道をよこぎり、板室温泉へ、那珂川の右岸を行き、深山ダムへ出る、此处でショオベンをしてダム左岸の林道を田島方面に向かいダムを過ぎて右へ行くと三斗小屋宿への終点となる、苦土川をわたる橋の手前だ。

6時42分出発、小一時間で三斗小屋宿蹟だ、今は廃村となっているがその昔は、ここから大峠越えで口留め番所を経て、下郷町の落合へぬけ会津若松方面への要路であった所だ、今は建屋もなく山のただ中に広い空き地となって広がっている、広い通路とその両側に在ったであろう土産物屋、宿屋の礎石が規則正しく並び、石灯籠が通路に沿っていくつも並び、朽日のにぎやかさを感じさせる、何とはなしに、懐かしさと寂しさが心にしみこんでくような好い感じの場所だ。

此处まで7時50分、此处を出はざれると又静かな山の道がありじきに苦土川の支流 井土沢が伏流のゴーロとなって左岸から出合う。

いよいよここからが沢登りになる、井土沢は適度に滝が出てきて飽きることがない、あっという間に核心の滝を越えて、上部のナメ滝の連続に到着、あまりの好天気とペースの早さに、ここでのんびりとビールを冷やして、周りの絶景を眺めながらイッパイ。でもカンビールは飲んでいるときは好いが、飲み終わっちゃうと、むなし、「あと2〜3本しよってくればよかった」といつも思う、が、いつも財力体力共に足りてない。

んで少し登っていくと草付になり直ぐに稜線に出る、那須の山が目前に広がる、遠く檜枝岐のやま山と尾瀬のあたりの山に雲が懸かって、実に気持ちのいい景色だ。

流石山に着く。

ながれいしやま、なのか、サスガ山なのか不明だがおれはサスガヤマと呼ぶ、此处まで登ってきて午前9時25分なのだ、はえー。

大峠經由のんびり下り、なんか食いもんねーかーと思っていたら、たまご茸6つぽんみつけた、いつも物欲しそうに腹を空かして居る渡辺に全部あげちゃった、ふとっばらだねー、肉体関係無しでだよー、だからオレは渡辺にとって大恩人なのですー。

あっちで、こっちで寄り道して車に12時20分に着いた、帰りに幸乃湯500円に入りのんびり選ったつーこと。で。おわり。

(名雪 記)

柿其川

2002. 8. 3~8. 4

パーティー L 本図一統、菊地光夫、渡辺聡子、名雪博二 (ACC-J東京)
三瓶勝利

今年は連日暑い日が続きこの時期は絶好の溪の季節である。いつもなら越後方面や川内方面が多いが、今回は変わり種で中央アルプスの沢では人気がある柿其川本流にと決まる。過去の遡行記録を読むと溪流釣師の入溪は多いものの遡行者が少ないとの事で大変興味を示した。

名雪大隊長がインターネットで調べた結果、我々が入溪する翌々日には柿其川神社の大祭が有り、村の人が大勢集まり餅撒きや振る舞い酒で大賑わいの事。我々も昼頃までには下りて来て餅拾いでもやるべーとの計画であった。

前夜に中央高速道路の座光寺PAで名雪大隊長と合流して柿其川神社の駐車場へ着き、恒例の前夜祭を盛大に行い深い眠りに落ちていった。

翌朝、信仰心の厚い我々は柿其川神社大祭の邪魔にならないようにと本殿と離れた所に車を駐車したが、後日これが大きな事件に発展するとはこの時には誰も想像できなかった。

車を止めた所から少し離れた神社の境内を、神社の氏子と思しき村人が掃除をしていたのが印象的だった。

流れに添って牛ヶ滝までは遊歩道があるが、柿其川神社の前を通り橋の所から7:00に入溪。最初に現れた淵は黒淵と言って幅が10m位あり遡行記録によると水量が多いときには流れも速く困難と記されているが、今回は真夏なので水量も少なく水温も高めなので容易に突破する事が出来た。更に遡ると怒涛の如く水を落としている牛ヶ滝(25m)が目前に現れてきた。この

牛ヶ滝は兩岸が切り立っている為に直登出来ないで、左岸にある遊歩道から続いている梯子を上り四阿に出る。ここからは遊歩道と別れて滝の高巻きにかかるが、急斜面のうえに岩壁が現れてくるので意外と苦勞して落口に出た。牛ヶ滝の上は蛇のようにS字状に曲がった急な側溝のようなゴルジュの中に短い間隔で釜を持った滝が連続して現れてきた。過去の遡行記録を読むとこの先も流れが速く、ショルダーを駆使したヘツリと渡渉を強いられたと記されていたが、今日は水量が少ないせいか難なくクリアして行く。更に少し遡ると霧ヶ滝(10m)に出るが、ここに山女狙いの釣師が1名いた。ここ霧ヶ滝も直登は無理なので少し戻り、左岸のガレを登って林道に出て100mほど林道を歩き、傾斜の緩い所を選びガードレールを跨いで川床に下降した。溪相は再び圧倒的な廊下となり、まもなくスダレ状の虹ヶ滝(10m)が左岸から流れ込んでくる。川幅は更に広がり廊下状が続くが、左岸上には林道が走っており緊急時にはエスケープルートになるので緊張感が希薄になり山奥に入っている感が薄い。花崗岩の側壁に沿って渡渉して行くと頭上高くに橋が架かって林道が横切っているこの付近を箱淵と言う。更に遡ると潮石淵と呼ばれるゴルジュ帯に出る。蛇のように曲がりくねった狭いゴルジュの奥に3m程の滝が落ちているが、この辺りは林道と溪の段差が無く幕営地には最適な場所である。暑い時期なので若人数人が沢に下りて来てバーベキューを楽

しんでいるのを横目に見ながら、我々も今日の泊場を設営する事にした。ターフを張り、焚き火を起しビリーカンで飯を炊き夕食の支度をしていると、立ち上る焚き火の煙を見つけて神社の氏子で祭の実行委員の人が近づいて来て『神社の駐車場に止まっている2台の車はあんたらのけー』と聞いてきた。『そーだよー』と答えると『明日は柿其川神社の大祭があり、あんたらの車が邪魔になんので退かしてくんねーかー』との事。『俺らも登山の途中なので困ったなやー』と言うと『そんじゃー車の鍵を貸してくんねーかー。帰りに神社に寄ってくれば鍵は返すからよー』と言うので車の移動をお願いして一件落着。その村人は『いやーあそこに止めてある車の持ち主をを探しに探したよ。』『柿其川神社の大祭であんたらの車が邪魔になんので必死に探したが見つからず、村の連中が午前と午後に分けて車の持ち主の登山者を探すのに車で必死に探しまわったよー』

『もう諦めていた頃煙が見えたんで煙の所にすっ飛んで来たんだよ。良がった。良がった』と胸を撫で下ろしながら帰って行った。『だけどよー。あした祭があんのは分かっていたからなるべく邪魔になんねーよーに端っこに止めたのによー』とぼやいてみた。しかし、その端っこに柿其川神社の御神体があったのは我々には知る由も無かった。『朝に神社の掃除をしていた人が言ってくれば別の所に止めたのになー』と名雪大隊長の愚痴を聞きながら呑む程に酔う程に柿其川の夜は更けていった。

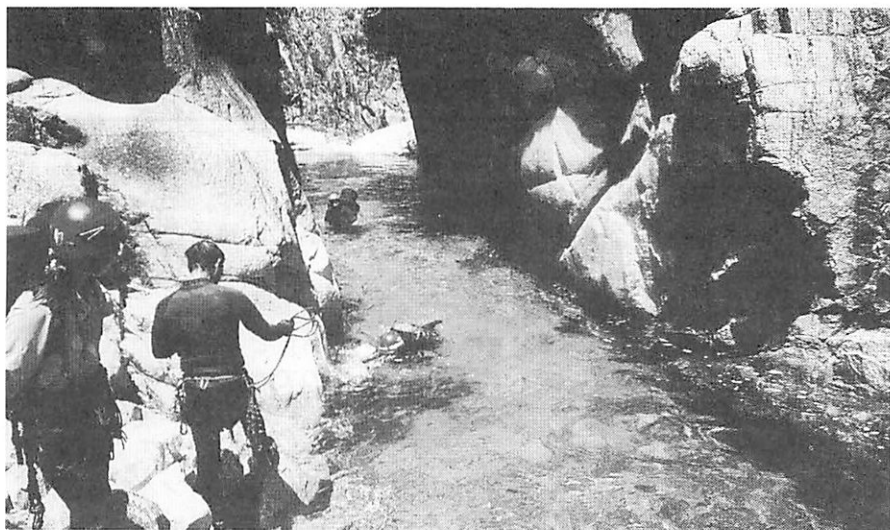
翌日は早朝から手打ちうどんを作り、腹一杯うどんを食べて柿其川の上流を目指した。幕営地から少し遡ると忠兵衛橋が現れその下は美しい淵と釜を持った小滝が続く。沢は再びゴルジュとなり、頭上に橋を3回見送ると沢

は広いゴーロとなる。更に遡ると前方に2段8mの滝が出てくるがこの滝を難なく越すと、釜を持った見事な銚子滝(25m)が待ち構えていた。この銚子滝は右岸側壁の傾斜の緩い所を狙って高巻き、落ち口に出る事が出来た。銚子滝の上はゴルジュになっており5m、4mの滝が連続するが難なく越し、その後簡単な滝がいくつか出てくるが問題なくクリアして林道終点手前で柿其川の遡行は終了。

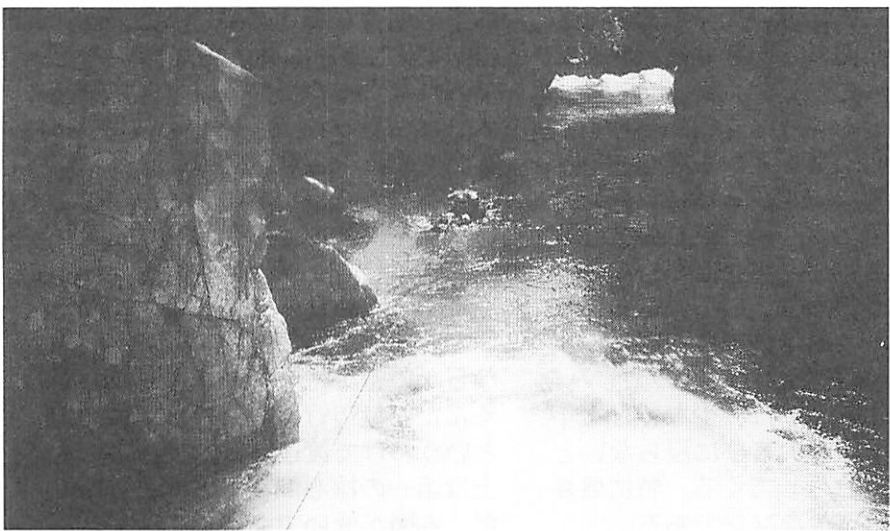
下山路は林道を約3時間で車を止めた所に着くが、途中キノコ狂いのメンバーが数名いたので乳茸(チタケ)をビニールの袋一杯に採った強者もいた。下山後楽しみにしていた大祭の余興は終わっていたのでガッカリしてビールで乾杯。帰路林道から溪の流れを見ると、急流が美しく流れていてすごいゴルジュに見えた。やはり美溪と美人は離れて見るのに限る。

(菊地 記)





柿其川箱淵を泳ぐ
渡辺・三瓶・名雪
・菊地



泳ぎ、泳ぎ、また泳ぎ
の柿其川ゴルジュ



柿其川で特大シャワー
を浴びる 渡辺

坪川三重泉沢下部ゴルジュ

2002. 8. 11

パーティー L 本図一統、吉田 仁、渡辺聡子、名雪博二

締め切りをはるか過ぎたある日、編集長から「原稿依頼を忘れたからすぐ書け」との命令がきた。断るとあとが恐ろしいし、でも何を書いて良いかわからない。

俺は過去に『あいつは変態長だからクビ』と、変酋長をリコールされた人間だから、得意分野ならいくらでも書ける。しかしそれを書くとき又ひんしゆくをかう。

ええい！やぶれかぶれだ！今回は思い当たるままに書いてやるぞ！

密生したヤブをかきわけ、狭くて薄暗くナメナメしたチョックストーンを持つチムニー滝を、あらゆる技術を駆使して真正面から突進する。これは正常なゴルジュ屋のロマンである。谷を知らない人がこの文を読んだら、ただの「エロじじいの戯言」と思うだろう。いやいやちがうのである。これは清純な遊び“ゴルジュ突破”のことなのだ。この楽しみを知った者にとっては、少なくとも年に1回以上はこの喜びに浸らないと禁断症状をおこしてくる。特に盛夏には必要不可欠なブツである。

サンジューセン！なんと聞き心地よい名前なんだろう。“沢やのこころ恋ごころ、溯（のぼ）れば愛の泉湧く”かも知んねえな。さぞかし30程の美しい泉がコンコンと湧いているのだろう。ウッシッシ、ぜひ行かんくっちゃ。

ちょい待てよ！今回は当会の紅一点で綺麗どころ、美人で頭脳明晰で聡明でナイスバディでモチも常に最高レベルを維持している渡辺女史を加えての遡行である。ゆめゆめそんなハシタナイことを考えていたら、

ニードロップに卅固めでバラバラにされてしまうに違いない。ああクワバラクワバラ！心を入れ替えて真面目に行かななくては。

ある案内書によると、ここは「中級者の入門ルート」と書いてある。場所が場所であるのでゴルジュに大きな期待はできないが、前から一度は行ってみたいと考えていた沢である。夏の暑い一日を水に浸かってルンルン気分で楽しもうとでかけた。私はもうひとつ釣果も期待していたのである。

前に来たときは林道が荒れていて車で入れなかったが今日は三重泉橋まで入れた、ラッキー。いつものように小宴会をやって仮眠。俺は起き出して（体を横から縦にして）40分するとトイレを催してくる。これは毎日のことである。きょうも例によって例の如くであった。

ゴルジュに入ると早速泳がなければならぬ釜が待っていた。「だれが行くん？渡辺行くかあ？」「は～い」というわけで渡辺が華麗に泳ぐ。その上は第一の核心部ともいえる8m滝だ。本図が泳いで滝下まで行くも直登は無理な状況。右岸バンドにルートに取るほかあるまい。「だれが行くん？吉田行くかあ？」

「はい」という訳で吉田リード。ある記録によると、かなり悪そうに書いてあったが難無くクリアする。この先は巻く必要も無く水線通しを行ける。と言ってもゴルジュ特有のパズルを解く楽しみも少しはあり「中級者の入門ルート」ということが納得いった。二人共このくらいの沢では各々ルートファインディングを任せてなんら心配ないレベルに達しているようだ。全く

寒さは感じず水に入るのが苦にならない。やはり沢登りはこうでなくっちゃあね。やがて第二の核心部。

「だれが行くんだ？ 渡辺行くかあ？」

「は〜い」ということで渡辺リード。左岸のハングした岩にあるシュリングにアブミをセットして登り切った。あとに続く私はザイルに引かれて登るだけだ。まもなくして右岸より滝ノ沢が流入する。ここで大休止とし、冷や麦を食する。

私はもう一つの目的である釣果を求めて滝ノ沢に入る。竿を出すとすぐに良型のイワナが釣れた。絶対にイワナの刺身は食べない渡辺を尻目に吉田と二人でいただく。

この上はたいした悪場もなく、壊れた堰堤を過ぎると広川原に着いた。昔ここには集落があったそうで、その痕

跡と思われる石垣なども見受けられた。先程の壊れた堰堤はその頃のものであろう。ズックに履き替え、はつきりした踏み跡を辿る。先程までの涼しさはすっ飛び、汗が吹き出してくる。ニグラ尾根を越えて林道に降り立つ。アブがうるさくてじっとしていられない。川内と比べるとなんでもない位なのではあるが、刺されるとやはり痛い。平滝を見学する。わざわざ見に来るほどのことはない滝である。何のためかコンクリートが打ってあった。

あとはアブを払いつつ車に戻った。

良い沢、良い仲間、良い天気に恵まれ楽しい一日を過ごせた。ここから感謝！

(本図 記)



三重泉沢下部ゴルジュをリードする吉田

万太郎谷

2002. 8. 10～8. 11

パーティー L 木村 一、名雪博二、金沢 清 (ACC-J東京)

若かりし頃谷川岳の岩壁に登る為にここ土合駅を数十回利用している。記憶に残っているのは他のパーティーと競ってあの長い階段を駆け足で登り、一ノ倉沢の岩壁に取り付いた事である。しかし、あの長い階段は上越線の下り専用ホームなので一度も下った事はありませんでした。

今回の計画は土樽駅から万太郎谷に登り谷川岳の越えて土合駅に下る計画なので、車を土合駅付近の駐車場に止めて列車で土樽駅に向かう為に土合駅の長い階段を初めて下降しました。本当に長い階段を下りプラットホームに着くとそこではテレビの撮影をしており、後日NHKでその時の放映を見る事が出来ました。現在では土合駅も土樽駅も無人駅になっており、登山者で賑わった昔の面影は見られませんでした。駅舎は当時のままで懐かしい感じがします。

朝一番の電車が8:00過ぎだったので土樽駅を出ると外は真夏の太陽が照り付けていて今日も暑い一日になりそうだ。暫く車道を歩き車道終点から万太郎谷に入渓することにした。車の場合にはここに数台止める事が出来る。入渓後は単調な川原歩きが続くが暫く歩くと胸までの渡渉地点が出てきた。先行4人パーティーに続いて渡渉し、その後現れたナメ滝の中を流れる水流でウォーターライドを楽しんだ後更に遡行すると、左岸に関越トンネルの換気口トンネルが突然現れてきた。ここ万太郎谷には似合わない人工の建築物である。更に遡行するとオキドウ

キョウのゴルジュが出てきたのでここを泳ぎを交えて突破。万太郎谷の楽しい部分が連続して出現してくるのでルンルン気分で遡行すると、目の前に一ノ滝が水飛沫をあげてドーンと現れてきた。名雪隊長が水流の右手を直登するが悪いらしく、途中にザックをデポして更にハーケンを打ちながらの登攀。これを見て金沢隊員は右手のブッシュ沿いに巻き気味に登りだした。名雪隊長に続いて一ノ滝に登るが、名雪隊長が残したザックを押しながらの登攀は非常に疲れる。一ノ滝を越してからはビバークポイントを探しながら遡行を続けるが、二ノ滝を越した所に適当なビバークポイントを見つけてターフを張る。後は焚き火を囲みながら恒例の酒宴になったが今回は岩魚の刺身が無いのでちょっと残念。

沢の中でのビバークは時間がゆったりと過ぎていくのが感じられる。陽が落ちるのと同時に我々の意識も深い闇の中に吸い込まれるように落ちていった。

翌朝6:30ビバークポイントを出発し少し登ると三ノ滝が2段になって水流を落としていた。一段目は水流の右手からホールドスタンスの所を登り、続く2段目は水流を横切っていくの字形に登って上部のブッシュ帯でピッチを切る。後はブッシュ帯をトラバースして三ノ滝上に出て終了。この上には大きな滝もないのでザイルをザックに入れてトイ状の滝に登りノゾキ沢を合わせた2俣は右に入り、更に奥の2俣も右へ入ると後は笹と草と岩の斜面を登ると肩ノ

小屋直下の縦走路に飛び出して遡行が終了。

肩ノ小屋は立替中に入れなかったが近くで大休止して昼食。西黒尾根を下降するが、久し振りに下降する

西黒尾根は我々には非常に長く感じられた。しかし、ここ谷川岳の周辺にも楽しい沢があるので集中して登ってみました。

(木村 記)



万太郎谷
三ノ滝沢前にて
木村・名雪

黒部.上ノ廊下

2002. 8. 14~8. 18

パーティー L 笹平 孝、渡辺聡子、松原丈夫 (ACC-J東京)

頼みの綱のカップが仕事の都合でキャンセルとなり、「泳ぎは自信がありません、よろしく!」と「いや〜・・・」と「泳ぎはだめ」という非常にこころもとない3人が残された(おいおい本当に大丈夫か?)。事前にトロリーバスのクーポン券を購入していったのでチケット売り場の行列を横目にチケットを入手でき、いつもより余裕をもって一番バスに乗ることができた(これはとても使える)。なんでこんな設定にしたんだか、ダムから渡しまでの距離と船の出発時間を考えるとほとんど余裕はなく、ただひたすら早足で歩き続けなんとか10時20分の船に

乗り込む(すでに本日終了って気分)。対岸にわたった後も延々と歩き続けてやっと長いアプローチが終了した。奥黒部ヒュッテの小屋番さんに計画書を提出し、水量を訊ねると「今年は多い」「いつもなら腰までの徒渉が今年は首までつかる」

(そんなの徒渉っていうか!)「下の黒ビンガ先の泳ぎが簡単に行けないようだったらその先は無理だ」などとさんざん脅かされて、とどめは「まあ1人泳げる人がいれば大丈夫だ」と(それが一番問題なんだよね)。一番の核心のこなしかたを聞き、ヒュッテを後にしてなんとなく暗い気分に入溪準備をする。少しで

も先に進んでおきたい気持ちが強かったが熊の岩にタープを張った（だったら12時の船でもよかったな）。例によってたき火をして就寝。夜中に雨が降る。

今にも雨が降り出しそうな空の中出発。出だしすぐに膝下の徒渉になり、その後は腰までの徒渉が続く。最初はちょっとぎこちなかったスクラムも回数を重ねるごとに安定し、気付いたら下ノ黒ビンガだった。先へ進むと小屋番さんに言われた泳ぎのゴルジュが現れたが笹平さんが楽勝突破し（なんか大丈夫かも）、先へと進む。小雨が降ったりやんだりの天気のおかげ順調に進むが、上の黒ビンガを過ぎたところから本格的に雨が降り出して、金作谷の手前の激流を左岸に渡った直後、一気に増水が始まった。ひとまず高台の上に非難し、川を見るとその直前まで我々がいた右岸はすっかり川の流れの中に入ってしまったっており、水は激しい濁流と化していた（あぶなかったあ）。一時避難の高台のさらに上の所になんとかビバークできそうな場所があったので本日の宿はそこと決まった。水がとれる場所を探し出し、当初は1人が横になるのもやっとのスペースを3人がゆったり眠れるように整地したので、顔が腫れ目が開かなくなるくらい虫にさされたがまずまず快適なBPだった。夕方には雨もやんだので焚き火と花火を堪能した。

朝には水もかなり引き濁りもなくなっていたので予定通り出発すると、割とすぐに金作谷出合となり奥黒部ヒュッテの小屋番さんがいう核心部へやってきた。少し躊躇したが意を決して飛び込み、ひやっとしたものの無事に通過（やったね!）。後は特に問題となる箇所もなく、薬師沢小屋までやってきた（とりあえず一安心だあ）。赤木沢出合手前のところに快適そうな場所を見つけ本日の宿とする。ビールを買い込み、釣り上がつ

てきた二人の釣果に大拍手。タープをはって一息つきかけたときにはげしい夕立がやってきて、焚き火用の薪をぐっしり濡らしてしまった。だが、ネバーギブアップの焚き火王は負けなかった（さすがです）。我々のパーティーだけは盛大に火をおこし、濡れた服をすっかり乾かすことができたのであった。

遅くまで焚き火にあたっていたので出発が少し遅くなってしまった。ちょっと悪いゴルジュを水線通しに行くと赤木沢出合にでた。この出合の滞はすばらしく美しい。赤木沢を過ぎると水量も少なくなり、穏やかな流れを見ながら延々と歩き続けてやっと黒部川最初の流れにたどり着いた（長かったあ）。達成感を胸に黒部最初の一滴で作った水割りを一口ご相伴にあずかる（おいしかったあ）。靴を履き替えガチャをはずして黒部五郎のテント場まで登山道を歩く。途中から一緒だったパーティーは「稜線はタープじゃもたない」と言って三俣蓮華の小屋に逃げ込んでいた（我々タープでもたせようとしてるんだけど・・）。次第にガスがかかり遠くで雷鳴も聞こえてきて、早く早くと気持ちは焦るのだがすでに長時間歩き続けているため思うように進めず、ようやく小屋のテント場についたときは本当にほっとした（あー怖かった、あー疲れた）。タープを低めに張ってこころ穏やかに就寝。

剋岳を見ながらアップダウンの少ない稜線を烏帽子の小屋までやってきた。後はゴールの高瀬ダ

ムまで下るだけ、と思っていたら「昨日の夕方、土砂崩れで葛温泉から先通行止め」という情報がはいってきた。我々がダムに着く頃には復旧しているに違いないというかすかな望みを胸に高瀬ダムまで下りてみたが、案の定望みははかなく

も消え失せたのだった。ゴールが6 kmも延び、しかもコンクリート。すっごく疲れたけど、すっごく楽しかった。

(渡辺 記)



黒部上ノ廊下にて 松原・渡辺・笹平



黒部上ノ廊下 泳いで突破 渡辺・松原

東黒沢＋白毛門沢(湯檜曾川本流大増水)

2002. 8. 15～8. 16

パーティー L 木村 一、鯉河仁志、名雪博二、金沢 清 (ACC-J東京)

平成14年の夏は伝達性牛海綿状脳症の仕事でまとまった休みが取れなく、仕方なくこまぎれの沢登山行を何度か試みた。

柿其川のゴルジュ突破と、4日前の万太郎谷とで気を良くしたので、今回は湯檜曾川本谷を登る目的で、川越を21:00時に出発した、メンバーは例のメンバーで、平均年齢と言い、グレードと言いい何ともはや、言いようのないメンバーだ。いやはや！

土合の先の東黒沢の出合の駐車場に車を入れて少々仮眠を取る、明るくなったので、旧道の終点、マチガ沢のすぐそばの駐車場に車を移動して、湯檜曾川を見ると、昨日までの大雨で大増水したらしく、まったく、とりつくしまがない、仕方なく本日は時間をつぶし、水が引くのを予定して東黒沢をつめて、白毛門沢の出合と、その手前にあるハナゲの滝の偵察山行をすることにして、ゆっくりと出発。

東黒沢を登って行く、水量が多いので、さすがに他の沢やはいない。直ぐにハナゲの滝(20×30)に着く、ここはナメ滝とのことだが増水の影響か、水流は10メートルぐらい空中高く吹き上げている。これを左側から越えると、やがて白毛門沢との出合となる白毛門沢はすぐ消えてしまいそうなほんの小さな支流に見える。此処までが増水で登りにくかった、ここを越えて20～30分行くと右岸に登山道(踏み蹟程度)が出てきて、沢を渡って左岸の小さな支流沿いに登っていく、此は今はいよいよあまり利用する者がいなくなってしまうが、左岸の赤沢山(1328, 1)と1391Pの間の鞍部に出

て1418, 5Pを越えて宝川に抜けるルートになっている。このルートはこの二つのピークの左側に平地がありその側面を通るルートであり、白毛門の頂上から南東にこの平地(草地と思われる)が良く見渡せる、この踏み蹟を見送り、30分ほど登ると広々とした沢から何本か支流を分けて急に、細々とした沢になってくる。

金山沢を分けて、丸山沢となる、この先の二股まで遡る、此処が奥の二股で右の支流を行くと鞍部直前を思わせる部分となる。此処は白毛門から東へ派生するただ広い尾根が急に150mほど高度を落とし、武能岳(丸山)1495mとの鞍部に通じる沢だ、この鞍部を越えるとウツボキ沢の最下流の右岸の支流となり直ぐ宝川に流れ込む。山スキーや、沢登山の連続に利用価値の高い要所である。

此処まで来たがこの先は滝も無さそうなので下降する。

金山沢出合の下で、大きな倒木が右岸にあり、それに何やらキノコらしい物が生えている、此を見て人が変わってしまい、何やら唸りながら取っている、人を押しのけて、気が狂って終い、人事不省だ、なんのことはなくキクラゲがイッっぱい生えているだけだ、ACC-Jには、こう言う、性癖がある。山で、山菜、キノコ、魚等、何か食べる物を見付けると、今の今まで和やかに、仲良く、肩を組んで手をつないで歩いて来たのが、まるで嘘のように、全て自分以外の者を敵視して、自分だけがそれらの獲物を全て捕りきってしまうと気が済まないのでしょうか。ウーツと唸りながら、狂ったように取り散らかし、その蹟には、将にペンペン草も生えないようにしてしまいます。山を枯らして終います。これか

らは彼らを山枯らしと呼ぼう。

会の代表、チーフリーダーからして、この性癖が顕著である。ましてや会員は推して知るべき、である、皆さん今後ACC-J(東京)との山行中、何か食える物が落ちていたり、生えていたり、泳いでたりした時は、いち早く逃げた方がいいですよ、何をされるか解ったものじゃー在りませんからね。おーこわ！

東黒沢出合に戻り、河原にテントを張り、たき火をして、飯合の米を炊き始めたとたんに、雨が降ってきた、大雨には成らないだろうと思っていたら、すごい雨が降り出し、河原にいるのが心配になり、堰堤にテントを移動する事になる、そのおかげで意外に惨めな宴会になってしまう、しかし酒だけは、しっかりなので、すっかり酔っぱらった。

翌朝は良く晴れた、出発したが、他のパーティーは見かけない、ほぼ貸し切り状態、白毛門沢の出合までは、水が大分引いてきたので、アツという間である。

白毛門沢は難しい滝は全くない、上部の草付に出る手前のスラブ帯、ジジ岩が近く見えるあたりの方が、傾斜が急で沢の中の滝越えよりも、少々緊張させられる。頂上にヒョッコリ飛び出す、いきなり眺めが良くなる、藪こぎがほとんどない、と良い沢だ。単独でもあまり不安を感じないだろう、アプローチも短くて、又チャンスが在れば行っても好い沢だと思う。

さすがに8月だ、下りが暑い、あせだくだ。東黒沢出合に架かる橋の下の小さな淵に、飛び込む、パンツを脱いで、入るときは少し冷たいが、飛び込んで3分もすると、もう出るのがイヤになるほど気持ちがいい。夏は此に限る、パンツを脱いで、ドッボンダ、5分も浸かって居ればフロ代500円が儲かる。

帰りは、下牧の、むらた、にて腹一杯喰って還った。おわり。

(名雪 記)



東黒沢にて 名雪・金沢・名雪

剣岳～穂高岳大縦走

2002. 7. 4～7. 30

パーティー 石川 泰士

0、すべての始まり

この夏も僕はつくばを離れ、普段とは全く違う世界に飛び込んでいった。どうしてだろうか。自然と体と心が普段とは違う刺激を求めるのだ。あの遠くに見えるピーク、様々な人との出会い、そんなものを求める生活が何時の間にか自分の毎日の base となっていることに気付く。

僕の登山暦は一年前に始まる。大学の自由科目“登山”の授業で登った、筑波山が最初だった。大学を夜八時に歩いて出発し、山頂で日の出を見ようという内容のものである。

富士山。授業以外での初めての登山だった。海から仰ぎ見た富士の頂は雲に隠れて姿が見えない。山々の神々しさに初めて対峙した瞬間。僕は不安の渦に引き込まれそうになるのを感じた。今となれば、その時に僕が感じた山への畏怖心など、大きなものではなかっただろう。

仲間との登山がこんなにも楽しいものだ、と感じたのは授業で登った妙高山。授業最後の山行という事もあって、生徒の主体性に任せた自由な登山というものがテーマであったように思う。

山に登ってくれば、皆、素直になれる。疲れのあまり動けなくなった時の苦悶に満ちた表情の中にも、頂に立ったときのうれしさに満ちた表彰にも、隠すところなく在りのままの感情が表れている。山で出会う人との素直な心と心の交流が楽しい。

僕はどうしてこんなにも山が好きなのだろう。僕にとって心が求めるものこそ、山々であり、自然であるように感じる。

1、憧れの穂高へ

7月9日～7月14日の期間、岐阜県神岡町にあるスーパーカミオカンデでボランティアをし、その足で一ヶ月の山小屋アルバイトに向かった。「穂高岳山荘」は、日本で標高が三番目に高い奥穂高岳(標高3190m)まで一時間の場所にある山小屋だ。小屋自体も2960mの位置にある。山の雑誌を読んだことのある人ならば、おそらく一度は聞いたことのある名前だろう。この山域のパイオニアである今田重太郎氏が80年も昔に、資材を人力で担ぎ運び、作ったのだそう。夏には、上高地からの登山客でとても賑わい、一日に600人も人が泊まることもある。

僕は去年、大学の授業でこの山域に来ていたのだが、その頃はまだ穂高の主峰の名すら知らない。上高地から見える高く連なる山々の荘厳さが印象的で、あの高みに自分が登ることはいつまでも現実味を帯びない憧れのように感じられた。そのうちいろいろな山に登り、自分の体力と技術が身に付き、次第に憧れが目標になる。

山小屋での生活は、シンプルだ。働き、一日の疲れを取るべく酒を飲み交わし、言葉を交わし、一日を終える。毎日が精一杯、退屈なルーティーンワークの中には様々な人間模様がある。

寝ても起きて山々が見える。そこには、普段我々が決して見られない、自然の造形美があった。何を見ても、飽きることがなかった。遮る物なく遙か遠くに見える富士には日本の主峰としての存在感が、月光に暗く映し出された槍ヶ岳の姿には昼間とは違った圧迫感

が漂っている。

晴れた日には仲間と夜の涸沢岳(3110m)によく登った。夏の繁忙期にあつて、仕事を終えた体はもうくたくたな筈なのに、15分の道のりをボッカトレニングと称して荷物を担いで登ったものだ。タバコを一箱、そしてサントリーOLDを持って。“絶対こんな時間に、こんな眺めの良い所で、なー、俺らだけ贅沢だよなー” 遠くには高山、塩尻や諏訪の夜景が見える。色々な歌を歌い、様々な事について語った。

辛い事があつた日にも涸沢岳へ向かう。その様な日に限って、登っているうちに雲が出てくる。全てを包み込まれてしまいそうな、恐怖心の中から抜け出そうと、大きな石がごろごろしている急な下り道をひとり走った。

穂高岳山荘での一ヶ月は、あまりにも暖かく、山荘の皆は家族同然だった。

2、雪と岩の殿堂～剣岳

アルバイトを終えて帰宅した僕には、縦走への迷いが生じていた。山荘での一ヶ月で山の恐ろしさを知り、計画不足、かつ経験不足なこの単独縦走が無謀なことにすら思えたからであつた。家族に計画を打ち明けるときにも、自分の不安を親に感じとられ、猛反対される。

“自分に自信がないのに挑戦的なことをして、もし事故にでもあえば・・・” 親の心配はもっともな事だった。しかし、山岳会からの許可が出ていることを考えると、この縦走は無謀なのでもない。きっと自分にとって次へのステップになるよい経験になるはずだ、と感じられた。

帰ってからの三日間(準備期間にしては短すぎる)必死で準備をし、計画を立てた。入山は富山市から北東へ40km程に位置する上市町馬場島。アクセスが悪く、最寄りの駅からはタクシーで3・40分かかるため、早朝から出発するに

は前日迄に馬場島に着いておく必要があつた。

僕には富山県立山町に陶芸家の親類がいる。会った事が一度しかない遠い親戚なのだが縁を頼り、一夜の宿をお願いすることにしたのだ。富山の家族は単独縦走前の不安の心境にある僕を厚いもてなしで迎え入れてくれた。近所の風呂に行った帰り道、陶芸一家の跡取りである僕の再従兄弟は僕を立山の山岳警備に数十年関わる山人の家に案内してくれた。山人は華奢な体つきではあるが、話し方に風格がにじみ出ている。

海からの湿った風が3000mの立山連峰まで急激に上昇するために富山の山域では、夕立・雷が大変なものである旨を聞かされた。だから、晴れた日は早出早帰りは鉄則だ、ということらしい。他にも参考になる話を聞くことができた。山で死ぬ人々は自分の判断ミスで死んでゆく。決して自然を軽く見るな。彼は長年の山岳救助の立場から僕にそう諭してくれた。そして、一日目のルートを山人の話を参考に当初の予定から変更することにした。

次の朝は4時という早朝にもかかわらず、富山の家族は僕を登山口まで車で送ってくれた。一日だけの滞在だったが、家族の雰囲気が一変した僕には懐かしく、名残惜しい別れであつた。

天候は曇り。何とも重苦しい出発だった。それでも、スタートが切れたのは自分の中で覚悟ができていたからだ。今思えば、それは小さな覚悟でしかなかったのかもしれない。僕が背負っているものは、家族の愛情と自分への期待・不安であるという自覚。この気持ちはこれからどんな山に登るときにでも忘れたくない気持

ちだ。自分の楽しみのために犠牲にするものの重さ。今までのどんな山行よりも強く感じている。

早月尾根は剣岳(2998m)に突き上げる、距離が長く、標高差(2300m)がある尾根だ。途中、山小屋が一軒在るが、そこから次の小屋まで歩いて8時間(剣山荘)かかる。しかも、エスケープルートがない。険しい岩場の連続であるため、天候悪化時は引き返すか、岩場でのビバークを強いられることとなる。縦走の装備20kg以上を担いでいた僕にとって、初日からハードなスケジュールになった。

案外順調に僕は高度を稼ぐ事が出来た。同時に登り始めたはずのパーティーの姿は歩き始めて数分で見えなくなった。悪天の中、この尾根を先行くものは無く孤独な登山となった。剣岳には登り初めから7時間後に登頂。人の姿も、景色すら見えない悪天である。富山の親類が握ってくれた冷たくなったおにぎりを二個食べた。山頂の小さな社に登頂の感謝とこれからの旅の安全を祈った後、風も吹き荒れる中、いずれ降り始めるはずであろう雨を案じて下り始める。

剣岳からの下山には「カニのヨコバイ」の他、毎年、死者が出る難所がいくつか待っている。雨交じりの暴風で体力が奪われてゆく中、濡れた岩で足を滑らせればどうなるか、雨の強くなる前に下山しなければどうなるか、不安と焦りで気持ちにゆとりが無くなって来る。そして急げば急ぐほど、岩の歩きにくさがいらだたしい。そのうちに疲れのあまり眠くなった。僕は少し休憩を取ることにした。

数分の眠りだった。半ばそれは現実逃避だったのかもしれない。目が覚め、変わらずに吹き荒れる風と、ドンヨリ曇る空を見て、現実を思い出す。

冷静さが戻っていた。昨晚の寝不足と標高差2500mほどを急ぎ登った疲れはやはり大きかった事がわかる。今なら、それが冬山でなくて、よかったと思える。休憩をとるにも正確な判断で休憩ポイントを取らなければ、命を落としかねない。いずれにしる僕が休憩を取ったという判断は、これから難所を通過すると言う事を考えれば間違っていなかった。

風は大抵、稜線の両側から吹き上げる事はないため風の弱い側に出れば悪天候でも不思議なほど静かなのだ。「カニのヨコバイ」は、幸い風の少ない側の斜面だった。下をみてもガスのため何も見えない。“ゲレンデでの練習と同じ。大丈夫だ”。そういう自信があった。この岩場の事よりも雷の問題が僕の頭をもたげていた。稜線上は雷時には避雷針と同じ役割を果たす。雷は稜線上を伝って流れるため、雷がおさまるまで稜線を少し外れて非難する必要がある。濡れた岩場なら電気を通しやすい。また、荷物の中には金属が入っている。感電死には靴の留め金に雷が流れたケースもあるくらいである。現状では大変危険だ。とりあえず岩場を抜け出る事が必要だった。

いざ、という時にはビバークをせねばならない事は、登る前からわかっていて。岩場に行けばビバークなど日常茶飯事なのだが、生憎、僕はビバークを経験したことがなかった。本で読んだ知識でどこまで対応できるか。今思えば準備不足と、経験不足を反省するあまりだ。それでも、何とかしてベストな判断をしなくてはならなかった。とりあえず先を急いだ。岩場を抜け出した頃だった。雷鳴が響き渡る。と、同時に雨も強くなってきた。間一髪だった。

雷が近くなってきたため、そろそろ近くに見えるはずの剣山荘に向かっ

て、荷網を草の陰において走り出した。とにかく雷が怖くて、走った。後で人に話したところ、その必要はなかった、と馬鹿にされ、笑われてしまったのだが。雨がやんだころ荷物をとりに戻った。もう5時である。予定ではテン場でのんびりしているはずの時間だ。

少し先に見える剣沢キャンプ場へ向かった。もう疲労困憊、足も自由に動かない。テントの中では横になるのが精一杯だった。明日は大丈夫だろうか、と、自分の足をマッサージしてやる。やはり登山暦一年、サークルにも入らずにやってきた、経験不足な人間が一人で来るべき所ではなかったのだろうか?そんな後悔の気持ちもあるにはあったが、それよりも充実感が僕の心を満たしてくれた。

剣沢の夜は風が強く、スッキリ晴れたせいであまり暖かい。しっかり張らなかつたせいかテントはずいぶん傾いているのがわかる。それでも、テントを張り直す事すらせずに僕は安心感の中ぐっすり眠ったのだった。時間は7時頃だったと思う。

3、晴天の中で～立山連峰

起き掛け、体が重いことに気付く。もしかしたらやばいかも。そう感じながら、水を汲みに行く。とりあえず暖かいものでも飲みたい気分だ。お湯を沸かし、味噌汁か何かを飲んだと思う。朝食をとり、テントを片付けようと外に出れば、すばらしい青の空が広がっていた。カールで削り取られた丸い青空に浮かぶ白い雲、後方には、昨日登ってきた剣岳の猛々しい姿があった。

テン場管理局の人たちが流すラジオ体操の音にあわせて、体を動かした。気持ちがよい。思ったよりも体が動く。気分的な疲れはすっかり取れたようだ。気合十分、立山を乗り切る準備も十分。

一ヶ月の山荘での生活で、心臓が強くなったのを感じる。血中の赤血球濃度が

高いせいか、ほとんど息が切れない。足も軽い。誰にも抜かされることなく快調に立山連峰主峰、大汝山に登頂した。遠くには、これから向かう槍ヶ岳の矛先が見える。遥か彼方に望む行く手の姿をその時はまだまだ遠くに感じていた。

あまりにも気持ちよくて、山頂で30分ほど居眠りをした。立山は、標高2700mくらいの所まで車で入山できるため、一般の観光客が手軽に景色と登山を満喫できるのが魅力だ。休日であり、且つ好天である事から、たくさんの人がやってくる。人の多さで疲れてしまうので、僕はコーラを一本だけ買って飲み、観光地を楽しむことなく後にした。

それにしてもいい天気だ。と、のんびり歩いていると、昼間の暑さで湿気を含んだ雲が見えてくる。もしかしたら、と思って早足で今日のテン場へ急いだ。五色が原までの道のりは、黒部と富山を分ける稜線上にある。どちらかと言うと似たような標高が続く黒部側に登山道があったため、標高差があるはずの富山側の景色を見ることはなかった。

登山道が富山側に出たときだった。遥か下方に見える谷の、あまりの低さに目を疑ってしまう。黒部側との景色の違いに驚いた。似たような標高を縦走するうちに現在の標高の高さを忘れていたことに気付く。立山の主峰からは下ったとはいえ、標高2600m付近にいるのだ。筑波山の四倍の高さにいる。まったく高度感覚が麻痺してしまう。

五色が原は高層湿原である。周囲の山々の高さのせいで、さほど標高の高さを感じないが、2500mの標高に位置する。黒部溪谷からの登山道とは、ここで合流する。黒部溪谷

と立山、そして白馬岳、槍ヶ岳、薬師岳、すべてが見渡せる場所だ。立山からは歩いて3時間程の位置にあるのにさほど人は多くない。ちょっとした穴場だろう。少しの間出ていた雲も引いて、暑い日差しが照りつける。昨晚濡れてしまった衣服も乾かすことができた。

その晩である。あまり人も多くないテン場の中で、一際大きなテントの集団があった。どこかの大学の合宿のようだ。もしかしたら今晚やるかな、と思っていたらヤッパリやらかしてくれた。彼らは7時ごろに宴をはじめたのだ。若者の少ない山に在って、貴重な登山の継承者だ、などと大目にみるとひどい目にあう。しょうがないことだからと眠りに着こうとするが、彼らの話すことが気になって余計に目が冴え渡るばかりだ。

“～せんばび、あるいてくさいよ～” “だいすきよ～” “あ、はいちゃった☆”等と、気になる様な声ばかり聞こえてくる。眠気と、好奇心が混沌とする中、大変気持ちの良くない夜であった……けど、ちょっとうらやましかったかな……。

4、天井に住む鳥～薬師岳

ここからは縦走路は、他に分岐することなくほぼ一本道となるため、一度会った人とは道中幾度も会うことになる。正直この日はそんなに辛い道中だと思っていた。実際、途中まではなだらかな上り下りだけの快調な登山路である。好天のせいで温度が高く、次の小屋が見えたころには、ちょうど水がなくなりかけていた。この縦走路の要所所には道程があるのだが、“スゴの頭”の道程にはこう書いてある。“近くて遠いスゴの小屋”。この山城唯一の小屋であるスゴ乗越小屋は、見える程に近くはなかった。丹沢三ツ峰を思わせる急激な小ピークのがつづく。岩

の一つ一つが大きく、ひとつの岩から降りる度に膝を屈伸させなければならない。大変に疲れた。ちなみに今回の縦走中の最低標高点はスゴ乗越だった(2150m付近)。

驚くのは、この縦走路にくる年配の方々のパワーである。彼らの特徴は、夫婦でやってきているところだ。あるおばさんは日傘を差しながら登っている。“アラー、大学生。どこお？あら、つくばあ。あら、そおう。私の息子は去年大学を卒業してね・云々”。必死で登っている最中、話し掛けられるのがしゃくだった。おばさんの体力は人並みではない。僕が今まで穂高や、南アルプス、奥秩父で見た年配登山者の中でも一番元気な彼女に僕は、ライバル心すら抱きながら我武者羅に登っていった。一応、自分の名誉のために(つまらないことだけど)言っておきたい。僕が彼らに抜かされることはなく、出発したのも彼らの一時間近く前であったことを。

それにしても薬師岳は遠かった。当然、標高差もあるのだが、それよりも距離が長かった。予期しない苦勞に、体よりも心が先に折れてしまった。近道などあるはずもない。あまりにも良い天気の中、“んー、薬師カールの緑が美しいなー”、などという気持ちにはなれなかった。それよりも“ピークはまだか!”と叫びたい気分。もし天気でも悪いものなら最悪だったろう。まだマシだな、などとも決して考えられない。

そろそろ北薬師岳だろう、と思って大きな岩をひとつ乗り越えた時だった。目の前に小さな灰色の鳥の親子がひょこひょこ歩いている。雷鳥だ。あまりにかわいい雷鳥の親子に心奪われる事で、すっかりいらいらした気持ちなどどこかに吹き飛んでいった。その頃には、遥か遠方に見えていた、薬師の黄

色い山肌も一つ一つの岩を確認できるほどに近くなっていることに気付く。薬師岳山荘まで行けば、穂高岳山荘時代の上司が働いているから、働けば御飯付きで泊めてもらえるかもしれない、よし、ひと頑張りだ。

5、出会い～黒部五郎岳

薬師岳山荘の入り口前では、二・三人が一日の無事をビールで祝っていた。天井の夕涼み、といった所か。良い頃合に色づいた空色が綺麗だった。小屋の中に僕はすぐさま見知った顔を見つめることができた。穂高岳山荘の調理場責任者の赤兵衛さんだ。元相撲部で力持ち、たたき上げの料理人である。穂高山荘アルバイト時代は彼に随分面倒を見てもらった。

入り口の戸を引き“赤兵衛さん”と、声をかけてみる。

“たいじ——”聞き覚えのある仲間の声はとても懐かしかった。知り合いも作らず一人黙々と歩き続けた三日間の中で一番ホッとした瞬間。

“お前今日来たのか、よく来た。今日どこまで行くんだ?”

“俺、テントだから、まだ先を目指すんですよ。テン場まで一時間くらいです”

“もう遅いから、泊まっていけよ。ちょっと待ってろ。今女将さんに言ってやるから”

穂高岳山荘にいた頃は、よくバイト仲間同士で赤兵衛さんのおせっかい癖を笑ったものだ。そんな彼のおせっかいも、今日の僕には有難い優しさだった。

早速、薬師岳山荘の女主人、堀井さんに紹介してもらう。むさくるしい山の世界にあって、女性が経営す

る山小屋は、ここ以外に蝶ヶ岳ヒュッテしか知らない。彼女は長旅で疲れた僕を案じて快く泊めてくれた。泊めてもらう御礼ばかり、僕は夕食の準備を手伝うことにした。疲れているはずなのに体が自然と動く。赤兵衛さんに会って元気が出たみたいだ。しばらくすると、僕が途中で追い越してきた人たちが続々と小屋の中に入って来た。小屋で働いている僕を見て、彼らは驚いた表情をした。“あれ、さっきのお兄ちゃんでない?”

その夜は、お腹一杯ご馳走を食べさせてもらう。手打ちのうどんまでいただいた。香川出身スタッフがうどんを打ってくれたそう。先日など、堀井さんのご主人が下界から担ぎあげた新鮮なネタを使って、料理人の赤兵衛さんが本物のすしを振舞ったらしい。忙しく働く山荘のスタッフにとって、内飯（山荘従業員の食事、客食とは違う）こそ唯一の楽しみである。だから、内飯は結構豪華な食事が出たりするものだ。しばらく栄養補給ばかり淋しい食事が続いた事もあって、三日ぶりの人の温もりを感じる楽しい食事が嬉しかった。

食後、昼間の疲れで布団にぐったりしていると、赤兵衛さんが僕の足をマッサージしてくれた。山荘では上司と部下の関係柄、込み入ったことを話した事はなかった。今、仕事場を離れて接した赤兵衛さんは、穂高岳山荘時代には話してくれなかったような、スタッフ同志の人間関係について幾つかの事を話してくれた。

山小屋アルバイトの難しいところは、スタッフ同志の人間関係にある。夏の忙しい時期はハードな仕事が毎日続くから、みんなストレスが溜まって来る。そうしてストレスを溜めた者同士が衝突して問題を起こすことは少なくない。そんな時、当事者が下山するくらいしか解決策はない。僕が穂高岳山荘にいる間に

も僕の慕う先輩、タースケさんが誰にも告げずに一人下山してしまった。彼の場合直接的にはバイト同士の人間関係が問題で下山したわけではないが、ストレスがたまっていた事に違いはなかった。“山を愛する人間は、きっと山小屋を好きになれない”、彼がよくそう言っていたのを思い出す。

翌朝3時45分、僕が目覚ますともう山荘スタッフは朝食の準備に取り掛かろうとしていた。テントの回収や、朝食の準備の必要がないため、出発時間をいつもより早めの4時30分に決めている。暖かな雰囲気が、旅の孤独さを救った一夜だった。遥か先に見える山々に向けた自分の気持ちに、一点の曇りもない。いっそう強くなる気持ちを胸に、初日より少し軽くなったザックを担ぎ、出発前に山荘の方々にお礼を言うために食堂に入った。と、目の前のテーブルに大きなおにぎりと暖かい朝食が用意してあった。

出発後しばらくの間、朝日を迎える前の静かに冷えた山の間を、一人の寂しさを振り払うように僕は走った。昨日までは重かった足が、今日は軽い。体が新たなフィールドを求めている。さあ、進むんだ、先は長い。

“くろよん”で有名な関西電力の黒部第四ダムに流れ込む黒部川の源流にむかう。我々の知る黒部の姿は、鋭く切れ込む黒部溪谷の隙間を縫って急激な高度さを一気に下り日本海に流れ込む急流である。しかし、黒部の源流・黒部カールは中・下流域の激しさとは対称的に静かな、真夏の高原だった。カールの所々に高山の短い夏を彩る花々が可愛らしく咲いている。

黒部カールを懐に抱える黒部五郎岳は、山容が女性的でなだらか、緑が美しい山であった。一般的に人が多い

飛騨山脈（北アルプス）の中にあつてはあまり人も入っていないと言える。山頂で僕は、山荘で頂いたおにぎりを頬張りながら休憩をとることにした。今日も相変わらずいい天気だ。遠方には今まで歩いて来た道程、これから歩いてゆく道程の全てが見える。やっとここまで来たのか、という安心感がある。何と行っても明日の今頃には槍ヶ岳の山頂に着いているのだから。

山で出会う人々との交流を楽しむのが、僕の登山のスタイルである。人見知りなどせずに“おはようございます”

“こんにちは”と出会う人の一人一人に挨拶をすることは登山の楽しみの一つだと僕は思っている。ただ、今回に限っては違っていた。他人に話し掛けられることはあっても自分から話し掛けることは有り得なかった。それは、慣れない単独行への不安と緊張から、先を急ぐ気持ちばかりが強くなっていったためかもしれない。

そよぐ風は、照りつける太陽の暑さとは対照的に涼しく、心地よい。山頂での休憩の後、再び先を目指して歩き出した。足が軽いのは、赤兵衛さんのマッサージのおかげだ。僕は快調に黒部の下りを楽しむ。自然のフィールドは少しの道具さえあればどこでも遊び場へと変化する。登山道のように、障害の多い道は天然のアスレチックジムにもなる。僕は、最高のおもちゃを手に入れた子供のように、嬉々としてフィールドを楽しんでいた。

と、いつのまにか僕の後ろには一人のおじさんがついて来ている。おそらく50代くらいだ。彼は少し息を切らしながらではあるけれど、LEKIのストックを巧みに使って年齢を感じさせない身の軽さで確実に僕の後ろについてきていた。そして、僕にいろいろと話し掛けてきたのである。先にも言ったが、僕は今

回の旅で人との交わりを避けるきらいがあった。話し掛けられることが面倒くさいと感じていた。

30も年の離れたおじさんが二十歳の自分と同じスピードで山を駆け下りているということが、いらだたしい気持ちを掻き立てる。おじさんを振り切ってしまうかとも思ったが、ここで無駄に自分のペースをあげて疲れるのは馬鹿らしく、いやいやながらもおじさんの会話に付き合うことにする。

6、槍へ～槍ヶ岳

“おじさん”は紺野さんと言う名前だった。紺野さんは80になる彼のお母さんと同じく80位のベテラン登山者と自分の奥さんを連れてきていた。昨日は薬師岳山荘から一時間ほどのところにある太郎山の小屋に泊まっていたらしい。今日は先の三俣蓮華小屋に行くということだ。しばらく話を進めるうちに、彼の登山暦がどのようなものであるかがわかって来た。

彼は福島に住んでいる。長年一人で登山をしてきたが、数年前から全国に仲間を作り、今年、来年とヒマラヤに挑む、という。今年の夏は日本の高地でトレーニングを積んで、秋には一ヶ月のヒマラヤトレーニングに出発するとのこと。昨年は南米最高峰・アコンカグア(6960m)に登頂したらしい。僕は次第に彼の話に引き込まれていった。そして、最初は話しの聞き手だったはずが、いつのまにか僕の方から彼に熱っぽく語っていた。彼の奥さんが後から追いついた頃、太陽は僕らの真上でギンギンと高地の夏を照り付けていた。僕は、紺野さん夫妻とのしばしの談笑の後、彼らと別れて、先を急ぐことにした。別れ際、奥さんは僕にこう言ってくれた。

“いい登山家になりなさいね”

登山家といっても世界の難所に挑む人ばかりが登山家ではない、と思った。僕の

山岳会の人達も、紺野さんも、一生涯で山を愛する人間であり、一生涯で山に登り続ける人間である。

“登山家”とは人生と登山を同じように愛することができる人間のことでないかと思う。“登山家”という響きが、僕には眩し過ぎた。そして、僕が“登山家”と自認できる日がいつかは来るのだろうか。そんなことを考えながら僕は一步、そしてまた一步、今の自分の気持ちそのままに強く踏みだして行った。遮るものなく宙を映し出していた空も、日の傾きとともに翳り出す。僕は更にペースアップして息を切らしながら先を目指した。何時の間にか予定の目標地点を通過し双六キャンプ場に着いたのは夜の5時くらいだった。訪れつつある夜のしじまを不思議と暖かく感じた。移動時間13時間という長時間だったが、疲れはなかった。

僕は、会う人の一人一人に今日一日の労をねぎらう言葉をかけて、二言、三言言葉を交わす。それだけで一人で食べるご飯もおいしく感じられた。そう、出会う人との交わりを楽しんでいる、いつもの自分の姿がそこにあった。緊張した気持ちが解きほぐれていたのは、薬師岳山荘の皆さんと紺野夫妻との出会いがあったからなのだろう。

風の強い夜だった。月光に青白く映える山肌から少し顔をあげれば、山々に切り取られた空が静かに回っていた。いつ眠ってしまったのかも覚えていない。一杯だけ飲んだウイスキーののどごしの火照りの心地よさだけを覚えている。

翌朝、起きると周囲のテントは

はやたたまれ、残るは2、3張ばかりになっていた。隣にいたはずの、僕と同じアライテントの'Airlize 1(エアライズ ワン)'の姿はもう見えない。僕は朝ごはんをしっかり食べて、昨日よりもかなり遅い6時30分に双六のテン場(テント場)を後にした。

気合十分だ。今日はいよいよ槍ヶ岳に昇る。遠くからながめて、写真で見て、その槍の矛先のような頂の形に憧れた日々は終わる。いよいよ槍ヶ岳なのだ。槍の矛先の美しさに、登山を志すものならば惹かれるはずだ。一度は登りたいと思うはずだ。槍への僕の思いは、皆が感じる様なありふれたものではあるけれども、自分の中で大切にしたい強い憧れだった。槍には突き上げる四つの尾根がある。槍ヶ岳からは東西南北に尾根が伸びている。南に伸びる尾根以外は、北鎌、西鎌、東鎌、と呼ばれている。槍と鎌、誰が名づけたかは知らないが名前から山容の鋭さを感じることができよう。今回、僕は西鎌尾根を突き上げ槍の矛先へ向かう。その後、槍を巻いて南の稜線へ抜けると、そこからは3000メートル級の急峻な山々がいくつも続く。いよいよその先には懐かしの穂高岳山荘がある、穂高連峰が見えてくるはずだ。

槍ヶ岳が近付くと山に登る人々の年齢層がぐっと低くなる。多くの大学が夏休みの合宿としてこの産域にやってくるからだ。広島大ワングル部に出会った。彼等は入山12日目、黒部源流の遡行を楽しんだ後、槍を越えて大天井岳(おてんしょうだけ)を目指すらしい。今回の山行では初めて80リットルザックを見た。トップに着いたヘルメットと、体に巻かれたザイルが彼等を逞しく見せる。

天候にも恵まれ、快調に高度を稼

ぐ。僕は一度登りだすと2時間は集中して登る。その間は休憩を取ることも、物を食べることもせずにひたすらに登る。だから、マラソンをしているかのように、苦しさに耐えながら、ひたすらに登る。おかげで槍ヶ岳には予定時間よりも二時間早く着いてしまった。

マラソンのような山登りを楽しんだ後は、体の疲れの心地よさ、充実感が強い一方で充実感とは正反対の疑問に襲われる。それは“これは登山なのだろうか”と言う疑問である。僕は登山道には“登る”という表現よりも“歩く”と言う表現のほうが適切であるのではないだろうかと感じている。何も考えずに次の一步を踏み出すマラソンのような志向性に欠ける登山は、自然に對峙する登山としての姿勢が真摯ではないように感じる。そのようなものは登山ではなくハイキングである。

僕らは自分の住处から外出し、他人の住处に土足で踏み込むようなことをしてはいけない。当然、われわれの知らない他人の住处にはさまざまな危険が待ち受けている。だから、山の中では常に自分の周囲に潜む危険を察知できなければならないと思う。沢登りをするようになった最近強くそう感じている。

槍の矛先で僕はブルーになっていた。マラソンのような登山をしてしまったことに対する反省と、足取りすら危うい人たちが何の装備も持たずに観光地がてら槍ヶ岳まで登ってきている現実。僕が槍ヶ岳で見たハイカーは、明らかに昨日までに僕が見た登山者とは違っていた。僕は観光地化された槍ヶ岳に幻滅を隠せなかった。5章で下山してしまった山荘の先輩、タースケさんが下山してしまった理由はここにある。“山が好きな人間は山小屋で働いちゃいけない”、先輩の言葉が耳に残る。

穂高岳も日本では有数の人気山域である。よって、穂高岳山荘にもたくさんの人達が登ってくるのだが、僕は疲れた表情で登って来るお客さんを心からの笑顔で迎え入れることが出来なかった時期がある。いろいろな人間を受け入れることは、ほかの場合においては(たとえばバリアフリー問題とか)有効であっても、登山に関しては絶対にそれはないと感じる。

また違う季節に槍に来よう。自分がそれだけの実力を身につけてから、出来ればバリエーションルート(北鎌尾根)の冬に来たい。未練を残して、僕は槍ヶ岳を去った。

午前中の強行軍が聞いたのか、南岳のテニ場に到着したのは2時30分だった。他にテントを張っている人間はいない。槍ヶ岳から穂高連邦へ向かう稜線は、一般の登山道の中でも難路が続くため人の数が一気に減る。早い時間なものあって、他にテントを張っている人もいないが、少し荒れかけていた天気を気にして僕はテントを早めに張ることにする。その後は時間つぶしに、南岳小屋のラウンジで一人ビールを飲んでた。

と、しばらくするとどこかで見た顔が小屋の中に入ってきた。パーマをかけた髪に、丹精の整った顔立ちの女性。きれいな女性である。よく言われることではあるが、若い女性の少ない山にいと、どんな女性でも美しく見えてしまう、ということがあるので僕は色眼鏡のレベルをいく段か上げて彼女を見た。うん、やっぱり美人だ。彼女は僕と同じサイズの65リットルザックを背負っている。僕は、美人の彼女をすぐに思い出すことができた。穂高岳山荘で働いているとき、アルパイトのスコットとふざけあっていた時のことだ。スコットが、"タイジ、かわいい女の子い

るよ!"と小声で僕とタスケさんを手招きする。スコット・・・またいつものことかあ・・・と思いながらも、わくわくする気持ちを抑えきれずに僕とタスケさんは笑顔でスコットの手招きするほうへ小走りで近づき、すれ違いざまに彼女の顔を横目でチラッとみた。その彼女が今、目の前にいる。思わず運命的なものを感じてしまいそうだった。しかも彼女から僕に声を掛けてきたのだ。"君、私と同じテントで、昨日隣のテントで寝てたよね"と、彼女。あーあー思い出した。

彼女はトモさんという。年は僕より5つか6つ上だ。穂高岳山荘には来年の"岳人(登山雑誌)"に掲載される穂高岳の取材のモデルとして来ている。涸沢ヒュッテで働いているところをモデルに誘われたらしい。気さくなトモさんはスノボも沢登りもクライミングも山スキーも山岳ガイドもこなすオールラウンド mountaineer(マウンティニア)だ。話は尽きることにはなかった。互いの登山話、大学の話、いつのまにか2時間が経っていた。こんなところにもすごい人がいるのだなあと思いつくづく感心してしまう。いつのまにか外は夕暮れ色である。僕は彼女との話を終えるとテントに入ってご飯を食べて寝た。明日はいよいよカニのヨコバイ以上の難所、"大キレット"である。

7、滝谷に聞こゆ〜大キレット

今日も晴天である。今年の夏働いた穂高岳山荘へは今日の昼前には到着するだろう。今日は山荘に労働付で泊めてもらうことにしている。今晚は仲間と久方ぶりの再会を酒で祝うことになるのではないかな。そんな風に仲間との再会にはやる気持ちの

一方で、今日は慎重になる必要があった。一般コースの難路である大キレットから洞沢岳を今日は通過することになるからだ。

標高3000mから2600mまで一気に切れ落ちた岩肌が、再び3000mまで切れ上がるその有様は圧倒的な存在感で登山者を拒むかのように見える。キレットの底部はナイフリッジ(ナイフのように鋭い箇所)になっているため、少しでも気を抜くと数百メートル下まで止まることなく転落することだろう。

キレットの飛騨側には、滝谷と呼ばれる深い谷がある。滝谷は有名な登山家ならば一度は登っている様な日本の有名な岩壁である。特に冬の滝谷は数多くの登山家のドラマ生み出してきた舞台だ。その姿は“天空の城ラピュタ”に出てくる谷に似ている。風の強い、日のあたらない、命の気配を感じさせない、深い谷である。

以前に本で北穂高岳山荘の支配人の話を讀んだことがある。まだ、ヘリコプターが山岳救助に活躍していなかった頃、北穂の小屋は滝谷の遭難者を救助するという重要な役割をもっていた。まだ、多くの若者が難度のある山々に挑んでいた時代だった。冬には、滝谷に拒まれた若人達が数多く遭難した。支配人が行ってきた遭難救助とは名ばかりの死体回収の作業だった。墜落の衝撃で見ても無惨に死んだ登山者を長年見てきた支配人の話が、含蓄に富んだものであった様に記憶している。

今、滝谷は目の前にあった。聞こえるだろうか、滝谷に拒まれ、消えていった嘗ての若人の叫びが。

僕は、慎重にキレットを通過し北穂へ登頂。しばしの休憩のあと、北穂を下り穂高岳山荘へと向かった。

キレットという難所を終えた安堵感

に僕は油断していた。そして、懐かしい人たちとの再会を前に流行る気持ちを抑えることができなかった。少しのことが命取りになる危険な山の世界にあって、油断大敵なのは百も承知・・・のはずだった。

足場の悪い所での事だ。強く踏み出した足の下には小さな石ころがあった。その石ころは僕に踏まれた衝撃で、少し大きめの石とともに下方へ落ちていった。しまった！やばいぞ！！

“ラク！！！”

瞬時に叫んだ。今日は日曜日、僕のすぐ下方に幾人かのパーティーがいるはずだ。僕の蹴り出した石は転げ落ちる間に勢いを増して、他の岩と共に遥か下方まで崩れ落ちていく。僕は幾度も叫んだ。

“ラク！ ラク！・・・”

いつもならば足元を見ながら慎重に登っていたはずだ。もしあの岩が人間にあたっていたら・・・思い出しても鳥肌が立つ。この経験は一生忘れてはならない訓辞となるだろう。自分の楽しみのために自分が犠牲になる分ならまだよい。他人を犠牲にしてしまえば、それは殺人行為である。他人を犠牲にする可能性が登山という行為には常に付きまとうことを忘れていた。これは、パートナーと岩登りをしているときでも同じである。自分を傷付けても、他人を犠牲にすることがあってはならない。登山のマナーではないか。

自分の不備を憂いながら、何とも申し訳ない気分だった。人にはいっぱしのことを言うのに、結局自分はどうなんだ。悔しさがこみ上げてくる。そんなことを考えていると穂高岳山荘が見えてきた。山荘の仲間との再会を喜ぶ気持ち半分、自分の失

敗を悔やむ気持ち半分の複雑な心境のまま僕は山荘の扉を開けた。

8、my home～穂高岳山荘

山荘に着いた僕には早速仕事があった。もうアルバイトを止めて二週間も経つのに僕の日常は、今でも山荘の中に残っているのだろうか。仕事をするに何の違和感も感じない。ただ、僕の働いていた8月中旬に比べ客数も減り、山荘全体の雰囲気は僕のいたころのせかせかした感じがなかった。僕は山旅の思い出話を仲間に聞かせながら、日が暮れるまで外仕事をした。

この夏、僕はこの山荘で多くの人間と出会った。彼らの雰囲気は今までに僕が出会った人のそれとは異質だった。縛られるものなく、自分の好きなことを極めている人たちだった。僕ら大学生が普段付き合う人種というのは限られているが、たぶん普通に大学の外に行っただけでは会うことはない様な人たちだった。

冬は東京でCG関係の仕事をする人。イラストレーター。画家。料理人。仕事をやめて山小屋にきてしまった人。世界を点々とするカメラマン。スキーのデモンストラーター。クライマー、タースケさん（若干17歳で滝谷初登攀（当時、東海山岳会）。すごいなあ）。アメリカで天文学の大学を卒業後、日本でNOVAの先生をしていたスコット。同志社大学五年、去年はNGOに参加、半年間アフガニスタンで井戸掘りをしていた土間さん。芸大に通うユウタ。決して学歴とか、年齢とか、そんなものに縛られない生き方ができる彼らは、自分に自信を持ち、胸を張ってどこにでも踏み込んでゆける人たちだろう。尊敬できる、僕の大好きな仲間だ。

再会を祝って僕らは杯を交わした。何を話したかも覚えていない程の多くの事を話した。本当に彼らと会うのは最後

になってしまうのだろうか。次の再会を願って僕らは最後の杯を交わした。

明日向かう奥穂高～西穂高間は、岩が脆い小ピークをいくつも抱える危険地帯だ。抜けるには5、6時間かかる。そしてその先にはいよいよ最終目的地、上高地が待っている。僕の山旅にも着々と終わりが近付いていた。

9、最終章

まだこの山旅に終わりがくる事を想像する事ができなかった山行初日。見えない最終目的地をひたすらに目指して来た日々がいよいよ終わりを告げる。僕はこの長い山旅が終わることに寂しさを隠せなかった。この日、僕の目に入る風景の全てを、緑のすべてを忘れたくないと思った。

雲ひとつない快晴。素晴らしい天気だ。八ヶ岳、北岳、甲斐駒、御岳、乗鞍岳、笠ヶ岳、白山、槍ヶ岳、常念岳、浅間山、そして今までは見えなかった富士山までもくっきりとその姿を見せている。

胸の中に充満する名残惜しさを押し切って、僕は先を目指した。最終日にふさわしい手応えのある路に挑む。“山と溪谷”で読んで以来、難関と呼ばれる一般縦走路、槍～西穂高コースに憧れ続けた日々が今日で終わる。この縦走を終えて、僕は次のステップに進むことができるだろう。

奥穂高岳を過ぎると数分で最初の難関、馬の背が見えてきた。僅か4、50cmの幅から滑り落ちれば遥か数百メートル下方まで止まることなく転落するだろう。馬乗りの体勢で慎重に通過する。

それから先は、高度感がある岩場が続いたのだが、思ったよりも順調

に何の問題もなく通過した。最初より減ったとはいえ、十数キロの荷物がまだザックの中にある。体の重心を荷物に振られないようにしながら慎重に通過した。

ゲレンデでの練習がやはり効いている。快適な登山ができています。ただ、反省すべき点は昨晚の酒が少し体に残っていることだろうか。まあ、それでも集中力が持続している。僕は、快適に西穂～奥穂を楽しんだ。

特急“あずさ”が東京駅に入った入線した頃に、僕はようやく目を覚ますことができた。日はすっかり暮れ落ちて、時計の針は午後10時を指している。幾度か乗り継いだバスや電車の中での記憶はあまりない。気がつくと、東京に僕はいた。

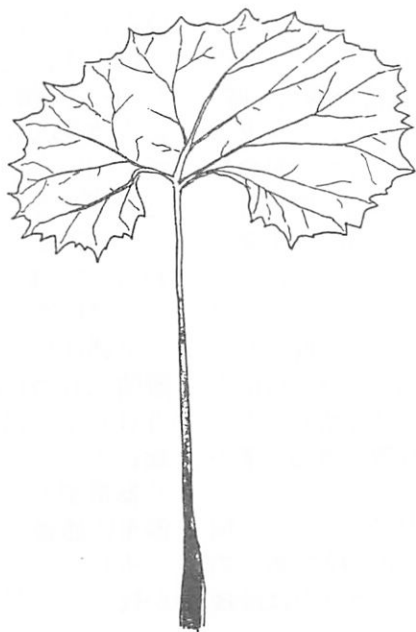
“おびただしいネオンサインが明滅し、新宿の空は赤くただれている。い

つも山から帰って来て、東京の夜景を目にした時感ずる戸惑いに似た気持が、この時もまた魚津の心をとらえた。しばらく山の静けさに浸っていた精神が、再び都会の喧騒の中に引き戻される時の、それはいわば一種の身もだえのようなものだ。”

これは、井上靖の小説“氷壁”の冒頭にある一節だ。僕は、主人公の魚津さながら、同じ景色に同じ身もだえを感じながらも、ホームに降り立った。

僕の山旅の終点。東京駅。僕は人ごみの中に揉まれながら、叫びたいような窮屈さを抑えながら、つくばセンター行きのバス停へと向かった。

(石川 記)



清津峡ゴルジュ

2002. 8. 31~9. 1

パーティー L 本図一統、高橋 弘（無所属）

今年のお盆は山に行けなかったし、気持ちの上でも消化不良の状態が続いている。暑い日が続き、どこか泳げる沢でも行きたくなってきた。うんうん、青島さんお薦めの清津峡があるではないか。でも最近パートナー不足で同行者がだれもない。そうかあ、ドウドウセンの高橋さんがいたっけ！思い立ったときが吉日。早速メールを入れたら即OKの返事がきた。

前夜、八木沢で高橋さんと待ち合わせ、車を一台デポし清津峡温泉に行く。

8月31日。快晴。温泉から入渓する。上流に苗場スキー場ほかいくつかのスキー場や温泉や人家があるので、水はお世辞にも奇麗とは言えないが溪相はすばらしいものがある。次から次へと出てくる泳ぎのポイントは、水量が少ないのかそんなに苦労せず突破できる。私たちの泳ぎのスタイルは、シュリングでザックを繋ぎ、引っ張って泳ぐというものである。300mもあるという土砂崩れによりできた自然湖は埋まってしまい100mになっていた。ノーロープで足尾沢まで来てしまう。所要時間3時間半。小休止。お天気最高で寒さは感じない。ここから高石沢まではさらに険しさを増す。しかしお助け紐を使うくらいで順調に進めた。高石沢まで2時間弱。昼食とした。

やがて淵が4個連続する核心部に突入。ロープを2本使ってアタックする。まず高橋さんが空身で第一の

淵を泳ぐ。30mの泳ぎだが流れが早く、最後はバイルをリスに打ち込んでテラスへはい上がった。

第二の淵は、青島さんたちがおもちゃのサッカーボールの淵と言った淵である。見ただけで我々の泳力では無理だということがわかる。でも一応高橋さんが泳いでみる。案の定まったく進まず、これは正当法ではだめだ。なんとか戦略をかんがえねば。左岸高みに切れ切れのスタンスが続いており、これを伝って出来るだけ上流にトラバースしてそこから4mのダイビング、流されながら右岸のリスにバイルを引っかけるという方法しかなさそう。高橋さんがトライする。2回目でこれに成功。スカイフックとハーケンでトラバースを始める。

このとき異変に気がついた。急に枯れ葉やゴミが流れてきたのである。ゴルジュの中から見える空は狭いが雲一つ無い青一色、私の頭の中は???で混乱する。すると忽ち濁りと共に水位が上昇しすごい流れに変化してしまう。高橋さんもアブミに乗っていても体を横に振られ登りにくそう。二人の間は10mも離れていないのに瀑音でなにも聞き取れない。そのうちジュスチャーで戻ると伝えてきた。高橋さんが岩から手を離したら即座にロープを手繰り寄せなければ、取り返しの付かないことになってしまう。万が一私のいるところより下流に流されたら引き寄せは絶対に無理であり、白濁

した激流により溺死することは確実である。高橋さんの動きを確認しながら一気に引き寄せた。

よーし、今度は私の番である。高橋さんと様々な場面での打ち合わせをする。こういうときは阿吽の呼吸が大切なのだ。一步間違えればそこには溺死がまっているのだ。高橋さんは右岸に取付やすいように長いシュリングを残してきてくれた。私も左岸4mの高みからダイビングするも、増水した流れは早く、水中から水面に浮かび上がるまでに4～5m流されてしまうので、なかなかシュリングが掴めない。4回目でやっと成功。スカイフックをリスにセットしてトラバースしていく。そのリスが無くなると頭上の下向きのリスしかない。ハーケンを3本連打、そのご微妙なトラバースをしてスラブをフリークライムすると安定したスタンスに立てた。

頭上には鹿飛橋が見える。あと2つ淵が連続するが、この濁流では手の打ちようがない。時間も時間だし、今日はここまでとしロープをフィックスし下降する。第一の淵も流されないようロープをフィックスして降りる。右岸高みを整地してビバークサイトを作った。暗くなる前に竿を出してみたがアタリはなかった。

9月1日。晴れ。昨日よりは水位が下がったものの相変わらず増水している。原因はダムの放水しか考えられない。今日も放水しているようだ。多分この水量では先の淵は突破できないだろうけど、フィックスを外さなければならぬので再びゴルジュに向かう。高橋さんがフィックスを伝えて昨日の最高到達点まで行く。やはり×のジェスチャーをしている。しかたがない、今回は戻ろう。懸垂しながらハーケンを回収しようとするも流れが早く体が

安定せず難しいようだ。結局前進用3～4本と懸垂支点1本を残置してしまった。右岸から高巻いて鹿飛橋に行くと、ハイカーのお姉さんが二人休んでいた。橋の上から偵察するも、特に橋の真下が激流で弱点がない。兩岸はツルツルの垂壁である。高橋さんは昨日の水量なら行けると言っていた。

少し先から再び沢に降り八木沢を目指す。途中80mの淵まできたら、先ほどのお姉さんたちが登山道で待っていた。私たちが泳ぐのを見物するのだという。

ノーロープで泳ごうと思っていたがしょうがない、ロープをつけて泳ぐことにするか。

暑さにいいかげん嫌気がさしてきたころ八木沢に着いた。

8月31日

清津峡温泉(6:42)～足尾沢(10:09-10:29)～高石沢(12:19-12:51)～ビバークサイト

ト(17:00頃)

9月1日

ビバークサイト(8:04)～鹿飛橋(10:16-10:50)～八木沢(15:08)

今回アタックするにあたって、上流にある2つのダム(カッサダム、二居ダム)には、放水の件について、あらかじめ問い合わせをしておいた。カッサダムは放水なし、二居ダムは毎秒0、3トンということだった。

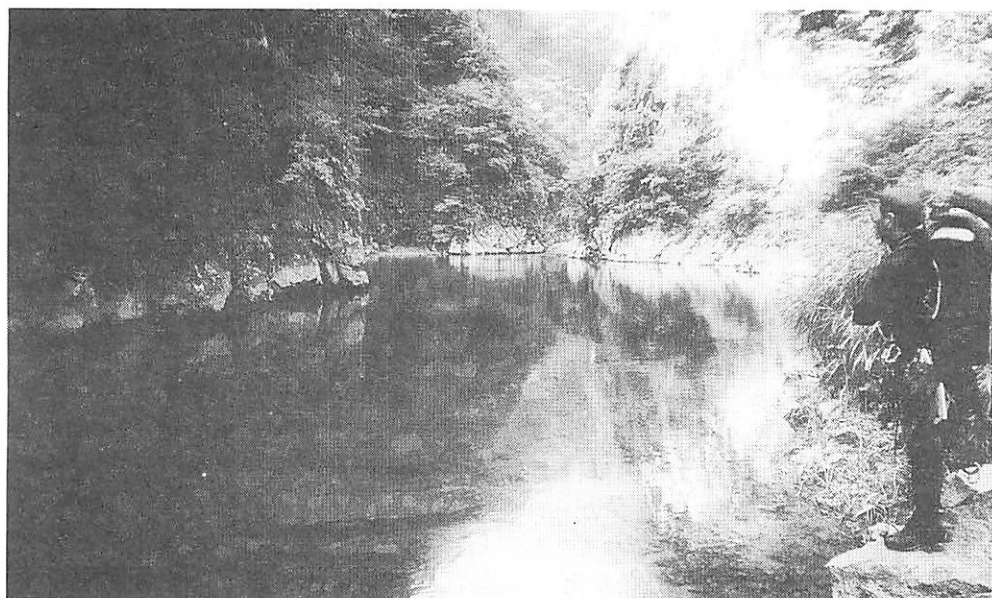
頭にきた私は次の日電話をした。返ってきた答えは「いつもと同じでしたよ」

だった。状況を話すと、上流には2つのダム以外にも工事などでいくつかのダムがあるのだそうで、そのダムの放水ではないかと教え

てくれた。これらのダムについて確認のとりようがない。不運と思うほかあるまい。でも一歩間違えれば死んじゃうよな。

その後、高橋さんと来年の安定した時期に、残置ハーケンを回収しながら残した部分だけを再アタックすることに決めた。

(本図 記)



土砂崩れで清津峡に出来た自然湖



清津峡核心部サッカーホールの淵に行く
(この後大增水に遭う)

谷川岳一ノ倉沢南稜フランケ

2002.9.1

パーティー L 笹平 孝、吉田 仁

この2、3ヶ月、壁の状態が悪くて、まともに登っていない。週末雨が、多くて日曜晴れでも、結露がひどく登れないという日々が続いている。流石にフラス トレーションもMAXに達しそうなので、谷川辺りでオールフリーで行ける、おもしろそうなルートへ、と思い南稜フランケに遊びに行くことにした。まだ残暑と言うことで、気温が気掛かりだったが、登っている時はTシャツ一枚で快適♪取り付きで、オブザベーションしてる時は、少し肌寒い位そして岩は、カラ カラと文句の付けようのないベストコンディションだった。

1ピッチ目、吉田の先行で登りだす。テラスの場所に見当を付け右上。ピンは少ない。2ピッチ目、笹平君。草付きを左上後右へ。核心の手前でピッチを切る。狭し。3ピッチ目、所謂核心部?Jが行く。出だしトラバースぎみ。傾斜もきつく、足下は完全に空間 が広がっている。楽しめる所だ。後、直上するが、御他聞

にもれず、ピンは少ない。不安になってきた辺りで、やっとリングが出現するという感じだ。3ピッチ目笹平君。バンドを右に!となっているが釈然とせずルートファインディングを信じて、ロープをのぼす。カンテを回り込むところが昔風に言えば、しょっぱい!5ピッチ目。表記のグレードでは、3ピッチより+、ノーマル、-、とやさしくなっているが、ランナウトの距離は反比例していくので、難しくなっていくように感じた。あの場所で10m近くランナウトした状態でのバランス立ち込みは、エキサイティングだ!ラストピッチ、傾斜の強いフェースから、かぶりに感じる草付きを乗っ越し、馬の背に出て終了。南稜を懸垂で下降した。

今回は、ヒョングリの滝もカラカラという程のベストコンディションに恵まれ、いいクライミングが出来た。溜まりに溜まった鬱憤も多少解消された日だった。

(吉田 記)



南稜フランケを登る
吉田

湯檜曾川袈裟丸沢右俣

2002. 9. 1

パーティー L 木村 一、名雪博二、金沢 清、軽部都夫（紫峰山の会）

湯檜曾川周辺には日帰りで楽しむ事が出来る沢が沢山ある。ここ袈裟丸沢もそのような沢の1つである。山岳雑誌で袈裟丸沢の遡行記録を見てから興味を持って、いつかは訪れたい沢の一つになっていました。谷川岳には数十回通っているが湯檜曾川沿いの新道を歩くのは今回が初めてで新鮮な感じがする。対岸に見えるゼニイレ沢のスラブが輝いて我々の登高欲を誘っている。是非いつかは登って見たいと思う。湯檜曾川の右岸の登山道を武能沢出合いまで歩きここから湯檜曾川に下り遡行を開始。川原を少し歩くと湯檜曾川本流の魚止めの滝が現れてくる。ここは滝の左側を残置シュリングを利用して登り、更にブッシュ帯の中の巻き道を利用してゴルジュ帯を突破して上部の川原に降り立った。平凡な川原を進み左から白樺沢が流れ込んでいる所で小休止。小休止後白樺沢に入ると小さなゴルジュが現れその奥にはチムニー滝が見られる。天気ははっきりしないので濡れるのを嫌って左の巻き道を登ると上部は明るく開けており、稜線まで一望に出来て気持ちが良いところだ。ゴルジュの上部にはナメ滝やスラブ滝が現れるがどれも快適に越す事が出来る。白樺沢と袈裟丸沢の出合いは両門の滝になっていて素晴らしい所だ。白樺沢は多段30mの大滝を構えて遡行者を威圧して威風堂々としている。袈裟丸沢には5mの滝を越えて入り、更に上部は明るく開けており15mクラスや20クラスの滝の連続。どの滝もザイルを使用しないで直登か又は流水際を小さく巻く事が出来て快適に登れる。

そのまま沢を詰めるとだんだんヤブに覆われてくるが、山腹の登山道に突然飛び出す。この頃には空には青空が広がり、笠ヶ岳・朝日岳から清水峠までが一望に出来て快適な遡行日和である。ここで大休止して金沢さん大得意のハンバーガーの昼食を採る事にした。昨晚購入したハンバーガーは冷たくなっているが、これをバターを薄く引いたフライパンで温め、塩&コショウで味付けして暖かいうちに頂くと美味しい昼食になる。これで1個60円とは我々貧乏山屋（沢屋）のつよい味方だ。N隊長は金曜日に買ったハンバーガーを山の中に持ってきて、余ったハンバーガーは翌週の火曜日位まで食べるとの事。〇〇県保健所衛生部長のN隊長が保証するので安心して食べられると言っています。しかし、これを読んだ皆さんは絶対に真似をしないで下さい。大休止後一般登山道を土合に向けて下降するが、緩やかな勾配のためになかなか高度が下がらない。なが〜い下降路を歩きやつと車まで到着。風呂に入るお金を節約する為に東黒沢の流れに素っ裸で飛び込んで汗を流すこんなメンバーとは恥ずかしくてもう一緒に山には行きたくありません。せめてパンツくらいはいてよ!!。〇雪さん、×沢さん。

（木村 記）

北岳バットレス

2002. 9. 21~9. 23

パーティー L 笹平 孝、渡辺聡子

茨城を7時に出発したおかげで日付が変わる前に広河原へ到着できた。5時まえにヘッドランプで出発し、今回はまっすぐに取り付きへと向かう。途中下りてきたクライマーに話を聞くと先行パーティーは1組だけとのことに気をよくする。とりつきに行ってみると先行パーティーはルート開拓に来たとDガリー大滝を登っていった。しめしめとお泊まりセットをその場にデポし、一番でピラミッドフェースに飛びかかった。出だしはまずまず順調、横断バンドの下ピッチは崩れていたのでも右よりに登り、ガラガラ横断バンドを左に歩いて正規ルートに戻った。横断バンドより上はまあしよっぱいピッチの続くこと続くこと、どうやって登ったか記憶が吹き飛んでしまうくらいである。持っていたキャメロットがいたるところで活躍してくれ、我々の心の安心を引き出してくれた。終了点である4尾根にでてみると、激込みだろうという予想は外れ4尾根は閑散としていた。まだ時間も余裕があるしこれ幸いと中央稜も登ってしまおうと4尾根をダッシュする。その直前にしよっぱい思いをしていたせいか、快適そのものであった。枯れ木のテラスから2ピッチの懸垂でcガリーに下り、中央稜に登りだしたまではよかったが正規のルートよりかなり左から取り付いてしまったらしく、かぶっているし濡れてるし悪いことこの上なかった。すぐに正規ルートに戻ったものの、ガラガラだ

し、かぶっているし気が休まらない。核心を超えた後も、ルート図では”やさしいリッジ”となっているが、「うそつき」といった感じだった。終了点でロープをたたみ、頂上を踏んでから八本歯を下り、取り付きヘデポ品を回収に行った。お泊まりセットの変わりに今度はガチャ類をデポして適当な所まで下り、ようやくビバーク体制をとったのが午後の7時であった。

前日の14時間行動のせいか少し寝過ぎたものの、2番手でDガリー大滝に取り付く。Dガリー大滝はあぶなくこなし、下部フランケに突入した。3ピッチ目のゆらゆらと揺れるハーケンにおびえながら登っているときにぼつりぼつりと雨が降り出し、岩をぬらし始めた。おまけに最終ピッチを登っているときに雨が激しくなり、見る見るうちに岩全体が濡れていく。ここでDガリー奥壁をどうしようかということになったが、濡れたスラブなんて登りたくないということで下降することにした。下部フランケの終了点からちよっともろそうな岩を右上してピラミッドフェースの終了点まで登り、2回の懸垂でcガリーへ。cガリーを渡り緩傾斜帯へ行くつもりが間違えて上の方へ行ってしまった。間違える人が多いらしくしっかりした支点で懸垂をして緩傾斜帯へ戻りbガリーへ出た。私たちがbガリーへ出るとまもなくものすごい音と共に大きな落石があり、いくつもの大岩がcガリーを転がり落ちていった。時間が少しずれていたら危なかったかもしれない。bガリーの大滝を懸垂し、bガリーと

cガリーの間の尾根をしばらく下ってからcガリーをいそいで横断し前日ビバークしたところまで戻ってきた。しばらく様子をみていたが、雨は降ったり止んだりを繰り返し、山にガスもかかっていたので下山を開

始することにしてバットレスを後にしたのであった。後のニュースでこの日落石にあつて怪我人が出たと知った。被害者にも加害者にもならなくてよかったと心から思う。

(渡辺 記)

越後駒ヶ岳オツルミズ沢

2002. 9. 21~9. 23

パーティー L 本図一統、木村 一、名雪博二、松原丈夫、(ACC-J茨城)
高桑信一 (浦和浪漫山岳会)

この沢はグレードが5級下ということで、沢登りというよりは登攀の要素が強くてオレには向いている沢だと思っていた。そして東京の老人クライマーが十日町〜小出あたりを車で走ったり、電車で通ったりすると「ほらっ、あそこがオツルミズのサナギ滝だっ！よく見とけ！俺が登ったんだぞー」とうるさく言うので、もう嫌気がさしていたところだ。一つはこれを言えなくさせるため、もう一つは浦和浪漫の高桑氏との昨年からのオヤクソクである。しかし登攀的要素というよりも、やっぱスケールの大きい沢であつて、この夏一番のビックイベントとなった。

準備段階から、すでに日本一まさにNo.1の沢屋である高桑氏とNo.1のゴルジュのプロ本図氏がメンバーなので、渡りに舟しかも大舟に乗ったつもりで余裕しゃくしゃくである。オレなんか何もすることはない。ただ登れば良いということだ。

メンバーは本図、高桑、木村、松原、オレと5名だが、この沢は1〜2名〜3名がスピーディーに登れる。

9月20日(金)いつもの川越合同庁舎に21:00集合。高桑、松原、オレの3名。高桑氏は今回食糧担当を買って出ているので食糧を積み込むが以外に

軽くコンパクトだ。夜の12:00ごろ塩沢石打サービスエリアで本図、木村と合流そのままオツルミズ沢出合へ。前夜祭後、仮眠。

9月21日(土)

朝、先行パーティーを見送り、ゆっくりと出発。右岸を巻いてカグラ滝へ。以外に簡単に右のブッシュへ逃げて2ピッチで抜ける。この先は、雪溪の残りを乗り越えて懸垂から対岸へ登り、いやらしいブッシュ交じりからブッシュへ2〜3ピッチ。その先を懸垂するといよいよ核心の200mのサナギ滝が見えてくる。まさに天から水が落ちてくるオツルミズである。

ここからは規模がとてつもなく大きく広がっている。右のカンテ状を登ると、サナギ滝へ続くかわいた快適なスラブ状が続く、やがて左のブッシュへ実にはいかな所でザイルを出すことになった。2〜3ピッチでサナギ滝の上部へ。空身でサナギ滝最終ピッチへ。ここは中央のカンテの右側をチムニー状で抜ける。それにしても残置ピンが少ない。途中で2本打ち足す。荷揚げをしているうちに。結構いい時間になってしまう。本日はサナギ滝を抜けた所からほんの少し行った左上の藪の中にビバークとなる。少々傾斜はあるものの整地をして藪を刈り払って、フライ

を張れば立派な宿になる。

高桑氏のゴーカな手料理に一同感激し、酒が心地よく体にしみ渡るようだ。
9月22日(日)

朝から、夕べに引続き高桑レストランのすばらしい朝食で、勇気リンリン元気百倍、ルートファインディングから始まる。この日は1日沢身を離れず水線通しに行く。何度も泳いでは荷揚げを繰り返す。そして大滝手前を左岸1ピッチで抜け、80mの大滝に取り付く。ここでもハーケン3本、フレンズを使用、快適に進んだが意外と時間がかかっていた。

大滝を抜け切ったあたりでもういい時間になっていた。少し行くとまた泳ぎが必要な小さな滝つぼに出る。この手前には増水しなければかなり快適な川原がある。ここで、2回目のビヴァークとなった。ここからは1689mのフキギと思われるピークが見通すことが出来る。それと左側の郡界尾根の稜線がだいぶ低くみえるようになってきている。

ここまでは天気はまあまあ持った、が、少々変化の兆しが見える。ガスが出て眺めが無くなったり、霧雨様になったりしたが、まあそれほどしっかりと雨は降るまい、と考えフライを広々と張り平らな川原にゆったりとしたスペースを確保することが出来、入山以来2回目の大宴会となり高桑レストランの開店で、つまみ、料理と目を見張るばかりのゴーカな宴が続いた。この頃から雨も本格的に降り出したがそのうち止んでしまうのを期待して寝る。手足を伸ばしてのびのび寝られるのは気持ちがいい。眠りに就いたかな〜と思う頃川を見るといよいよ川が勢いよく流れ出しどんどんスペースは狭められていき、ザックに荷をまとめ、ザックの上に腰掛けている格好になってしまっ

た。夜中に他に何もしようがなく早々と高桑レストランの早朝炊き出しがあり、これが実にうまいものだった。が、酒の飲みすぎか何かわからんけど、のどが詰まってしまう食べることが出来なかった。まことに残念だった。

夜中の3時にビヴァーク地の引越しをして少し高い岩の上に避難した。この頃から寒いと感じるようになった。まだ9月だというのに暗い寒い夜が明けてきた。笑っちゃう程、いや、気持ちいい程の増水で、相変わらず沢通しは登れそうもないので、沢屋プロ2名の提案で尾根に逃げることにして4:30~5:00ごろかな、寒いので、即座に行動。

9月23日(月)

いやなんとしても動きたかった。登りだすと早いもので、あつと言う間に郡界尾根上。視界が悪く現在位置不明のままじゃんじゃん登る。

この尾根がすんごいヤブで、またいだり、くぐったり、木に登ったり、落っこちたり、まあ登山は格闘技であることをいやというほど味わった。さすが、沢登りのプロ高桑氏は実にこの壮絶な藪をこぎ、こともなげに、トップで長時間に渡りルートファインディングを、しながらリードしてくれる、本図会長も鬼のような突進力で大奮闘、何回もルートを探し回り、とうとう夕方近くなってフキギらしきところを通過した。いや、疲れたし、いくら動いても寒さが収まらない。タバコを吸っても震えが止まらない。そのうち手がしびれて来る。本当に気温が下がってる。9月だよ。

フキギを越えて少し行くと右下に穏やかな沢の上流部が見えてきた。これを目指してイッキに下ると沢はほんのすぐそばだった。これを詰めて夕

闇迫る頃、駒の小屋に到着。もうヘロツヘロだ、その上、手もしびれて震えが止まらない。小屋番が熱いお茶を大きいカップに2杯も飲ませてくれた。そのとたん震えはピタッととまった。

きのうは遥か下の方に見えていた梁山泊のパーティは吾々が小屋に着いてまもなく到着した。彼らも郡界尾根へ逃げて登って来た、とのこと、ほぼ我々と同じルートを辿ったわけだ。やはり若い体力がうらやましい。彼らは小屋に泊まって明日帰るとのこと。これからすぐ小屋で大宴会だという。時間と、財力のあるのも羨ましい、ちくしょめ、文筆業兼ガイド業の高桑氏を除いて吾々はあすからの仕事が残っている。やけになって、ひらきなおる全員これから下山する。小屋番に聞くと2時間半〜3時間ぐらいで下につくだろうとのことだ。この言葉に勇気百倍、がんばって下る。携帯電話でタクシー会社に連絡が取れ登山口に車が待機していることになりまたまた勇気百倍、100倍×100倍なので1万倍！が、少しも早くおられない。今日1日生きて山を抜け出られた充実感に心は満たされているが、足が一向に進まない。

なんと夜の22:40頃登山口に到着。な、なんと16時間以上行動した一つことだ。手際よくタクシーが待つて居てくれて座席に団体用シートを敷いて即出発。全員意識不明で眠りこけているうちにオツルミズ沢出合の駐車場に到着。着替もそこそこに車で十日町の国道へ、腹が減って死にそうなので、たった1軒開いていたラーメン屋に入り喰った。ただ喰った。こんなときはよほどにひどくまずくない限り何を喰ってもうまいはずだが、ここのラーメンはまずかった。金返せ——っ。

川越の合同庁舎に帰ってきたのは8月24日(火)の朝3:00ごろだった。家に

帰ったのは4:45。それから瞬間1時間10分ぐらい寝て会社に向かう。川越から我が家に向かうよりも大宮の職場の方が遥かに近かった。職場に直行すれば4時間ぐらい寝られたものを、失敗した。会社に出勤したのはいいが自分が何をしているのかすらさっぱりわからず、頭の中がボーとして1日中仕事になりませんでした。

結論、及び感想、年は取りたくね——一つこと。んでも未だに左手の先が少ししびれてんだよなあ。凍傷じゃね——かと思うんだよなあ。

振り返ってみると、今回はまったく何十年ぶりで10本近くのハーケンを打った。残置がね——んだもの、こんな本格的な登攀はひっさしぶりだよ。天から水が落ちてくるようなスケールの大きな沢、オツルミズは決して侮れない沢だ。十日町周辺に行った時はよーACC-Jのジーサンに変わって今度はオレが自慢してやっかん。

んでも本図会長の鬼の突進力と、高桑氏の神業のルートファインディングが無けりゃー、オレ、木村、松原では死んでたな、オレは反省してっからねー、。一つことでおしまい。こんな事やっていると、死んじゃうぞー。

(名雪 記)



オツルミズ沢カグラ滝
(80m) 中段での高桑

オツルミズ沢80m大滝
上段をリードする 名雪



オツルミズ沢サナギ滝 (200m)
登攀前に名雪・松原・本図・木村

北海道 北の山旅放浪記

2002. 6. 22～8. 5

パーティー 笹平 孝

2002. 6/22～23

ポンチロロ川～ピパイロ岳～幌尻岳

大洗からフェリーに乗り、低気圧の中心と共に北海道へ進んだので、海はずーっと大荒れだった。1日かけて苫小牧に到着し、さすがに北海道は寒いと感じたが、どうやら低温注意報が出ているようだ。まずは、日高に向けて車を走らせる。広い北海道を走るには、やはりスポーツカータイプの車に限る。ちなみに乗っている車は、もう10年近くなる日産の180SX。日高町は、山のど真ん中にある小さな町だった。駐在所に計画書を提出して、ついでに営林署の場所を聞く。道路から少し入り込んだ所にある営林署で林道の状態を聞き、ゲートの鍵を借りて行く。国道から千呂露川沿いの道に入り、10km行った所に営林署のゲートがあった。ここからオフロードをさらに10km行くと、北電のゲートがある駐車場に到着する。ここは10台くらいの駐車スペースがあり、この先林道は二俣に分かれていて2ヶ所ともゲートが閉まっていた。時間があつたので、すぐ下の川で釣りをしてみると、いい型のオシヨロコマが何匹か釣れた。

翌日、今にも雨が降りそうな天気だった。左側の林道を歩き出すと、早くも熊の糞を発見する。1時間ほど歩くと取水口のあるダムに着いた。ここで林道は終わり、この先は踏み跡程度の道になるが、道もすぐに無くなるので千呂露川を遡行する。ザックに付いている熊鈴は沢の音でかき消され、絶

えず笛を吹きながらの遡行となる。水量は膝下程度だが意外と時間がかかるので、右岸や左岸に所々現れる道を利用して行く。ポンチロロ川の出合には良いテン場がある。だいたい前の物と思われる焚き火跡があった。近くで竿を出してみるが、何も釣れない。ポンチロロ川に入ると水量も減り、中途半端な道を歩くより遡行して行く方が早い。たまに出てくる滝は簡単に巻けるので、特に難しい所も無い。1250m辺りで沢が三俣になり、少し迷う。地形図と磁石で入念に調べてから、真ん中の沢を詰めて行く。1500m辺りから雪渓が現れ始めた。沢靴から登山靴に履き替え、アイゼンを付けて行く。傾斜も急になり高度を稼いで行くと1700m辺りで雪渓は消えてしまい、ガレ場になる。稜線のコルにめがけて方向を修正して進むと、少し平らな所にテン場の跡があつたが、周りには熊の掘り返した跡が沢山あり恐ろしい所だった。ここから稜線までは眼と鼻の先なのだが、這松が邪魔をしてかなり苦労した。ピパイロ岳までピストンするため、熊よけスプレーを手にとって、ザックは近くの岩の所にをデポして行く。1911のピーク辺りから岩稜になり、ピパイロ岳頂上も岩に覆われている所だ。熊にザックを取られていないか心配だったが、無事で何よりだった。稜線のコル付近には所々テントが張れ

るスペースがあるので、雪渓が残っている所にテントを張った。

朝起きると、近くの木には樹氷が付いていたので気温を見ると、-2度になっており結構冷えていた。辺りはガスっていて天気は良くない。

1967のピーク付近は雪渓が多く残っている所があり、登山道が雪で埋まっていて判りづらい。ピークを過ぎ高度を下げて行くと、一瞬ガスが晴れ渡り、下の方だけ見ることが出来た。やがて登山道は這松などに覆われ歩きにくくなる。雨が降っていても、露でカップがびしょ濡れになる。北戸蔦別岳に着く頃には、小雨が降り始めた。沢の装備はここにデポして先に進む。戸蔦別岳のピークで天気予報を聞いていると、今回初めて人と出会った。地元の山岳会の人たちで、幌尻山荘から上がって来たと言っていた。残るは、この先にある幌尻岳を目指すだけになる。這松で歩きにくい道を行くと左側には、七ッ沼カールが広がり眺めが良い。手前のピークを登った所でザックをデポして、幌尻岳へ向かった。やっと100名山の幌尻岳に着く事が出来た。周りには誰もいない静かな頂上だった。ここで雪が降りだした。今日は七ッ沼カールに泊まる予定なので、まだ多く雪渓が残っている七ッ沼カールの斜面を滑り降りた。全体的に湿っている感じで、熊の掘り返しがあちこちにある。この広いカールにたった一人で泊まるには、かなり勇気が必要なので今回は諦める事にする。適当な所を登り返して稜線に出ると、吹雪になっていた。北戸蔦別岳に戻ると17時半になっているので、急いでデポしていた物をザックに詰め込んで下山を始める。ここからは登山道を下るので

楽に行けると思っていたら、とんでもなかった。這松帯を抜けるとドロドロの急斜面がしばらく続き、その後は二ノ沢沿いの道になり何度か道が無くなるたびに渡渉して行く。もちろん笛は吹きっぱなしである。傾斜が落ち着くとデカイ蔭だらけの中に細い道があり、一見どこに道があるのか判らないといった感じがしばらく続く。すっかり暗くなった頃、北電の取水口に着いた。ここから林道を1時間歩くと駐車場に戻った。幌尻岳登山は、日高町側の二ノ沢ルートはかなり悪いので、幌尻山荘から入山するのがいいと思う。

6/22 駐車場 (6:00) -ポンチロロ川
出合 (8:30) -稜線 (13:30) -ピパイロ岳 (14:30) -テン場 (15:30)
6/23 テン場 (6:10) -北戸蔦別岳
(9:00) -幌尻岳 (13:40) -北戸蔦別岳 (17:30) -駐車場 (20:50)
(笹平 記)



2002. 6/25~28

富良野岳～旭岳縦走

富良野はラベンダーで有名な所なので、ファーム富田に行ってみた。駐車場に濡れた物を広げ乾くまでの間、のんびり見学をする。時期が少し早い感じだが、十分見ごたえのあるラベンダーだった。それから、上富良野駅でバスの時刻表をメモして、十勝岳温泉へ向かった。途中、無料の露天風呂がある吹上温泉に行ってみる。北の国からで放映された温泉なので人気があり、人が沢山入っていた。ビールを片手に風呂に入る。この温泉の欠点は、シャンプーなどが使えない事だ。簡単に言うと、ただ浸かるだけの温泉になる。仕方がないので十勝岳温泉の駐車場に行き、トイレの洗面台で頭を洗った。

6/25 朝はかなり冷え込んだため、黒色の車が凍り付いて白くなっている。周りにいた他の登山者はほとんど出発して行き、そのうち最後の1人になってしまう。駐車場から茶色い火口が見える安政火口へ向かって進んで行くと、沢を渡る所からは山腹をトラバースしながら登って行く。ブッシュが多く、歩きにくい道が続く。稜線に出た所が分岐点になっていて、ザックをデポして富良野岳へ向かう。花の百名山だけあって、お花畑が広がっていた。やがて、賑やかに喋っている声が聞こえてくるのでもうすぐ頂上だと判る。頂上からの展望は360度のパノラマで、遠くには二日前に登っていた日高の山々が見え、遥か遠くには羊蹄山も見ることが出来た。花を見に来た地元のおばさん達にゆで卵を頂いた。分岐点に戻り、ピークを四つ越

えた所が上ホロカメットク山で、ここから少し降りた所に上ホロ避難小屋がある。この辺りは、安政火口を真上から見渡すことが出来て、下のほうには十勝岳温泉が見える。十勝岳の登りには、テレビ位の大きさはある軽石があちこちにある。頂上にはアブラ虫に羽が付いてる奴が、風に運ばれいっぱい飛び回っていて白く雪の様に見えた。十勝岳の下りは砂礫帯でやや歩きにくい。そして、広い尾根になるのでガスっていると道を迷いやすい所だ。美瑛岳に着くと、遠くに十勝岳が見えているので結構進んだ事に驚いた。高度を一気に下げると美瑛富士分岐に着く。目の前の美瑛富士に登る気力が無くなったので、さっさと小屋へ向かった。這松帯の中にある道をしばらく進むと、美瑛富士避難小屋に到着する。中には単独の学生が一人だけなので、広く使えてのんびり出来た。夕日が沈むと、旭川の夜景が良く見えて綺麗だった。

6/26 学生と別れ出発する。この先の石垣山周辺には、ナキウサギが鳴き交わしている。警戒心が強いので、近づくと岩の中に隠れてしまう。一枚も写真に収めることが出来なかった。オプタテシケ山からの下りは、雪溪の上を滑り降りる。双子池キャンプ場には人の姿は無かった。美瑛富士避難小屋から先は極端に人がいなくなる。這松帯の道を、人に会うこともなく黙々と歩いていると、遠くから鈴の音が聞こえてきた。旭岳から来た単独の人とすれ違う。人と会っただけで安心感があふれてくる。コスヌプリから先は、藪がうるさく歩きにくい。天気が良すぎて日干し状態になり、雲が太陽を隠

してくれればいいなあと常に思いながら歩く。途中、雪渓を融かし水を作って飲んだ。6月なのにかなり暑いので、8月に来なくて良かったとつくづく思う。三川台まで来ると、歩きにくかった道は終わり、平らで気持ちの良い草原の中を歩いて行く。一面に咲くエゾノハクサンイチゲのお花畑は見事な物だった。最後の登りでクタクタになり、なんとか南沼キャンプ場に到着。ここは広いキャンプ場で、この日はテントは3張りだけだった。すぐ近くには水がゴウゴウと流れている。今日、すれ違った人数は、結局1人だけだった。

6/27 南沼キャンプ場から急な岩場の登りになる。トムラウシ山は、今回登ってきた十勝岳から、この先の旭岳まで見渡せる。この辺りが中間地点になる。急な岩場を下って行き、日本庭園を過ぎると木道歩きになり、右手にはヒサゴ沼が見える。化雲岳の頂上に小屋みたいな物が見えた。近づいて行くと、それは大きな石だった。化雲岳に着いて、まずこの化雲石に登ってみる。3級位の岩登りで面白い。五色岳周辺は、藪がうるさく歩きにくい。忠別岳山頂からの展望はとても良かった。眼下には忠別沼があり、その先には広い台地が白雲岳まで続いている。平ヶ岳辺りの平坦な道には、握りこぶし位の石ころだらけで、あまりスピードが出せない。右側は崖になっていて、下には沼が沢山見える。この沼に下る三笠新道は、熊出没のため通行止めになっていた。白雲岳が近づくと大きな雪渓が現れ、その上には白雲岳避難小屋が目に入る。小屋の中には10人

ほど人がいて管理人もいた。小屋はお金がかかるので、無料のテントにする。北海道の山小屋は無人が多く、本州の山小屋には管理人がいて売店がある小屋が多い。(売店=ビールが飲める)この小屋には管理人がいるのに売店が無いので、なんか納得いかない。夕方から雲が出てガスってきた。

6/28 朝から天気がいまいち悪い。白雲分岐にザックをデポして白雲岳に向かう。頂上直下には雪渓があり悪い。頂上では、ガスで何も見えなかった。北海岳に着く頃になると風がやたら強く、寒くて5分も休憩出来ないのでフリースを着てすぐ出発する。しだいにガスが上がって御鉢平が見えてきた。地図上では間宮岳の分岐が頂上になるが、中岳方面へ少し進んだ所に間宮岳頂上の標識があった。ここまで来ると人も多くなり、旭岳方面からツアーの団体もやって来る。裏旭キャンプ場から先の斜面は、雪渓が沢山残っていて団体ツアー客は恐る恐る降りていた。旭岳は、今回の縦走の中で最後の登りになる。団体ツアー客が邪魔なので、少し離れた所をキックステップで登って行く。やがて雪渓が無くなり、火山礫の急な斜面では滑りやすくて苦労した。旭岳の頂上はとても賑やかで40人位いる。時間もある事だし、歩いてきた山々を風の当たらない所で1時間ほど眺めていた。姿見池駅分岐からは、迷わずロープウェイに乗り込んだ。あっという間に旭岳登山口に到着。駐車場の警備員に近くの温泉情報を聞き、旭岳青年キャンプ場に行く。結構テントが張ってある。中央にある広場は、10年前に来た時の唯一覚えていた所だった。管理人にお金を払い、無理を言って中央にある広場にテントを張らせてもらう。目の前には焚き火が出来る所があり言う事なしである。キャンプ場の隣にあるユースホステルで露天風呂に入り、500のビールを買

い込む。一息ついた所で、キャンプ場の裏へウドを探しに向かう。太い奴を何本か採って来て焚き火に放り込み、ビールで祝う。

6/29 朝一番の9:00発、旭川駅行きバスに乗り、運転手にロープウェイの切符に書いてあるバス割引券の事を聞いていたら、無料券を頂いてラッキーだった。このバスは天人峡温泉を経由するので、旭川駅まで2時間もかかる。旭川駅から、のんびりと電車で揺られ上富良野駅に向かう。途中、田んぼが多くあったのは意外だった。上富良野駅では、近くの食堂で1時間ほど時間をつぶし、十勝岳温泉行きの小型バスに乗る。(始めは民宿の送迎バスかと思っ

た) 十勝岳温泉の駐車場に着いたら14:30になっていたので、移動だけでも一日がかりだった。

6/25 駐車場(6:10)-富良野岳(8:30)-十勝岳(12:40)-美瑛岳(14:50)-美瑛小屋(16:20)

6/26 美瑛小屋(5:10)-双子池キャンプ場(9:20)-三川台(14:40)-南沼キャンプ場(16:30)

6/27 南沼キャンプ場(6:20)-化雲岳(9:40)-忠別岳(12:40)-白雲岳避難小屋(16:30)

6/28 白雲岳避難小屋(7:10)-北海岳(9:00)-旭岳(11:10)-姿見池駅(13:10)

(笹平 記)



十勝岳頂上の笹平

忠別岳から白雲岳を望む 笹平



2002. 7/10

知西別川～羅臼湖

知床峠の南側にある羅臼湖は、羅臼の観光名所になっている。羅臼キャンプ場から近いので、この羅臼湖まで知西別川を遡行してみる。河口から少し入った所で、近くに堰堤のある車止めに着く。準備をしていると、地元の釣り人がやって来た。この辺の沢には熊が多いので、羅臼湖まではやめた方がいいと言われ、ちょっと焦る。

笹藪に覆われた林道を行くと道はなくなり、踏み跡が川の方に続いている。沢に下りたら堰堤が出てきて、左岸を巻いて行くと古い林道に出た。林道を下って行くと堰堤の上に抜けられ、広い河原を歩いて行く。やがて、もう一つ堰堤が出てきて左岸を巻いて行く。だんだん谷が深くなり、淵が現れる。魚が多いので盛んにライズしている。淵は右岸を悪いへつりで抜けられる。この辺のオショロコマは、逃げようともせず群れをなして泳いでいる。釣りをしてみると入れ食いで、糸の中間に付けた赤い目印は魚が取り合いに来るほどだった。右岸から流れ落ちる15m位の滝が見えると知西別湖の二俣になる。後日、この滝の右岸を30分程歩いて知西別湖まで行った。本流の方は5m位の滝で、右側をシャワークライミングで越える。やがて、明るく広い二俣に着く。途中、何でも無い所で足を滑らせ、ドボンして全身濡れてしまう。緩やかな沢が続き、つぎの二俣は両方から滝が流れ落ちている。しばらくナメと小さな滝が階段状に連続して現れ、綺麗な所が続いた。この先には大きな滝があり、左岸を巻いて行く。周りの草がなぎ倒され、熊の寝床の様な所が目立つ。近くの広場には、熊の糞が8ヶ所も落ちていて鳥肌

が立った。完全に熊の棲み家に入り込み、いつ熊が出て来てもおかしくない所なので、10秒おきに笛を吹きながら通り過ぎた。この先、さらに大きな滝が現れて、左岸の急斜面を登って行く。笹藪から這松に変わり、極端に歩きにくくなる。上部に歩き易そうな雪渓が見えたので行ってみる。雪渓を超えると一面の這松地帯になり、北に向かってテープがあった。踏み跡や切り開きは無く、這松の下を潜ったり、木の上を枝から枝に渡ったり悪戦苦闘が続いた。テープはどこかへ消えてしまい、変な所にいる事に気付いた。ガスっているのが先が見えなく、たまに知床峠を走る車の音が聞こえるだけだった。とりあえず北東に向かって、登山道を目指す事にした。這松も薄くなり笹地が混じり始め、歩き易くなる。鈴の音が聞こえ出し、四の沼の所にある登山道に出た。丁度ツアーの人達と会い、そこのガイドには湿地帯を歩かないで下さい、と注意されてしまった。ここから羅臼湖まで木道を歩いて行き、湖畔でビールを飲みながら湖を眺めていた。帰りは登山道を歩いて行き、知床峠の道に出る。ここから見る羅臼岳はとても良かった。問題は、この先どうやって車まで戻るかである。羅臼市街まで14kmあり、車はさらに遠い所にある。ヒッチハイクが一番楽だけど、全身いい感じに濡れ、汚れている。しかも沢靴だ。半分諦めていたが、車に乗せてもらう事が出来た。運転手は千葉県から1人で来た人で、レンタカーだから汚れても構わないと言ってくれた。話をすると、その

人の息子さんと同じ年齢だったので、話が弾む。車を置いた所まで乗せていただき、とても有難い。羅臼湖の近くでルートを外したけど、楽しい一日だった。

駐車場（8：30）-知西別湖二俣
（10：30）-羅臼湖（15：00）-知床
横断道路（16：00）

（笹平 記）



知西別川の二俣にて 笹平



知西別川上部の大滝にて 笹平

2002.7/13～15

知床縦走（前半）羅臼岳～ルシャ山～
ルサ乗越

知床縦走のため7月一杯の間、羅臼キャンプ場をベースにする予定で7/9に訪れた。羅臼キャンプ場は北海道でも数少ない無料キャンプ場で、歩いて1～2分の所に無料露天風呂の熊の湯があり、キャンパーにとっては天国のような住み心地の良い所である。ここには毎年2～3ヶ月ほど棲みつく常連キャンパーもいる。常連キャンパーは、毎朝欠かさず5：30頃から熊の湯の掃除をしているとても良い人たちです。今回、知床縦走を二回に分けた理由は、知床のヤブ漕ぎに対して荷物が重すぎるためだった。

7/13 本図さんに借りた大きな熊鈴を付けて羅臼キャンプ場を出発。しばらく進むと先行の人が数名見えたので、熊の心配はほとんど無い。やたらうるさい熊鈴をザックに仕舞い込む。泊場に着くと水場があり、ここでもう飲めないくらい飲み溜める。このコースの途中にいくつか水場があるので、軽量化のため水は少ししか持たない事にしていた。右側に屏風岩が見えてくると、コースは急な沢沿いになり、登山道は雪溪に隠れてしまう。この辺では、獣道に迷い込み易い所がある様だ。羅臼岳に登れず帰って来た、と言う話を何件か聞いていた。雪溪を登って行くと、上部はクラストしている所が多くあり、アイゼンが欲しくなる。這松帯の道を回り込んで行くと、岩清水がある分岐点に着く。ザックをデポして羅臼岳へピストンする。ツアー客が多いので、渋滞しがちであった。頂上からの展望はとても良く、東西には太平洋とオホーツク海が見え、南方には羅臼港や羅臼湖が見え、北方にはこ

れから行くサシルイ岳や硫黄山が見えた。それほど高くない三ツ峰のコルを過ぎると、三ツ峰キャンプ場が見えて来る。こちら側に来ると人が減り、東京の山岳会パーティ、斜里の山岳会パーティと一緒にいる。サシルイ岳を越えオッカバケ岳に来ると、体もクタクタになる。この辺りのコースは、ピークを踏まないで近くを通るだけだった。オッカバケ岳も右手のピークの方が高いので、行ってみる。這松帯のトンネルをくぐり抜け、かすかに残る踏み跡を辿るとピークに行けた。すぐ近くには二ツ池があり、何張りかテントが見える。今日は二ツ池キャンプ場にテントを張る。池の水は煮沸しないと飲めないなので、下の方にある雪溪に水を汲みに行った。このキャンプ場にはフードロッカーがあるが、今日は人が多いので熊の心配は無いと思う。ここで、茨城から来た二人組みと会い、いろいろ話をした。斜里のパーティが隣にテントを張り、食べ物を貰ったり、知床縦走の事でアドバイスを聞いたりした。

7/14 二ツ池の周辺は湿地帯になっているので、沢靴に履き替えて出発した。知円別平には、エゾコザクラとチングルマのお花畑が続いているので、思わず足を止めてしまう。知円別岳分岐にザックをデポして、硫黄山へ向かう。あまり時間を無駄に出来ないので、かなり飛ばして行く。硫黄山分岐から硫黄山の登り道は、不明瞭な所が多いので少々迷う。右上気味に登り、ガレ場をトラバースすると登りの道に出る。ガ

スっていたら判らなかつただろう。最後に悪い岩場を登ると頂上に着いた。遠くには羅臼岳や知床岳が見える。下る途中、茨城の二人組や斜里のパーティと別れ、知床別岳分岐に戻ると東京のパーティに出会う。この先の東岳方面へは、ほとんど人が入らないので慎重に行動する。東岳付近には、シレットコスミレやコマクサが多く咲いていた。P1502まで左側の崖沿いに進んで行く。P1502から東に延びる尾根を下って行く。這松帯の道は切り開かれており、赤テープも所々付いているので迷う心配は無い。途中に大きな岩場があり全て下ると、切り開きは1300m付近から北に続いている。沢筋に出たら沢沿いに東へ下って行くと、1150m付近の雪溪に出る。ここのテン場は、雪解け水でじめじめしている場所だった。さらに沢沿いを下ると、1050m付近に二つ目の雪溪に出る。沢はしだいに水が現れ始め、900m付近には沢にロープが架けられズタ袋とテープが下がっている。ここから尾根に向かって北に切り開きが続いているので、水を汲んでから行く。この辺りの沢筋は、実際の地形と地形図を比べて見ると違っていると思われる。尾根に出ると尾根通しに切り開きがあり、ルシャ山へ続いている。ルシャ山頂上にはテントが張れるスペースがあり、三角点もある。ここから北側に降り、すぐに東方向に切り開きが続いている。750m付近から熊笹を過ぎると道が無くなった。ザックを置き、這松の中を探しまくるが道は見つからない。10mも離れると、ザックを置いた場所が判らなくなり危険な目に遭う。この辺の這松帯は、獣も近寄れない濃い藪になる。這松は高さが3m位あり時々、這松に登って現在地と東にある目標の700のピークを確認する。下りなのに時速

200m位だろう。P700の直下にはダケカンバが数本あり、ここにはテントを張った跡があった。ここでビバークするか迷ったが、先に進む事にした。ここからは、北東に続く沢筋を下って行く。這松帯が終わり熊笹帯に変わるので、かなり歩き易くなる。しばらく沢筋は小さく蛇行を繰り返している。やがて沢筋が無くなると、北東に向けて熊笹帯を下る。傾斜が緩くなり、550m付近で小さな尾根に突き当たった。ここから沢筋が現れ、東方向に続いている。この辺は、平らな場所が多いので、熊笹を踏み倒してテントを張った。テントの中に入ろうとすると、今にも地面から熊笹が突き出しそうで怖い。周りにはヌカ蚊が数十匹群がり始めたので、靴のままテントに入った。しばらくすると、テントの中にダニが歩いているのを発見する。全部で3匹見つけた。2匹は内張りとズボンにいて、もう1匹は脇腹に食らい付いている。こいつは引張ってもタバコを付けても外れない。とてもしぶとい奴なので、取る事を諦めた。

7/15 脇腹にダニをぶら下げて出発する。沢筋は東方向から北に向きを変え、450m付近で水が現れ始めた。快調に下れる沢が続き、200mの所で沢が合流すると水量も増してくる。比例して笛を吹く量も増す。160mの所でルシャ川が合流して、広い河原になる。ここからルシャ川を上がって行くと、すぐに焚き火の跡があった。広い河原が続き、あちこちに熊の糞が目立つ。210mの所で東側から沢が合流している。ここは2:1で川幅が1mにも満たない小さな沢だった。この沢をルサ乗越に向けて入って行く。少し行った所には真新しい熊の糞があり、そのすぐ側には

鹿の角が沢に半分埋まった状態で落ちていた。頭がい骨付きの良い奴をゲットする。240m付近で南側から延びている尾根の手前を登り出す。熊笹がうるさく急な斜面を登り、上部では熊笹が無くなり歩き易くなる。稜線に着くと、ルサ乗越の手前で50m位高い所に出た。ルサ乗越から南側のルサ川を下って行く。熊笹帯が広がり急な沢筋がしばらく続く。傾斜が緩くなると水が現れ、140m付近の二俣に出る。右岸から1:2の小さな沢が入り込み、中央には大きな木が一本立っていた。まもなく、90m付近で左岸から1:1の沢が入る。倒木が多いので、やや歩き難い沢が続く。右岸から1:3の細い沢が入り、やがて50m付近からは3:1の広い沢に出た。この先は明るくひらけた沢で、鹿の通り道を利用しながら下って行く。小屋が見えてくると車の通る音が聞こえ出し、車道まで林道歩きになる。林道を通り抜けると知床橋に出られた。ここから帰るには、約2km先にある岩見橋バス停かヒッチハイクしかない。ザックには、頭がい骨付きのお宝が縛り付いているので、乗用車では無理だからトラックが通るのを待つ。無事にトラックをヒッチして乗せてもらおう。話をすると地元の漁師のおじさんと、どこかで見た顔だなと言われた。不思議だなと話していると、数日前に熊の湯で一緒になった事が判った。羅臼の市街地まで乗せてもらおう。ここから羅臼キャンプ場までは、約3kmの登り道になる。この近くにキャンプ場で知り合った地元のガイドの家があるので、寄ってみる。丁度いたので車に乗せてもらい無事、キャンプ場に戻る事が出来た。キャンプ場で、茨城から来た二人組みとばった

り会い、いろいろ話しをする。ダニは、新入りの奴が脇の下に食い付いて、二匹共くるくる回して取った。

7/13 キャンプ場 (6:30) - 羅臼岳 (12:30) - ニツ池キャンプ場 (17:00)

7/14 ニツ池キャンプ場 (6:30) - 知円別岳分岐 (8:10) - 硫黄山 (9:10) - 知円別岳分岐 (10:40) - 1150m 雪溪 (13:40)

-900mズタ袋 (15:00) - ルシャ山 (16:00) - P700直下 (18:00) - 550m沢筋 (18:50)

7/15 550m沢筋 (7:30) - 450m水場 (8:00) - 160mルシャ川出合 (9:40) - 240m沢 (10:10) - ルサ乗越 (10:50) - 140m二俣 (12:00) - 50mルサ川出合 (12:50) - 知床橋 (13:40)

(笹平 記)



熊笹の中のテント (ヒグマが怖い?)

2002.7/24~27

知床縦走(後半)知床岳~知床岬

今回、知床縦走の中でルサ乗越から知床岳のルートは、困難と判断し中止にした。数日前、昆布漁の話が出て、体験させてもらう事になった。7/19にザックを持って、相泊港から船でペキンの鼻にある番屋へ行った。昆布漁解禁日の7/20のから7/23の四日間は、番屋で昆布を干しまくる。

7/24 番屋から海岸線を南下し、三時間でウナキベツ川河口に着く。アプローチは相泊からより一時間は長くなり、危険な所も多い。ウナキベツ川の左岸に道があり、靴を濡らさずに行く事が出来る。観音岩から入る道と、河口の北側50mから入る道がある。道はすぐに合流するので、どちらからでも行く事が出来る。左岸に続く道に入ると、ロープが下がっている急斜面の登りになる。ここを過ぎると沢沿いの緩やかな道になり、獣道が交錯していて判りにくい。やがて道が無くなり、沢の近くを適当に歩いて行く。220mの右側から沢が合流している所でしっかりした道に出た。道は、沢からいったん離れて山の中を歩いて行く。右手に沼が見え、この先にある尾根に取り付く。この道は、はっきりしているので迷うこと無く尾根通しに登って行く。所々、ロープが下がっている急斜面が現れるが、ブッシュを掴んで乗り越える。高度を上げると、左側にある大崩壊地帯の大岩壁が良く見えて来る。しだいに尾根が細くなり、高度感も出てきた。平らな所に出ると崖にロープがあり、ここを上がるとポロモイ台地に出る。東に向かって20m進んだ辺りに、知床沼へ続く道が北西に延びている。這松帯の中にある道は少し歩きにくい、しっかりと切り開かれているので迷わず行ける。湿地帯が現れると知床沼は近い。背の高いハイマツをくぐり抜

けると、知床沼が目の前に広がった。沼の北側にテントを張り、行者ニンニクを沢山採って食べた。

7/25 今日は、知床岳までピストンする。昨日より天気が良さそうだ。沼からP1132へ続く道があるが、あちこちに続く余計な踏み跡が多いので入り口が判りにくい。やがて灌木と笹地の登りになる。テープに助けられてP1132に着くと、この先は崖ぎりぎりの稜線を歩いて行く。下りになると途中から道が不明瞭になるが、テープがあるので問題ない。やがて、緩やかな這松帯の中にしっかりした切り開きが続く。足元を水が流れ始めると、まもなく池のある湿地帯に着く。P1243への登りは、余計な踏み跡があり判りにくい。熊笹帯に登り、P1243に着くと知床岳が顔を出す。崖沿いのはっきりした道を歩いていると、途中でカメラの三脚をゲットする。大きな岩をいくつか越えたら、知床岳に到着した。硫黄山や知床岬の近くにある文吉湾の防波堤を見る事が出来た。頂上には、一等三角点もある。一時間程のんびりしてから下山を始めた。知床沼に戻ると、さっそく焚き火の準備だが、薪がなかなか見つからない。暑くないが、沼で泳いで汗を流す。夕方まで焚き火にあたり、まったりする。

7/26 いよいよ知床岬への出発なので緊張する。ウイーヌブリに14:00までに到着出来れば、今日中に知床岬まで行く事にした。この先には水場は無いが、軽量化のため水は4リットルだけ持つ。予定より少し遅れて知床沼を出発。沼の北側から、北に向かってしっかりした切り開きがしばらく続いている。緩やかな山を越えると、前方にP884があり、その奥には大きなポロモイ岳も見える。この辺り一帯は、緑のじゅうたんの様に這松が広がっ

ていた。P884から切り開きが不明瞭になり西側のガレ場ににげる。この先は、道を見失い、P884を回り込んだ所でかすかな切り開きを見つけた。ポロモイ岳の登りは、不明瞭な道が続く。頂上近くでは道を見失いがちになり、稜線の西側寄りを歩く。頂上に着いたと思いきや手前のピークで、目の前に本当のピークがあった。天気が良いのでとても暑く、水の消費が早い。毎回、這松の影で休憩する。ポロモイ岳の先からテープを頼りにヤブ漕ぎが始まる。稜線の東面を下ると途中からヤブが濃くて行き詰まり、5m上の稜線へ這い上がるのもかなりの苦戦を強いられる。稜線にある不明瞭な切り開きを下って行き、P947の登りになるとつらいヤブ漕ぎになる。1m切り開きから外れてヤブ漕ぎしていても、気づかない事がよくある。P947からショートカットの為、磁石を北北東に合わせ、直接P814に向かってまっすぐ進んで行く。道は完全に無くなり、猛烈な這松地獄にはまる。地面には這松の太い幹が複雑に立ち塞いでいるので、地上1mの所を枝から枝へ渡って行く。しばらく空中前進が続く、体がボロボロになる。普通の登山は脚力が必要だが、ここの世界は脚力、腕力、腹筋、背筋など、ほとんどすべての筋力が必要になる所だった。高度を下げると這松帯を抜け出し、沢筋が現れ歩き易くなる。P814の近くでヤブ漕ぎになる。P814から先はショートカットの為、稜線から離れ山腹をトラバースして行くので、北東に向けて沢筋を下って行く。所々にテープあり。700m辺りまで降りた所で、北北東に向きを変え熊笹帯の斜面をトラバースして行く。この辺りで人が死んでも、発見されることはまず無いだろう。しだいに熊笹も短くなり歩き易くなる。鹿の獣道がありスピードが出せる。ウイーヌプリの手前にあるP640とP580のコルに向かおうと思ったが、水が残り少なくなった為、550m付近からメオトタキ川の沢筋を下り始め

た。滝を巻いて降りて行くと、470m付近で水が流れていた。ここから沢を50mほどトラバースして、P640とP580のコルに続く目ぼしい沢を登って行く。この沢は西に向かって離れて行くので、途中から北に向けて斜面を登った。コルより少し東の所に抜けられた。コルからは北斜面側をウイーヌプリとP640のコルに向かってトラバースする。下がり過ぎると急斜面になるので、途中から580m付近をトラバースして行く。コルからウイーヌプリの登りには道があり、焼け残った白い幹が沢山残っている中を登って行く。ウイーヌプリに着くと、かなり疲労していたので長めに30分休憩する。もう15:00近くになっていたのでどうするか考えたが、水は余裕があるので行ける所まで行く事にする。バテない様に行動食を沢山食べて出発した。ここから道は西側から降りて東側へ回り込んでいるが、すぐ無くなりヤブ漕ぎになる。稜線には上がらず西面をトラバースして、P602辺りから不明瞭な踏み跡が現れた。この頃からスタミナが切れて休みがちになり、体力の限界を感じ始めた。はっきりしない道が続いて、P516までは主に稜線上を歩き、細かくあるピークは東側を巻いて行く。だんだん鹿の獣道が多くなり利用して行く。P516から先は、始めに出てくるピークを東側に巻き、その後は西側の斜面を進んで行く。P412の先は、文吉湾へ延びる尾根に吸込まれないよう注意しながら西側の斜面をトラバースする。磁石を北東に固定して一気に駆け下り、やがて平らな樹林帯に出る。鹿の道が交錯している中を北東に向かい突き進むと、丁度ぴったりの灯台の所に出られた。ぴっしり濡れた服を着替えて岬へ向かう。なんとか夕日が沈む前に知床岬に立つ事が出来た。ここから赤岩まで、もうひと踏ん張りがんばる。大地の先には、100頭余りの鹿の群れが林の中へ逃げて行く。暗くなった

海岸線をヘッド無しで歩いて行くと、赤岩の番屋で番犬にほえられて足早に通り過ぎ、アカイワ川にある廃番屋にたどり着く。廃番屋の中に TENT を張り、余った食料で豪華な夕飯を食べた。

7/27 朝方まで雨が降っていた。途中で、新しすぎる熊の糞と足跡を発見したので、笛を吹きながら進む。カブト岩の大高巻きはロープがあるが、ガレ場が濡れていて大変だった。念仏岩の高巻きはロープがあるので問題なし。滝川付近の磯で獲物を探していたらタコを発見。しぶとい奴で、手で引っ張ってもなかなか岩の間から出てこない。やっとの事でタコを捕まえた。手に残っていた吸盤を食べてみたら、なまらうまい。ペキンの鼻の高巻きはしないで、海の中をジャバジャバ歩いた。昆布漁の時にお世話になった番屋へ寄って行く。赤岩で熊に会ったかと言ってきた。昨日、ハンターが赤岩の番屋に入った熊を射殺したそうだ。あと一頭でかいのが居るんだと言っている。どおりで昨日の夜、赤岩には犬が多いはずだ。ウナキベツ川の手前にある最大の難所は、潮が満ちてくると通過できなくなるので、一時間程で出発する。教えてもらったカニの採れる所に行くと、小さな花咲ガニを3匹捕まえた。剣岩周辺は足首までの深さで、モイレウシ川の南にある高巻きは特に問題なし。最大の難所は膝までの深さで通過できた。打ち上げられた昆布を数枚拾って行く。観音岩の高巻きは特に問題なし。ここで行動食の、ウニのバター炒めを作って食べた。最高にうまかった。相泊に近づくと、道が歩き易くなる。北の国からのロケで使われた純の番屋に寄って行く。家の中には昆布が積まれていた。家の人に聞くと、錆びれた外灯だけは撮影した時のまま残っている。相泊に着くと、前にお世話になった熊の穴ラーメンのおじさんに会い、あいさつを

して行く。港に一週間止めて置いた車は、カモメの糞だらけになっている。上を見ると外灯があり、すぐ原因が分かった。無料の相泊温泉で汗を流してキャンプ場へ戻る。

7/24 観音岩(8:30)-尾根取り付き(10:20)-大地(12:00)-知床沼(12:50)

7/25 知床沼(7:00)-P1132(8:00)-小沼(10:40)-知床岳(11:30~12:20)-知床沼(14:20)

7/26 知床沼(5:20)-P884(6:20)-ポロモイ岳(8:30)-P947(10:00)-P814(11:10)-メオトタキ川470m地点(12:40)

-P640とP580のコル(13:50)-ウイーヌプリ岳(14:30~15:00)-P602(16:20)-P516(17:00)-P308(18:00)

-灯台(18:30)-知床岬(18:40)-赤岩(19:50)

7/27 赤岩(7:10)-念仏岩(8:10)-滝川(9:00~9:30)-ペキンの鼻(10:10から11:30)剣岩(12:30)-化石浜(13:50)

-観音岩(15:00~15:50)-相泊(18:30)

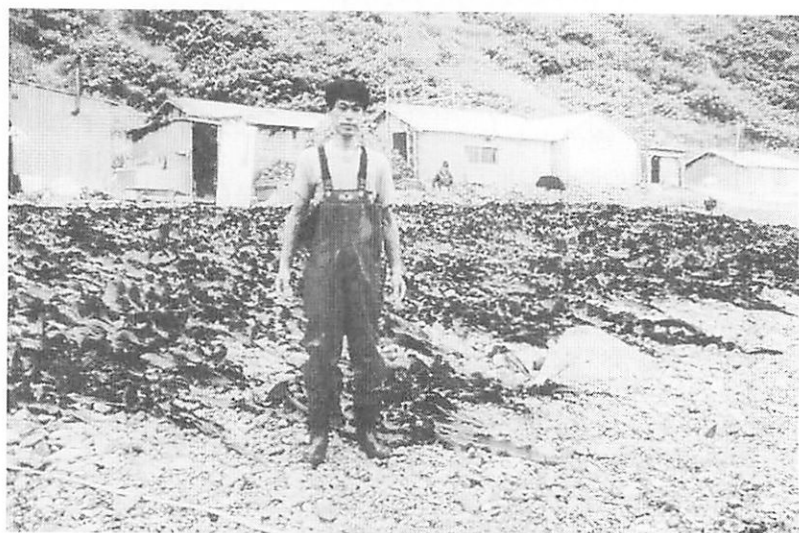
(笹平 記)





上から見た知床沼

昆布干しを手伝う
漁師 笹平



カムイワッカ滝で
入浴中の本図
(モザイク無)

《 友好山岳団体の月報、会報、その他 》

ありがとうございました

月報

- ◎Rohman NO.204 2002.6 B5 27P 浦和浪漫山岳会
2002年OB山菜山行・東北胆沢川、会越・鍬沢左俣〜談合峰〜河原井沢右俣、
西会津・鶴沼川城入沢〜小野岳、坪川津室沢ほか
- ◎Rohman NO.205 2002.7 B5 27P 浦和浪漫山岳会
2002年春の集中・貉ヶ森山に4パーティでアタック、小野岳、南会津・駒止湿原、
救助訓練・日和田女岩、南会津・湯ノ岐川伯母岐沢滝沢〜田代山〜曲沢ほか
- ◎Rohman NO.206 2002.8 B5 25P 浦和浪漫山岳会
夏合宿特集・奥利根周辺を遡下降ほか
- ◎Rohman NO.207 2002.9 B5 39P 浦和浪漫山岳会
夏合宿の報告の一部、船形連峰・大倉川笹木沢、奥秩父・笛吹川東沢鶏冠谷
右俣、毛猛・キンカ沢〜上の大沢〜中岩沢〜丑松沢〜桧岳〜南尾根〜3ツ又集落、
利根川本流ほか
- ◎わらじ NO.556 2002.7 B5 22P わらじの仲間
春の集中・会越6パーティで遡行、南会津・只見川黒沢〜黒沢山〜大畑沢、会越・
蒲生川真奈川〜赤崩峠〜中ノ又山〜フキ平〜早坂尾根〜浅草岳、
蒲生川大白沢山菜山行、檜又川〜ヘイズル沢右俣アリキノ沢ほか
- ◎わらじ NO.557 2002.8 B5 16P わらじの仲間
春の集中報告の一部、早出川本流〜矢筈岳〜大川東又沢、那須・阿武隈川南沢ほか
- ◎わらじ NO.558 2002.9 B5 24P わらじの仲間
夏合宿・奥利根、春の集中の報告の一部、韓国・ソラク山ほか
- ◎逍遙 NO.132 2002.5 B5 12P 逍遙溪稜会
尾瀬山スキー、奥多摩・シンナソー、丹沢・水無川2本、苗場・神楽峰山スキーほか
- ◎さわぐるみ NO.1 2002.7 B5 32P グループ沢胡桃
台高・銚子川不動谷〜東の川白崩谷、又口川3ツ俣谷〜東の川本谷、奥秩父・滝川八
百谷、豆焼沢、足尾・庚申川本流、上信・白砂川八間沢ほか
- ◎さわぐるみ NO.2 2002.8 B5 24P グループ沢胡桃
奥秩父・丹波川本流、泉水谷、谷川・大源太川七ツ小屋裏沢、谷川・谷川本谷、
安達太良山・石筵川、上信・清津川サゴイ沢、八幡平・玉川伝左衛門沢滝ノ沢ほか
- ◎さわぐるみ NO.3 2002.9 B5 32P グループ沢胡桃
夏合宿・朝日連峰2本、台高・備後川大谷、丹沢・玄倉川小川谷、黒部・上の廊下、
丹沢・中中川箱根屋沢ほか
- ◎Next ! NO.79 2002.7 B5 12P 山岳溪流釣り集団むげん
奥只見・ミノコクリ沢ほか
- ◎Next ! NO.80 2002.8 B5 16P 山岳溪流釣り集団むげん
川内・中杉川、奥秩父・入川金山沢大荒川谷ほか
- ◎Next ! NO.82 2002.9 B5 12P 山岳溪流釣り集団むげん
浅草岳・沼の平〜大三本沢山菜山行ほか

◎とまのかぜ NO.115 2002.6 B5 65P 童人トマの風

八幡平・山スキー、焼山北面山スキー、毛勝三山縦走、西穂高〜奥穂高、
鳥越川〜鳥海山、白馬山スキー、小川山、丹沢・箱根屋沢、
四十八瀬川勘七の沢、木曾駒ヶ岳〜宝剣岳〜檜木尾岳、剣岳、
西表島・仲間川〜クイラ川〜鹿川湾〜水落川、南紀・黒蔵谷、
北陸ハイキング3本、越後駒ヶ岳〜荒沢岳〜丹後、石鎚山・初芽成谷、月山、
奥秩父・井戸沢、屋久島・鈴川右俣ほか

◎とまのかぜ NO.116 2002.7 B5 42P 童人トマの風

虎毛・役内川ワルイ沢、奥秩父・市の沢、栗駒・麝香熊沢、出羽三山・葉山熊野沢、
三ツ峠、栗子・秋道沢〜日陰沢、男鹿・大蛇尾川西俣、志賀・八間沢、
尾瀬・塗川西俣沢カラ沢、奥多摩・竜喰谷、北海道・余市岳・白井 沢左俣沢、
蔵王・名乗川小屋ノ沢本流、上信・中津川雑魚川外ノ沢、森吉・ノロ川、
二口・禿沢〜神室岳〜南沢、蔵王・八方沢、北海道・黒岳〜トムラウシ山〜十勝岳
〜富良野岳ほか

◎とまのかぜ NO.117 2002.8 B5 40P 童人トマの風

岩場のレスキュー講習、足尾・坪川、三俣沢大岩沢〜ス沢、東北・大行沢〜カケス沢
右俣、飯豊・加治川四郎左衛門沢、赤津沢東ノ沢、西表・ヒナイ沢〜イタジキ川、
日高・幌尻岳、パンケヌース川五ノ沢右俣、毛猛・黒又川赤柴沢、奥利根・
檜俣川狩小屋沢〜洗ノ沢、下田・砥沢川、丹沢・勘七の沢ほか

◎とまのかぜ NO.118 2002.9 B5 62P 童人トマの風

谷川・万太郎谷、大菩薩・小室川谷、奥利根・檜俣川本谷、知床・コタキ川〜知床岳
〜ウナキベツ川、吾妻・前川大滝沢、奥秩父・大常谷、北岳池山尾根、
丹沢・勘七の沢、飯豊・長走川杉の沢淀ノ沢〜鈴カ滝沢、南ア・早 川黒桂河内二の
右俣〜保利沢、利根川本流、飯豊・玉川大又沢、北ア・金木戸川九郎衛門谷
奥秩父・大荒川 谷、摺上・中津川カンネ沢〜手沢〜中津川日陰沢、谷川・袈裟丸沢
右俣左沢、東北・玉川大深沢、朝日・石滝沢、中ア・与田切川中小左俣右沢、
安達太良・杉田川、東北・黒湯沢〜安栖沢ほか

◎すずらん通信 NO.256 2002.7 B5 12P 鈴蘭山の会

秩父・二子山中央稜、奥秩父・釜ノ沢、鶏冠谷右俣、左俣二ノ沢、雨乞山〜大岩山〜
日向山ほか

◎すずらん通信 NO.257 2002.8 B5 12P 鈴蘭山の会

ヒヤリハット報告、奥秩父・和名倉沢市ノ沢、那須・大蛇尾川東俣、越後・三国川
栃の木沢丹後沢、日原川本流ほか

◎すずらん通信 NO.258 2002.9 B5 18P 鈴蘭山の会

ヒヤリハット報告、叶津川釣り、丹沢・水無川、北ア・黒薙川北又谷、
東北・葛根田川ほか

◎すずらん通信 NO.259 2002.10 B5 20P 鈴蘭山の会

越後・釜川右俣千倉沢、ヤド沢、南ア・石空川南沢、下田・仙見川中俣沢、
会越・御神楽岳広谷川御神楽沢、西会津・御神楽沢スポンジスラブ、
上越・米子沢〜ブサノ裏沢ほか

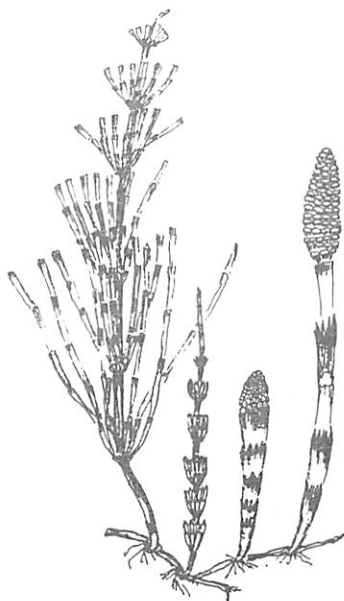
◎ADVENTURE forum NO.9 2002.7 A4 8P 植村記念財団

赤城連山のハイキングほか

◎溯行 NO.21 2002.6 B5 86 大阪わらじの会

南ア登り返し、朝日・金目川本流左俣、檜枝岐・実川、巻機・米子沢、
只見・恋ノ岐川、谷川・万太郎谷、黒部・黒薙川北又谷漏斗谷、
サンナビキ谷、上の廊下、、鈴鹿・犬上川滝洞谷、御在所岳藤内沢、
湖南ア・信楽川加 河川不動谷、岩井谷、比良・ヘク谷、台高・本沢川釜の公谷、
大杉谷不動谷、父ヶ谷南谷支流、弥五兵近衛谷、蓮川奥の平谷~千石谷、
大杉谷本流、宮川大杉谷、東ノ川白崩谷、ガマ谷、北山川七色貯水池周辺、
銚子川 光谷右俣、大河内川瀬場谷、往古川久瀬谷と湯谷、往古川狸谷、
大峰・舟ノ川三ツクラ谷、白川又川奥剣又 谷、四国・滑床溪谷雪輪沢ほか

以上閲覧したい方は本図まで



編集後記

今回も45号と46号の合併号の発行になりましたが、今回は長編の原稿が多数あったので内容は充実していると自負しています。
原稿を書いて頂いた会員の皆に御礼申し上げます。

山を登っていると方向を見失う事や自分の現在地が不明になる事がままあるが、いずれも冷静に判断し対処すれば大事には至りません。
実社会においても自分を見失う事が発生した場合には、山での経験を思い起して冷静に対処する必要があると思います。（実際は難しいが・・・）

山の中では地図&コンパス&高度計があれば自分の現在位置は把握できますが、実社会では情報量が豊富なので自分の現在位置を自覚するのが難しい時があります。そのような時には友人&先輩等の意見を聞いた
りアドバイスに耳を傾けると方向が見える事があります。

しかし、最後に判断するのは自分自身です。
実社会での遭難に注意しましょう!!。

季報〔R & V〕第45号&46号

発行者：本図一統

発行所：ACC-J 茨城 305-0861 茨城県つくば市谷田部2268
木村 一 方

編集者：木村 一

印刷所：やさど印刷



岩壁、沢、冬山のクライミング集団